
Absolute Zero

DoubleS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Absolute Zero

【Nコード】

N2550Z

【作者名】

Doubles

【あらすじ】

ある雪国の商店街の薬局の高校生の一人息子、三条霧矢は謎の和服少女と出会う。彼女は霧矢の家に泊めてくれという。霧矢は断つたが押し切られる。しかし、その子は普通の人間ではなかった！

雪国の商店街にて

「ば……バケモンだ……！」

あたりには男の恐れおののく声以外は何も聞こえない。冷たい空気の途中でその男は恐怖を浮かべていた。

私は地べたを這いずり回りながら離れようとする男を見下した。

この男は敵だ。生かしておけば必ず私たちを殺そうとまたやってくる。

だから殺さなければならぬ。

そう、この男の部下は全員殺した。百人は軽く超えていたと思う。あたりには氷漬けになった兵士の死体が群がっている。

「……私は、アブソリュート・ゼロ。一切の慈悲を見せない絶対零度の冷血よ。残念だったわね。己の愚行を悔いるといいわ」

男は必死で私から逃げようとするが、もはやそれは何の意味もなさぬ。

男は抵抗の甲斐なく、あっという間に氷に閉ざされる。私はそれを打ち砕いた。まだ凍っていない生温かい赤い液体を浴びながら私は思った。

こんな殺し合いの続く世界はもう嫌だ、と。

？

十二月九日 日曜日 雪

人生を通して人は様々な人と出会う。気の合う仲間を見つけるこ

ともあるだろうし、生涯のパートナーとなる相手を見つけることもあるだろう。あるいは、自分の宿敵となるような人にも出会うことがあるのかもしれない。

しかし、こんな出会いがあるとは誰が予想できただろうか。この科学に支配された現代においてこんな相手と出会いを果たすことになるとは考えられなかった。

とある雪国、駅前商店街での出会いだった。

クリスマスも近づき、粉雪がちらちらと舞うこの季節で、しかも日曜日だというのに、この商店街はまるで人気がない。なぜなら、この商店街は郊外の大型店舗に押されて、あちらこちらでシャッター街と化してしまっているからだ。

今となっては、開いている店の方が少なくなっている。クリスマス商戦のシーズンにもかかわらず、活気というものがまるで感じられない。

商店街のある店で、三条霧矢はぼんやりと焦点の合わない目で、レジの隣のカウンターに座って、数学のノートを眺めていた。

霧矢は高校の宿題をやりながら薬局の店番をしていた。医療機関の処方箋も受け付けているこの薬局は、この商店街では珍しく黒字の店だ。ただ、日曜日の午後ということもあって客は一人も来ない。薬剤師である母親も風邪を引き、奥で寝込んでいるため、仕方なく霧矢が店番をしているというわけだった。

ここ数年は暖冬が続いていたが、今年はとて冷え込んでいる。初雪も平年より二週間ほど早く観測され、平均気温も低い。降雪量はまだ大したことはないが、気象台では今冬は豪雪になると予測している。

少し暖房の効きすぎた店内で霧矢はあくびをする。高校に入ってから半年以上が経つ。親からは家業を継ぐために薬学部へ行けと言われているが、数学も理科もぱっとしない成績だった。放物線の描

かれたグラフを見ながらため息をついた。

そんな彼は妙な少女と出会うことになった。

霧矢が居眠りをしていると、店の戸が開き冷たい風が吹き込んでくる。ハツと目を覚まして客の方を見る。

「いらつしやいませ……………」

普段着とは思えない格好をしていた。水色の白い水玉模様の着物を着て、山吹色の帯をつけている。元旦の初詣や成人式のような恰好だった。

しかし、とても似合っていた。肌は色白で可愛らしく、長い黒髪を北風で揺らしながら穏やかな笑みを浮かべている。年齢的には霧矢と同じくらいか少し下といった感じだ。

見とれていると、その少女は霧矢とカウンター越しに向かい合った。

「…………何を求めですか……………」

じっと見つめられ、窮した霧矢は苦し紛れにお決まりの台詞を発した。

「…私は、居場所が欲しいです」

……………は？ 思考が停止し、霧矢の目は文字通り点になった。彼女が何を意図してその言葉を発したのが全く理解できなかつたのだ。

「…………居場所が欲しい…あの、何が言いたいんですか」

「ここに一晚泊めてください」

自身の可愛らしさを最高にアピールしたスマイルで、何かとんでもない要求をしてきた。すでにもう処理能力を大幅にオーバーしている霧矢の頭脳をさらに駆使し、返す言葉を検索する。

検索完了。適切な返答が一件見つかりました。

「申し訳ありませんが、お断りします」

「何でよ〜」

駄々をこねる子供のように口を尖らせる。何かイラツとくるのを霧矢は感じた。

「……そもそも何で見ず知らずの他人をうちに泊めなきゃならんだ！ それに、見たところお前は中学生か高校生だろ！ そんなことできるか！」

半分怒り口調でその妙な女にきっぱりと拒絶の意志を示した。しかし、この女はそれを意にも留めなかった。

「…自己紹介するね。私の名前は北原霜華^{きたはらそうか}。霜ちゃんと呼んでくれてもいいよ。あなたのお名前を知りたいな」

「……僕の話聞いてた？」

「まあ、それとこれは別つてことで、いいじゃない名前くらい」

この妙にハイテンションな和服少女の扱い方の説明書があったら霧矢は今月の小遣いを全部差し出す用意がある。上手く扱える人間がいたら今すぐ来てくれ！

「僕は三条霧矢、話を戻す。お茶くらいは出してやるけど、泊めるわけにはいかない」

レジの隣にあるポットから急須にお湯を注ぐ。

「お茶はいらないけど、泊めてほしいの〜」

煮詰まった緑色の液体の入った湯飲みを乱暴にカウンターに叩きつけた。霧矢としては相手を睨みつけたつもりだったが、霜華には全く応えていない。

それからいろいろな応酬があったが、お互い譲歩せず、時間ばかりが過ぎて行った。

「…じゃあ、まあ北原霜華とやら、何で僕の家泊まりたいのか理由を聞いてやる」

「…簡単に言うて行くあてがないから」

ここ数日前からこの近辺をうろうろしていたらしい。しかし、雪の降る時期に家出をして、しかも薄手の和服で過ごすなど信じられなかった。この季節で一日生き延びただけでも、この年齢の女の子にとっては奇跡と言ってもいい。

「……………何で、家出なんて真似をしたんだ。この時期にやるなんてアホとしか言いようがないぞ。凍死すること間違いなしだ」

「私、アホじゃないもん！ 私は並の人間とは桁外れに寒さに強いから、凍死するなんてことはまずないんだよ」

「ああ、そうかい。行くあてがないのなら、友達の家にも行つてろ。」

「じゃあ、霧君が私のお友達。よろしく。」

握手の手を差し出してきたが、霧矢はスルーして自分のお茶に口をつける。

「前言撤回。それと変なニックネームで呼ぶな。だったら、警察に行け。場所はこの通りを東側に行った駅の近くにある」

「警察で解決できるなら苦労しないんだよ。だから、一晚泊めてよ。できれば、『好きなだけここにいてもいい』くらい言ってくれないかな」

小さい子供がお菓子を親にねだるように、手をバタバタさせる。

「霧矢。お客さん？」

店の方が騒がしいのに気付いたのか、母親がのどの潰れた声で奥の方から呼びかけてきた。霧矢は即座に否定する。

「いや、ちよつと違う。単なる……」

そこまで言つて霧矢は止まってしまう。この得体の知れない女をどう説明すべきだろうか。客ではないのは確かだが、他に上手く説明できる語句が見つからない。

「どうも！ 霧君の友達の北原霜華ですう。おじゃましてま〜す！
奥の方に向かって底抜けの明るい大声で、事実と異なることを叫んだ女が一人。

「そう、ゆっくりしていつてね。私は風邪でおもてなしできないけど、ごめんなさいね。うちの子は根暗で人が苦手だけど、よろしくお願ひね」

「うるさいよ！ 病気なんだから大人しく寝ててくれ！」

母親の曲がり曲がった評価を受け、霧矢は憤慨する。逆に待つてましたとばかりに霜華は目を輝かせる。

「霧君のお母さんって今寝込んでるの？」

「…単なる季節性の風邪で、特に大した看病をする必要はない、ここで話題は終了させるぞ！ お茶を飲んだらさっさと交番に行つてこい！ それで解決だ！」

息切れしながら怒鳴り声をあげ、もうぬるくなっているお茶を一気に飲み干した。しかしこのマイペース女は立ち去ろうともしない。ポンと手を叩き、閃いた顔をする。

「…ああ、簡単なことじゃない。」

「そうだ、交番に行つてそう言えば万事解決だ。」

「そうじゃなくて、霧君の言葉からすれば、お茶を飲み終わるまでここにいていってことだから、そのお茶を飲まなければ、私はずつとここにいていってことだよな。」

霧矢の怒りは沸騰点に達しようとしていた。しかし、この女には何を言つても通用しないということももうわかつている。しかし、暴力を用いて彼女を排除するのは気が進まない。というのも、おそらく暴力を振るってきたことをネタにここに居座ろうとするくらいやりかねないからだ。

「…薬事法を犯すしかないのか？」

「え？」

「頭がおかしくなった人用の薬が、うちにはあるんだけど、第一類の医薬品だから、薬剤師以外、つまり僕が扱うと法律上いろいろとまずいんだよね…そこまでして飲ませる必要があるのかどうか考えてる。」

またしても子供のように手をバタバタさせて抗議する。

「私、頭おかしくないもん！ いいじゃん、飲み終わるまでここにいたって！」

「その飲み終わるのがいつになるかが問題なんだよ！ お前そのお茶を今日中に飲む気ないだろ！」

二人で口喧嘩を続けていると、店の戸が開き老人が入ってくる。

「…ごめんください。おお、霧矢君。今日は一段と冷え込みますのう」

腰の曲がった白髪の老婆がよろよろとカウンターに近づいてくる。霧矢は椅子に案内する。

「本当に、今日は寒いですね。母さんも風邪を引いちゃいまして、いつものお薬ですよ。母を呼んでくるので、少々お茶でも飲んで待っていてください」

お茶を入れると、霧也は奥の方に母親を呼びに行つた。古い木造の作りの家だけあって、部屋から出ると一気に温度が下がる。

「母さん、三川のおばあちゃん」

よろよろと立ち上がると、上着を羽織つたまま店に出ていく。

「そういが。なかなか大変なことになつとるの」

「はい、でもこういうのも面白いかなつて」

店では霜華と三川老人が話で盛り上がっていた。

「おお。理津子さん、風邪とか聞いたが、大丈夫かの」

「ええ、ちよつと熱が出ているだけで、数日もすれば治るはずです」

理津子はふらふらとレジの椅子に腰を下ろした。霧矢はリストを受け取り、薬を棚から取り出していく。

「……………」

若年、中年、老年の女三人が話に花を咲かせているのを横目でちらちらと見ながら、薬を袋に入れていく。理津子は袋に書かれている薬の名前と中身が間違っていないか確かめ、薬を三川に渡す。

「ありがとうございます。お大事に」

三川が帰ると、あたりはもう薄暗くなっていた。雪もどんとどんと強くなり、積雪は深さをさらに増していく。

「…ところで霜華ちゃんは何で和服なんて着てるのかしら。お稽古とかの帰り？」

「普段着、いつもこんな感じですよ」

「そう、今にしては珍しい子ね。それにしてもこんなに可愛いお友

達がいるなんて、霧矢も隅に置けない男の子ね。」

そんな感じで、霧矢は二人の会話から置き去りにされる形で一人、これで五杯目となるお茶を飲んでた。それはそれでまた好都合なので再び宿題に取り組み始める。今週の課題はとても多く、今こうしている間も時間が惜しかった。

耳栓をし、二人の会話が入ってこないようにする。再び課題に取り組み始めることにした。とりあえず、集中、集中。問題を解くことだけに専念しよう。

母親から何回か話を向けられることがあったが、耳栓でよく聞き取れないので、相槌をうちながらすべて適当に流した。どうせこの類の話はするだけ時間の無駄というものだ。それよりはさっさと週末課題を終わらせて、好きなことをする時間が欲しい。

三十分ほど経っただろうか、苦労したが、プリントの問題をすべて解き終わり、丸付け、復習も終わった。これで今週の課題は終了だ。心の中で自分に拍手しながら耳栓を外した。

「それじゃ、こんな隙間風の吹き荒れる古い家だけど、二階の部屋が空いてるから、好きに使ってくれていいわよ」

「ありがとうございます。ほんと感謝感激です。いや〜霧君もさつきはダメとか言ってたけど、首を縦に振ってくれてほんとによかったです」

（ちよつと待て。もしかして、僕は耳栓のせいでもない事態を招いてしまったのではないだろうか…）

少なくともあの母親は薬剤師の資格を取れたことが不思議なくらいの天然だ。人の言うことを簡単に信じてしまう上に、どうしようもないボケをかますこともしょっちゅうだ。

「……母さん、そいつ、うちに泊める気か？」

「ええ。だつて行くあてもないって話だし、お母さんもお父さんが単身赴任してからどうも寂しくてねえ。好きなだけいてくれていいからね、霜ちゃん」

何も言うことができずに霧矢は口をパクパクさせていた。自分の母親が見知らぬ妙な格好の女の子を二つ返事で家に泊めるほどの隙だらけの人間だったということは、息子に衝撃を与えるのに十分だった。

「ところで、こういう押しかけ系の女の子って大体不思議な力が使えるとか、いろんな設定を持つてるものじゃない。霜ちゃんも何かないの？」

いきなり変なことを母親が口走り始め、霧矢はノートを床に落としてしまう。

「霧矢がよく読んでる本だとそういう展開が多いのよねえ」

霧矢が「人のラノベや漫画を勝手に読むな！」とか、「何でそんな発想になるんだ！」と突っ込む前に、真顔で霜華はこう答えた。

「はい、あります。私、水の魔族のハーフで氷使い。つまり、簡単に言うと半雪女なんです」

ボーイ・ミーツ・アイスガール 1

時が凍りついたかと思われた、が、フリーズしたのは霧矢だけだった。母親は目を輝かせてうつとりとした表情になっている。

「父親は普通の人間なんですけど、母親が水の魔族で氷使い、まあ、わかりやすく言ってしまうえば、雪女なんです」

「へえ、だからそんな色白で可愛いし、着物で過ごしているのね」
「数日前まで姉妹二人一緒に暮らしてたんですけど、その……喧嘩しちゃって……引っ込みがなくなってる……」

しばらく経って、三条霧矢の脳は再起動を終え、エラーチェックも終了した。

この二人の会話を聞いて思ったことはただ一つだった。

結論、二人とも電波か底抜けのアホだと。異論は認めない。認めてたまるものか！

「あら、どこか行くの？」

もうたたくさんだ。霧矢が、夕食までの時間は本屋にでも行って時間を潰してこよう、と考えるのにさほど時間はかからなかった。壁に掛けてあるコートを羽織り、ガラガラと扉を開けて出ていく。

もう少しするとスキー場がオープンし、夜でもナイターの照明でとても明るくなるのだが、今は雪明りだけで暗かった。寂れた駅前の商店街を抜け、駅裏にある書店を目指す。過疎化の進んだこの地域だが、それなりに大きな駅があるのが特徴だ。駅の自由通路を抜け、表に出る。信号が青に変わるのを待っていると、首に冷たいものが当たるのを感じ飛び上がってしまう。

「霧君！ 私もついて行っていい？」

振り返ってみると、薄着の和服女が最上級の微笑を浮かべて立っていた。

「……寒くないのか、そんな格好で」

「大丈夫。これでも半分は雪女だから、常人よりも寒さに強いのです。そのかわり暑さには弱いだよ。しくしく夏はつらいよ」

自称半雪女は妙なテンションで電波をまき散らしている。書店に行くつもりだったが、気分が萎えてしまった。霧矢は方向を変える。「ちよつと、霧君、どこに行くの」

しばらく霧矢は行くあてもなく街をうろろろしていたが、いくら無視しても霜華は応えることなくついてくる。寒風の吹きつける中、体力も限界に近づいてきた。腕時計を見てももう七時近くになっている。

「腹減った」

気の抜けた声で弱音を口に出してしまう。

「そうそう、理津子さんからお金預かってる。二人で晩ごはん食べなくてって言った。それと私に着替えを買ってきなさいって」

あのバカ母……よりによって、そんなことをさせる気が。

「衣料品店はその右の店だ。お前だけで行ってこい。僕は外で待って……」

最後まで言い終わる前にくしゃみをする。体も冷え切っている。

体が大事かプライド（？）が大事か。それが問題だ。

「すいません。この子の服ください」

霧矢の選択は前者だった。情けない。しかし暖房の効いた店内は冷え切った体にとても優しかった。奥から店のおばさんが出てくる。

「はいはい、おや薬局の霧矢君じゃないかい……て、かわいい子だねえ。」

しかし、考えてみれば女の子の服の買い物でここにいるのはまずいような気がする。上着やズボンならまだしも、下着うんぬんになったら男である霧矢はここにいられまい。

「……おい、お前何を買う気なんだ。」

「とりあえず、お風呂入りたいたいから、下着の替えは必須でしょ。それから……」

ガラガラ、ピシヤリという音を立てて、その場から男はいなくなった。先ほどの自問自答は無意味だった。だったら最初から外で待ってる決めておけばよかったと霧矢は後悔するとともに、母親からうつされたウィルスが寒さで活発化していくのをはつきりと感じた。

二十分ほど待つと、霜華が手提げ袋を持って店から出てきた。何やら随分と満足した表情だ。対照的に霧矢の唇は紫色になり、顔は強張っていた。

二人で商店街を歩きながら、夕食をとる店を探す。途中にある喫茶店を通りかかると霜華がここに入りたと言ってきた。

「ここは、嫌だ。知り合いがいる」

「ええ〜。私はこの店が何となく気に入ったな〜」

「ダメだ。他を当たろう」

「ええ〜」

数分ほど言い争ったが、結局霧矢が折れた。寒い中これ以上外にいるのは限界だったため仕方がなかったのだ。

「いらっしやいませ…って霧矢じゃん。それにその和服の子…もしかして…」

「晴代、お前の考えは間違っている。僕たちは客だ。さっさと通せ。」

喫茶・毘沙門天は二人以外に客がいなかった。古くからの知り合いで、同学年のウエイトレスが空いている席に案内した。

「僕たちの高校ってバイト禁止じゃなかったっけ。」

「お互いさまよ。ていうか、自分の家業の手伝いして問題でもあるわけ。あんただっていつも薬屋の店番をしてるでしょうに。それより注文は？」

「ホットコーヒー、ピラフ」

「アイステイー、オムライス、デザートにアイスクリーム」

「この寒い中アイステイー、アイスクリームかよ」

「だ、か、ら、私は寒さには強い。真冬の南極でもきつと大丈夫だから」

もはや呆れて何も言う気にはなれなかった。この半雪女こと北原霜華は何者なのか。ショートヘアの似非ウエイトレス（幼馴染）がオーダーを取り、厨房の方へ歩き去ると、霜華は店においてある女性誌を読みはじめた。和服を着ていることを除けば、普通の女の子そのものだ。雪女とは信じがたい。

「…お前さ、本当に雪女なわけ？」

「半分はね。もう半分はれっきとした人間だよ」

「証拠とかあるのか？」

「ちよつと、そのコーヒー借りるね」

半分ほどコーヒーが残っているカップを、手を伸ばして引き寄せ
る。

「……で、証拠が見たいんですよ」

「ああ、僕を納得させることができれば、お前が雪女だって認めてやる。」

「…『半』雪女！ これでどう？ 本物の雪女より力は劣るけど、これくらいなら楽勝よ」

カップを受け取って中を覗いてみると、先ほどまで湯気の立ち上っていたホットコーヒーが凍りついていた。

「……嘘……だ……ろ……」

「嘘じゃありません。これで信じてくれたかな？」

「……まだ、もつとはつきりとした証拠がないと信じられない！」
うーん、とテーブルの上を見回す。何かいい実験台がないか探しているようだ。

お冷を少しテーブルの上に垂らした。表面張力で少し盛り上がった水に二人の顔が映っている。

「種も仕掛けもありません。調べたかったらご自由に」

水を指で触ってみるが、やはり何の変哲もない水だった。

「よ〜く、見せて」

優しく息を吹きかける。とても冷たい空気の流れを霧矢は感じだ。次の瞬間、さつきまでの水は固体となっていた。手で触れてみてもそれは紛れもなく氷だった。

「…これでも満足できないなら、今度は霧君に直接……」

ニヤリと笑って、息を吸い込む。

「わかった！ わかった！ 信じる！ だから僕を狙うのだけは勘弁してくれ！」

昔話のように氷漬けにされるのはごめんだった。

「……で、何でこんな雪女がこんな人里をうろろしてるんだ」

「だから、『半』雪女だつて言ってるでしょ！」

「随分と『半』にこだわるんだな」

「私だつて半分は人間なんだし、化け物扱いされるのは嫌だよ」

「雪女としての生活と人間としての生活どっちが長いんだ？」

「ここ数年は人間に近い生活してるよ。町で買い物に出かけたりもするし」

「暑さに弱いとか言ってたけど、お前さつき風呂に入るって言うってたよな。そんなことしたら自殺行為じゃないのか」

「一応説明のために、半雪女だつて言ってたけど、正確に言うと水の魔族のハーフで氷の術の使い手。おとぎ話に出てくるような雪女とはいろいろ違うから。お風呂だつて普通に入れるし、暖房の効いた部屋でも平気。ただ、気温が三十度を超えると個人的な体力の問題できつい」

「ありがとうございます！」

会計を済ませ、店を出る。街灯の明かりが白い道路を照らしている。どうも母親の風邪をうつされたようだ。悪寒がする。

「……さつさと帰るぞ。宿題も終わったことだし、久々にゲームでモシたい」

「私は強いよ〜」

「何か言ったか？ 今日是一人用ゲームをするつもりなんだが」

ぶく、とむくれてまた子供ののように手をバタバタさせる。その子供らしさは一部の人間を除いてはイライラしかもたらさない。霧矢もその一部の人間ではないため、こめかみに筋が浮き上がってくるのを自分ではつきりと感じる事ができた。

「…お前、いくつなんだ」

「女の子に年齢を尋ねるなんて野暮だよ」

「うるせえ！ さっさと答えろ！ さもないと…」

「パーティゲームか格闘ゲームみたいな二人以上で遊べるゲームと一緒にやらせてくれるなら、答えてもいいよ」

この女はつかみどころがなく、どう扱ったらよいのか、さっぱりわからなかった。ただ一つ言えることは、三条霧矢にはアスピリンが必要になるだろうということだ。

「……好きにしる。で、お前いくつなんだ」

「見た目で判断すると、きつと意外に思うよ。実は十八歳」

ずっこけて顔から新雪のまだ柔らかい雪壁に突っ込んでしまう。

ありえない。精神年齢も外見年齢も明らかに下のはずなのに…

「そんなにビックリすることかなあ。まあ、仕方ないか」

「どう見ても十四、五にしか見えなかったんだが…」

霧矢は霜華に体をつかまれて雪壁に埋まった頭部を引きずり出された。

「霧君は何歳なの？」

「十六歳、高校一年生だ！ だが、外見も精神年齢もお前より上のはずだ！」

顔を真っ赤にしながら、叫ぶようにして歳を公開した。

「年下の男の子か……私的にはストライクゾーンだよ。ぎゅっ！」

変なノリで腕に抱き付いてくる。即座に乱暴に振り払った。霧矢としては年上に興味がないわけではないが、彼女はいろいろな意味で明らかに年下だ。

悪寒が走り、くしゃみをする。どうやらさっさと帰らないと、明日学校に行けなくなるかもしれない。早足でさっさと家に戻ることに

にした。

「ただいま。葛根湯どこにあったっけ？」

「あら、霧矢も風邪引いたの？」

「誰かさんのをうつされたみたいだよ。くそ……」

悪態をつきながら、霧矢は甘ったるく苦い褐色の液体の瓶をあおった。

(明日は学校なのに困ったな……)

「ほうほう、何を飲んでいるのですかね」

「うるさい、半雪女は風邪薬なんて飲んだことすらないだろ」

「風邪引くなんて、これだから人間は。私なんて引いたことはないわよ」

「雪女がどうこう言う前に、バカだからだろう」

首筋に息を吹きかけてきた。推定マイナス十度の空気を受け、震え上がる。

「風邪が悪化するわ！ とりあえず、もうゲームはキャンセルだ！

僕はもう暖かくしてさっさと寝る！」

「えー。年教えてあげたのに。約束が違うよう」

「風邪で明日学校に行けなくなったらどうするんだ！ この時期の生徒会の仕事は忙しいんだよ！ ただでさえ人手不足なのに、僕が欠けたらさらに大変なことになるわ！」

しばらく、ブーブーと不満を言っていたが、結局、霧矢のゲームを貸すことでこの場をおさめた。

「おやすみ」

夜十一時になって、やっとゲームをしていた霜華は霧矢の部屋から出て行った。今日一日は奇想天外としか言いようがなかった。半雪女などという未知の生物と出会ってしまっただけでなく、それが自分の家の居候になってしまった。

(ああ、僕の平穩はどうなってしまっのか……)？

ボーイ・ミーツ・アイスガール 2

十二月十日 月曜日 曇りのち雪

気が付いたらもう朝だった。時計を見ると、六時半。いつもと起きる時間は変わらない。東の空が朝焼けに染まっていた。ブルーマウンデー、万歳。しかし、ベッドから起き上がるうとしても、頭痛、体のだるさがひどい。

結局、三条霧矢は母親の風邪をもらってしまったようだ。

「……………熱っばい。体温計…体温計…」

ふらつく足取りで、机の引き出しを漁る。あった。今となつては非常に珍しい水銀体温計を軽く手で振って、脇に挟む。

(今日は絶対に学校に行かないといけないと言うのに…困った…)

霧矢が熱でぼーっとしていると、部屋のドアがノックされる。返事をする、半雪女がぼさぼさの髪に、目にクマを作って入ってきた。ただ、今日は普通の洋服姿だった。おそらく昨日購入したものだろう。

「きりく〜ん。見事に期待を裏切ってくれたよう…」

「……………あの部屋は隙間風がひどいからな。眠れなくても無理はないぞ。懲りたのなら他の宿を見つけろことだ」

「ちがうよ〜。霧君だって男の子だから、真夜中にこっそり私のところに来るだろうって思って、来たら氷漬けにしてやろうと待ち構えてたのに……………来ないんだもん……………」

「……………あいにく、僕は今体調が悪い。突っ込みを入れる気力もない脇の下から体温計を取り出すと、三十八度五分。熱があるのは確かだ。不本意だが、体のことを考えると、今日は休むべきだろう。

「霜華、その携帯取ってくれ」

しかし、彼女は動かなかつた。キラキラした目で霧矢を見つめている。

「おい、どうした。携帯を取ってくれ、あんまり動きたくない」

「……初めて、霧君が私の名前を呼んでくれた……」

恍惚とした表情で机の上にある携帯電話を手渡した。霧矢は受け取ると、意識の朦朧とする中、昨日の似せウエイトレスこと同級生、かみかわはるよ上川晴代にメールをする。

今日、僕の代わりとして生徒会の仕事を手伝ってほしい。単純な作業だから、部外者でもできるはずだ。

返信が来た。意外とああ見えて朝には強いようだ。だが、眠いのか普段は大量に使う顔文字がなく、淡々とした事務的なメールだった。昨日はあんなに元気だったのにどうしたの？

風邪を引いた。熱が出る。今日は学校休む。

報酬は？

なし

じゃあやだ。

だったら、何がいいんだ。

現金

無理

じゃあ、お菓子。

了解。じゃあ、今日はよろしく頼む。

「おい、お前今日もうちに泊まる気か？」

「……今更帰ってもしょうがないもん」

口を尖らせている。

「……お前、姉としてそこはどうかんだ」

「別にそんなのどうでもいいもん。でも、どっちかって言うとなの子の方が頭はいいんだよね」

「それは、聞かなくてもわかる」

冷たい風が吹き付けてくる。震えが走り、くしゃみをする。霜華の攻撃は風邪を引いた人間にとっては致命的だ。ふらつきをこらえながら、慎重に階段を下りる。

「あら、霧矢。今日は学校のはずでしょ。母さん、昨日よりもよくなったけど、まだ朝ご飯は作れそうにないから……」

こたつに入って朝のニュースをどこか焦点の合わない目で見ている。

「……いらん。僕も風邪がひどくなった。万が一インフルエンザだつたらまずいから、先生んとこ行ってくる。保険証」

鈍い動きで、引き出しから保険証と幾ばくかのお金を取り出す。

霧矢は受け取ると、こたつに潜り込む。本当に面倒なことになった。

「……八時になったら起こしてくれ。学校に電話かけるから」

「……私も……ちよつと寝る……」

「……私も……」

時計が八回鳴ると、ゆっくりと起き上がる。母親はこたつで、霜華はこたつの外で熟睡していた。学校に欠席の連絡をし、行きつけの医者予約をした。朝一番で行けばそれほど待たずに済むはずだ。店の石油ストーブに火をつけた。開店まであと一時間弱。

居間に戻ると、霜華は起きていた。暇を持て余しているといった感じの目つきをしている。

「お医者さんって、一人で行くの？」

「ああ」

「そんな調子だと無理だよ。すぐ近くにあるならいいけど、とりあえず私もついていく」

「すぐ近くだ。というより、この家の隣だ。この家から徒歩三十秒未満。昨日お前はここの商店街の何を見ていた」

「へ……」

「大体な、処方薬局ってのはな、医者隣にあるってのが相場なんだよ。だから、ついてこなくていい。というより、ついてくるな」

とても不満そうな顔つきをして霧矢を睨みつける。しかし、気に留めている余裕はなかった。とりあえず、着替えておかなければいけない。霜華を無視して自分の部屋に戻り、箆笥から適当に私服を

取り出す。

「母さん、今日、店どうするんだ」

「座ってるだけなら大丈夫よ。レジとか、棚の整理とか、接客とかは霜ちゃんに手伝ってもらうつもりだから」

大いに問題だと霧矢は思う。こいつなら人に違う薬を渡したりしかなない。

「大丈夫よ。薬は私がやるから。でも、それ以外はお願いしようと思うの」

不安この上ない。しかし、他に良い方法がないのも確かだ。

「……………私、手伝ってもいいんですね！」

目を輝かせている半雪女はいそいそと店のエプロンを身に着ける。似合っているのだが、中身が伴っているのかどうか…

八時五十五分。店のカーテンを開けて、営業開始。霧矢は隣の診療所に行く。

一番乗りだけあって、誰もいなかった。お互い顔見知りの医者にかかり、流行性感冒との診断を受けた。とりあえず、インフルエンザでなくて一安心だ。注射を打ってもらい、処方箋をもらって終わりだ。中身は典型的な風邪薬三種類。解熱、鼻水止め、咳止め薬。これをうちの薬棚から取ってくればいい。一通り終わって待合室に戻ると、老人でこった返していた。

「おお、薬局とこのせがれでねえかい」

よく店番をしている関係で、霧矢は母親同様にこの町のほとんどの老人には顔を覚えられているし、霧矢も相手が誰だか大体わかる。少し雑談でもしようとも思ったが、風邪をうつさないためにもさっさと診療所から出ることにした。

「いらつしやいませ！」

霜華が底抜けの明るい声で出迎える。一瞬、言葉に詰まってしま

う。

「……………ただいま」

ゆつくりと戸棚から処方箋に書かれた薬を戸棚から取り出す。念のため、母親にも確認を求めた。

「……説明なんていらん。この風邪薬を扱った回数は軽く百は超えてる」

「ねえねえ、今日はどれくらいお客さん来るの？」

「それなりに多いぞ。覚悟しとけ。僕は寝る」

「霧矢、お昼ご飯食べましょー！」

母親の声で目が覚めた。時計を見ると一時近くを指している。注射が効いているのか、食欲も多少戻ってきている。

「……随分良くなったんだな」

「まだ、本調子じゃないけどね。それよりも霜ちゃんがお昼作ってくれたのよ」

風邪は人にうつすと治る、薬局の人間がこんな迷信を信じるのもどうかと思うが、この様子を見る限り、否定することはできなかった。

「……いただきます」

病人に配慮したのか、昼食はうどんだった。食べてみたが、味に遜色はない。見かけによらず料理はそれなりにできると思われる。

「霜ちゃん、結構料理が上手いのよ。このかき揚げも霜ちゃんが揚げたものだし」

「まあ、確かに美味しい」

ニコニコと笑っている。まともな一面もあるようだと言った霧矢は思う。

「……お前の妹、今何してんだらうな」

「さあ、食べるものがなくて困ってるんじゃないの？」

「地味にひどい姉だな、お前」

「あの子、料理はできないし、兵糧攻めにしておけば、そのうち泣きついてくるわよ。私がこの商店街一帯にいることくらい、あの子ならわかるだらうし」

話を聞く限りでは、霜華の妹は几帳面だが、人見知りな人間、い

や半雪女らしい。姉妹でかくも性格が反対だとは意外なことだった。「ごちそうさまでした。美味しかった、ほめてやる」

「……………何で、目をそらしているのかな？」

「薬、薬と……………」

ぬるま湯で錠剤を流し込む。朝と比べると順調に回復してきている。この調子なら明日学校に行けそうだ。

「それじゃ、霜ちゃん。午後も頑張りましょ」

「……………こいつ大丈夫だったのか？」

母親は意味深な笑顔で霧矢を見ている。一応問題なしと判断して、自分の部屋に戻ろうとしたとき、霧矢の携帯が鳴った。

新着メール、一件。生徒会長からだ。

ゴリア、三条！ この忙しいときに休むとは何事じゃい（怒）！ 明日、首洗って待ってなさい！ もし、明日も休んだら私は殺人容疑で警察のお世話になるかもしれないわよ！

メールは赤の大文字で埋め尽くされていた。これはまずいことになった。彼女を怒らせたら命はないと思った方がいい。

忙しいときにすみません。風邪引きました。代理が放課後、生徒会室に行くはずなので、今日のところはそれで勘弁してください（汗）

それじゃ、全然足りないのよ。昨日の大雪で電車が止まっているせいで、今日は全校のほぼ半分が公欠！ 生徒会も動けるのは私を入れて三人！ 近くに住んでるあんなだけが頼りだったのに、これじゃ間に合わないわよ！

すみません。とりあえず、一年三組の上川晴代っていう女子が代理で来るはずですよ。こきつかってやってください。

とにかく、明日は絶対に来なさい！ いいわね！ さもなくば、あんたはこの写真みたいになるわよ……………

画像が添付されている。

（会長が添付メールを送るなんて珍しいな……………うお！）

画像を開いた瞬間、霧矢は大声を上げてしまう。二人ともびっく

りしたようで、霧矢の方を見てまばたきをしている。

(おいおい…こんなグロ画像どこで手に入れた…)

「何だったの？」

「……会長が脅迫してきやがった……子猫が……いや、何でもない十八を過ぎているとはいえ、中身は霧矢よりも年下だ。こんなことを女の子に話すのはよくない。見せられるわけがない。」

「霧君、顔が青ざめてる」

「……とりあえず、僕はさっさと風邪を治さないと命が危ない。というわけで、店よろしく」

一番大切なのは自分の命。店などどうでもいい。三条霧矢は県立浦沼高校の生徒会長に命を狙われている身だ。さっさと治して、自分の身の安全を確保しなければならぬ。

自分の部屋に戻り、ベッドに横たわる。携帯ゲーム機を取り出して適当に遊びながら時間が過ぎるのを待っていた。窓の外を眺めてみると、相変わらず雪が降り続けている。今週末に商店街のはずれにあるスキー場がオープンする予定だったが、繰り上げても構わないくらいに積もっている。

月曜日だと言つのに部屋でゲームをするこの感覚、実に気分がいい。時間はものすごいスピードで過ぎ去り、気が付けば夕方になっていた。

「……霧矢、ご飯よ！」

完全に回復した母親の声が聞こえた。霧矢もほぼ回復してきているのだが、まだ母親には遠く及ばなかった。

「……今日、店はどうだったんだ？」

「ばっちり。霜ちゃんのおかげで大成功よ。いっそ、もう住み込みのアルバイトにしてしまおうかと思うくらい」

「……本当にか？ こいつに任せて苦情とか出なかったのか？」

「一つもなしだよ！ 霧君も少しくらい私のこと信用してくれたっ
ていいじゃない！」

話を聞く限りでは、今日一日というとても短い時間で、すでに薬

局の看板娘として定着してしまっただけ。それはそれで、喜ばしいことなのだが、住み込みのアルバイトになってしまうのは、霧矢としては納得がいかかった。

「というわけで、住み込みアルバイト、北原霜華。よろしくお願いです。」

「大問題だああああ！」

大声を上げてしまおうが、二人は気に留める様子もない。

それから、何度も霧矢は抗議したが、受け入れられず、諦めざるを得なかった。こんな得体の知れない半雪女をアルバイトに雇ったりしようものなら、問題が発生することは明白なのだが、天然な母親はそんなことはお構いなしだ。

呆れ顔で霧矢は黙ったまま、夕食を頼張る。確かに、料理はとても上手なのだが、霧矢は何となく霜華のことが気に入らなかつた。もともと、人付き合いの苦手な霧矢にとって、彼女は明るすぎた。一緒にいるとどこか疲れてしまうのだ。半雪女とかそういう問題ではなく、性格的な相性に問題があった。

「……お前、ここに来る前はどこに住んでいたんだ？」

この話題を続けているのもバカらしいので、話を切り替えることにした。

「……この町の西側に山があるでしょ。その山の森に、魔力を持たない人には見えないゲートがあるの。そのゲートをくぐった先の街に住んでた、つまり、異次元の世界」

「異次元って……」

「別に、ゲートが見える人なら自由に行き来できるよ。見えなくても、見える人の手助けがあれば行ける」

「………どんな世界なんだ」

「私のような水の魔族をはじめとして、いろんな魔族が暮らしてる。でも、この世界にあこがれて、私みたいに、たまにこっちに遊びに来るのも結構多いんだよ」

彼女の母親もこの世界が好きでよくこちらに来ていたらしく、そ

の時父親と出会って恋に落ちたらしい。

「でもね、最近、物騒になってきてね。先代の統治者が亡くなって以来、後継者争いが激化して、いろいろとやばいことになってきているの。」

権力闘争とはどこの世界でもあるもののようなのだ。そここのところは人間も魔族も大差はないのだと妙なところで納得する。

「……今は、内戦状態に近いんだよ。それで、妹に私と一緒にこっちの世界に逃げようと提案したんだけど、見事に拒否された。それで、喧嘩になって……。」

「なるほど……。」

「妹は他のみんなを置いて自分たちだけ逃げるなんてできないって言ったんだよ。」

事実、脱出を図って失敗して力尽きた者も珍しくないらしい。他のみんなも連れて行こうとすればそこで犠牲が出るかもしれない。

「ローリスク、ローリターンを選んだわけね。」

「私たち姉妹にとっては、ローリスク、ハイリターンだったんだけど……この世界の人間の生活のこともよく知ってるし、ハーフだから魔力の問題もさほどないし。」

彼女の話聞いてる限りでは、逃げるか逃げないかを言い争った結果、家出したというより、妹が自分を追いかけてくることを見越して、自分の意志でこちらの世界に来たという方が正しいのかもしれない。

しかし、そこまで考えて、霧矢はある一つの可能性にたどり着いた。

「……なあ、もし、お前の妹が仕方なくこっちの世界に来たとして、居場所はあるのか？」

沈黙が流れる。

(……おい、何だ。その懇願するような目つきは……)

「母さんは別に構わないけど、霧矢もいいわよね。」

「絶対に……。」

ダメだと言いかけた瞬間、口が突然動かなくなった。霜華が人差し指を霧矢の顎に当てている。口のあたりが凍りつき、焼けるような痛みが襲う。

霜華が霧矢の頭をつかみ上下に動かした。

「そういうことで、霧矢もいいつて言ってるし、霜ちゃんの妹が来ても、うちで一緒に暮らしてもいいのよ」

「霧君、ありがとう……」

わざとらしく目を輝かせながら、おしほりを霧矢の口元に押し付け、氷漬けになった顎を温める。

「それで、霜ちゃんの妹ってどんな名前なの？」

「風華、北原風華です。年は十二です」

十八でこの中学生みたいな様子なのだから、十二なら、きっと小学生みたいな体格だろう。

暖かいおしほりで揉んでいるうちに、やっと口が動かせるようになった。

「あれ、どこに行くの？」

「もう、たくさんだ。明日の準備をしなきゃいけない」

まだ八時くらいだったが、明日の予習もある。これ以上時間を潰しているわけにもいかない。一緒にゲームをしようと誘ってくる霜華を追い払い、まだ冴えない頭で教科書を流し読みする。今日は多くの人が連休で休んだと会長は言っていた。それならば、授業もそれほど進んではいけないはずだと霧矢は考えた。成績が特別優れているわけでもない霧矢にとって、まわりから取り残されるのは避けたいことだった。？

ボーイ・ミーツ・アイスガール 3

十二月十一日 火曜日 雪のち晴れ

翌日、体温は三十七度一分。非常に微妙だったが、会長に死刑にされるかもしれないということを考えると登校せざるを得ない。病み上がりでふらついているが制服に着替え、カバンに教科書類をしまった。窓の外を見ると、昨日より雪は穏やかになっているが、積雪は昨日より増している。

「おはよー、霧君。今日は学校行くんでしょ」

「……本当は今日もまだ休んでたいけど……行かないと会長に殺される……」

「浦高の会長ってそんなに恐ろしい人なの？」

「……生徒会の内部の人間しか知らないけどな。普通の生徒はあんな人だなんて思いもしなかっただろうさ」

霧矢は陰鬱な顔で会長の話をしながら朝食を食べ始めた。昨日一日の欠席でどれほどの制裁を受けるはめになるのか……

「……じゃあ、店は任せるから、よろしく頼む……もしかしたら、僕はもう帰ってこれないかもしれないけど……」

「霧君ってポケキャラじゃないよね、どっちかっていうとツツコミだし」

「……浦高の会長を怒らせる＝死亡フラグなんだよ……」

「浦高ってどこにあるの？」

「駅裏の橋を渡ったところの南側。ここから歩いて二十分くらいだが、間違ってもついてきたり、潜入したりするなよ！」

きつく釘を刺すと、霧矢は玄関にかけてあるコートを着込み、家を出る。寒さが身にしみる。駅の自由通路を通ると、やはり、除雪のため上下線ともに終日運休と掲示板に書かれている。今日も生徒会メンバーで動けるのは、霧矢を含めて四人だけだろう。

白銀の世界を一步一步歩きながら、学校を目指す。ここ数日の大雪のせいで雪壁の高さは一メートルを超えていた。

*

学校に着くと、霧矢は約束を果たすために隣の一年三組の教室に向かう。大雪のせいで生徒はいつもの半分くらいしかいなかった。

「おはよう、霧矢」

「ほれ、きのうの報酬だ。これでいいだろ。で、何か変わりはなかったか？」

「特に何もなかった。先輩に言われた通り、書類の整理をしてそれで終わり。ただ……」

「ただ……？」

「しばらく、人手不足だから手伝ってほしいって言われて、期間限定だけど、無理やり書類にサインさせられちゃって、生徒会執行部のメンバーにさせられちゃった」

困ったような顔を浮かべている。晴代は部活動に所属していないため、断る理由もない。店の手伝いがあるという理由も、実際に彼女が手伝っているのは手が空いている時だけなので使えなかった。

「お気の毒様。お互い執行部メンバーとして頑張っていこうぜ」

踵を返して歩き去ろうとすると後ろから肩をつかまれる。振り返ってみると、晴代が鬼のような形相を浮かべて霧矢を睨みつけている。

「…あんたのせいで…面倒事に巻き込まれたっていうのに……こんなポテトチップス一袋と、お気の毒様…ってどういう意味よ…返してよ、あたしの余暇を返してえええ！」

「さて、逃げるか」

霧矢に向かって飛びかかってくる。猛ダッシュで霧矢は教室から逃げ出した。

放課後になり、身構えながら生徒会室の扉の前に立つ。開けるや否や、猛スピードで黒板消しが霧矢の顔面に命中した。白い粉にまみれてピンク色の鼻血が流れる。

苛立った顔の県立浦沼高校の会長、あまのひかり雨野光里が座っていた。

「ゴルア、三条！ あんた、昨日はよくも休んでくれたわね……覚悟しなさい！」

「すみません……でも、ちゃんと代理を派遣したじゃないですか……」

「それとこれとは別問題！ いいこと、執行部のメンバーは一人でも欠けると予定が大幅に狂うの。ただでさえこの大雪で他のメンバーが来られない今、近場のあんただけが頼りだつていうのに、そのあんたが休んだりしたらどれほど迷惑がかかるかわからないの！」

「すみません……」

「本当は、タダじゃ済まさないつもりだったけど、晴代ちゃんに免じて、今日のところは勘弁してあげるわ、感謝しなさい」

生徒会室にある流し台で顔を洗い、顔にこびりついた鼻血とチョークの粉を落とす。しかし霧矢としては、あの会長がこの程度で許してくれるとは予想外だった。晴代にはもっと感謝しないといけない。

ティッシュを鼻に詰め、椅子に座ると、晴代が入ってくる。

「いらつしゃい、晴代ちゃん、待ってたわ」

晴代が霧矢を睨みつける。

「とりあえず、始めるぞ。上川も座ってくれ」

今日学校にきている五人が全員集まったのを確認すると、副会長が仕事の説明を始める。今日のメンバーは、会長の雨野光里、副会長男子の雲沢誠也、書記の神田恵、かんだめくみそして総務、つまりは下っ端の三条霧矢と上川晴代だけだった。副会長女子と会計は大雪による電車の運休のため来ていない。

とりあえず、懸案事項はクリスマスに行われる町内のイベントの手伝いだ。駅前に毎年飾るクリスマスツリーの設置やボランティアの募集などを行わなくてはならない。他にも生徒会の会報の編集など仕事は山ほどある。

「役割の分担をするわ。クリスマスイベントと会報の編集、好きな方を選びなさい」

考えている間、会長は公欠組にメールを送っている。晴代は面倒事に巻き込まれた恨みを目で霧矢に訴えかけていた。

「じゃあ、クリスマスイベントの人」

活動場所が帰り道なのでちょうどよいと思ったのか、霧矢と晴代両方が手を挙げた。しかし、他のメンバーは会長を除き、メール組も含めて全員が会報の編集を選んだ。

つまり、三人だけでクリスマスイベントの手伝いをしなければならぬのだ。

「雨野先輩とあたしと霧矢だけじゃ人手不足ですよ。他に誰か協力してもらえないんですか？」

「でも、この三人以外の家は駅と真逆の方向だし、会報も会報で結構面倒だしこれくらい人員を割いても問題はないと思うのよね。クリスマスイベントの手伝いは面倒だけど誰にだってできる仕事だから、むしろ手伝ってくれそうな人を新たに探した方がいいわ」

そんな暇人がいたら苦労しない。この近年まれにみる大寒波が襲来しているこの時期にわざわざ駅前で雪をかぶりながら、クリスマスツリーの飾りつけをするような人がいたら、お目にかかりたいものだ。

「まあ、去年も本当にギリギリだったけど、一応間に合ったし、今年も大丈夫でしょ。後、電車組二人も電車が来るまでは付き合いつつメールを返してきた。去年と同じ、地元三人に電車組二人。それに、二人とも商店街の人だし、遅くまでかかってもそれほど問題はないはずよね。そういうことで、オーケーしてくれるかな、三条君と晴代ちゃん」

会長のこの妙に優しい笑顔の前に、ノーと言えば、その次の瞬間、三途の川をうろつくはめになる。答えなど選んでいる余地はなかった。

「じゃあ、本日はこれまで。クリスマスイベントの仕事は木曜日か

ら始まるから、二人はそれまでは会報の手伝いをしてちょうだい。もし、それで会報が早く終わったらそつちの応援に回す余裕もできるかもしれないわ」

「霧矢、あたしに何か言うことは？」

雪道用の赤い街灯に照らされながら帰り道を二人で歩く。ここしばらく降り続いていた雪は降りやんでいた。

「とりあえず、謝罪とお礼を。それと、コンビニで肉まんを買ってやる」

「あんまんがいい。それと、この程度じゃ無理。割に合わない」

「……今月の僕の予算が限界。来週小遣いもらったからお礼するから、それまで待ってくれ」

財布を開けると、五百円玉一枚と一円玉が数枚しかない。昼食は弁当を持参しているので問題ないが、もうほとんど余裕はない。後一週間を五百円強で乗り切る必要がある。

「昨日、雨野先輩の本性を見たよ」

「だろうな。あのゴリラ会長に雲沢先輩はどれくらいやられたんだ、昨日」

「雨野先輩に文句を言ったせいで、ヘッドロック三発、スープレックス二回、それとバックブリーカー」

「……お前のおかげで命拾いした。黒板消しクリーンヒットで済んだんだから。感謝するぜ」

「だったら、行動で示しなさい」

「残念ながら、それをするだけの金がない」

ため息をつくとき、思い出したように霧矢に話を振ってくる。

「ところで、一昨日の女の子って何だったの？」

霧矢は不意の質問に一瞬立ち止まってしまう。自分の命を考えるあまり、霜華のことを完全に忘れていた。しかし、水の魔族のハーフ、半雪女などと説明したら間違いない問題が生じる。

「……うちの住み込みのアルバイト」

霧矢としても認めたくはなかったが、いろいろと面倒なことになるよりはましだ。苦し紛れの説明だが嘘はついていない。

「アルバイトを雇うほど、薬局って儲かってるんだ」

「……多分」

疑いの眼差しで霧矢の顔を直視する。霧矢は目をそらした。

「……ほ、ほら……コンビニに着いたから、あんまん買ってやるよ。ここで待ってる」

「寒いから、あたしも店に入るわ。あんまんをおごってもらいながら、話をじっくりと聞かせてもらうからね」

「買っふりをしてトンスラしようとする霧矢の作戦は見破られていた。」

「……ごめん。黙秘権を使わせてもらう」

「これは証人喚問です。あなたには包括的な証言義務があります。虚偽の発言や正当な理由なくして証言を拒否したら、罪に問われることになります」

「だったら、記憶にございません」

鳩尾に拳が打ち込まれた。その場に霧矢はうずくまる。

「つい先ほど、日本は拷問禁止条約を破棄しました。さあ、答えてもらうわよ。昨日のあの子はいつたい何なのかしら……」

「あんまんをもう一つ買ってやる。だから、勘弁してくれ」

「隠そうとするところがそもそも怪しい。本当に薬局のアルバイトなの、って、ちょっと!」

「答えずにコンビニの中に逃げ込む。さすがにいくら晴代でも店の中で堂々と拷問をすることはできないはずだ。」

「店に逃げ込むなんて卑怯よ」

「拷問狂が何を言うか」

「拷問狂じゃありません。腕力を用いても知りたいただけです」

「……僕の知り合いの女子ってどうしてこうみな揃って暴力的なんだろう」

「雨野先輩よりはましでしょ」

当然である。雨野より暴力的な人間などそういるものか。

会計を済ませて店から出る。出たくなかったが、いつまでもここに
いるわけにもいかない。

「ほら、あんまん二つだ。これでもう何も聞くなよ！」

「……そこまでして、言わないって言うのなら、あたしにも考えが
あるわ」

不穏なオーラが周囲に放たれている。

「暴力反対！」

顔中に汗をかきながら、霧矢は後ずさりする。晴代は拳を構えて
いる。その時、霧矢は声をかけられた。

「霧君、何してるの？」

聞き覚えのある声がした方を振り向くと、スーパーの買い物袋を
持った和服の半雪女がそこにいた。霧矢は赤信号を無視して駅の方
に突っ走っていった。

駅の自由通路を走り抜け、商店街側の広場で立ち止まる。息切れ
しながら、後ろを振り返り、晴代が追いかけてくる気配がないのを
確かめた。深呼吸しながら霧矢は安堵する。しかし、その安堵感は
長持ちしなかった。

携帯の着信音が鳴り響く。液晶には「上川晴代」とある。着信拒
否しようとも考えたが、そんなことをしようものなら、明日が霧矢
の命日となる。恐る恐る通話ボタンを押す。

「……もしもし」

「……きいりいやあ…あなた、何で黙ってたのよ…」

「な…何を？ 何のことを言ってるんだ？ ははは…」

「霜華ちゃんが居候の魔族のハーフ、しかも雪女だって、どうして
黙ってたのかって聞いてんだ！ ゴルア！」

「会長のまねをしなくてもいいから…」

おそらく、霧矢が走り去った後、霜華から直接話を聞いたのだろ
う。霜華も隠すことなく正体を明かした上で、自分が半雪女である
ことを証明したはずだ。

これは、霧矢以外は知らない事実だが、ああ見えて晴代は漫画やライトノベル好きで、ファンタジーとかに目がない、軽度から中度のオタク少女だ。半雪女が自分のすぐ近くにいるなどというのは願ってもないことだろう。

「……うらやましい！うらやましますぎる！何で霧矢の家なのよ！あたしのところに来てくれれば大歓迎だったのにい〜」

「お前な、本気で言ってるのか？」

「氷の力を操る少女なんて、まさにファンタジーじゃない、あたしもう……」

これ以上話すのもバカらしいので霧矢の方から電話を切った。

肩を落として近くのベンチに座り込む。やはり問題が生じてしまった。しかし、腰を下ろしてから数分と経たないうちに、あの二人組が駅から出てきた。晴代は泣き顔になっていて、霜華はどこか困り顔だ。晴代が霧矢の顔を見ると、食ってかかってきた。

「霧矢！何であんたが水で、あたしが、火なのよ……！」

「はあ？」

「霜華ちゃんに霧矢のところじゃなくて、うちに来ないって言うたら、属性的に無理だって言われちゃった……」

意味がわからないので霜華に説明してもらおうことにした。

長くなるらしいので、三人で駅の待合室に入る。

どの世界においても、魔力を有する個体はそれぞれ先天的な属性別に分けることができる。すなわち、火、水、土、風、光、闇の六つのことで、火と水、土と風、光と闇はお互いに対となっている。そして、霧矢は水、晴代は火の属性を持っているらしい。

霧矢たちが暮らしているこの世界では、魔族は自分で自身の生命の維持に必要な魔力を生成できない。故に、長時間こちらの世界にはいられないのだ。魔力の強大さにもよるが、強い魔力の持ち主でも三日ほどで魔力切れを起こして死に至る。弱いものなど一日持てば長い方らしい。

しかし、そこで霧矢に疑問が生じた。霜華はこちらの世界に来てからもう三日以上経っているはず。しかし死に至るところか、衰弱する様子さえない。それを霜華に指摘すると、魔族がこの世界で生きていく方法が一つだけあると答えた。

「ここで、二人に質問。肉体的に人間が魔族より優れている点は何でしょうか」

二人とも首を傾げる。魔族は基本的に異能の力を持っているため、人間よりも強いはず。人間が優れている点など思いつかなかった。

「答えは、自分で魔力を生成できるのに、生命の維持に魔力を一切必要としない、ということだよ」

人間は魔力を生成しても生命の維持には不要であるため、魔力は周囲に放出される。しかし、魔族としてはその漫然と放出される魔力を拾っているだけでは足りない。そこで、人間と魔族が契約することによって、不要な全魔力を直接魔族に流し込むようにすればよい。水を受けるのに霧吹きからパイプに変えるようなものだ。そして、その魔力の属性がお互い一致すれば不一致よりも魔力の燃費は良くなり、逆に対属性であれば、燃費は非常に悪くなるどころかマイナスに作用する。

「でも、待てよ。僕とお前って契約してるのか？」

「私の場合、無理して契約しなくても大丈夫なの」

ハーフである霜華の場合、日常生活に必要な魔力くらいならば自力で生成できるらしい。つまり、理論上は半永久的にこちらの世界にいられるのだ。ただし力を使ったりして向こうと同じように過ごすには少し足りないのが、霧矢から放出される微弱な水の魔力で補っているとのことだった。属性が同じでもと不足分も大したことはないので契約してまで魔力を得る必要もない。

「じゃあ、もしお前が晴代と契約したら…」

「ハーフだから死にはしないと思うけど、間違いない衰弱する。契約しなくてもあまりにも長時間一緒にいれば体調を崩す可能性がある」

横目で晴代の方を見ると、「これが属性の差なのね…」と涙ぐんでいる。

「属性って誰にでもあるのか？」

「うん、あらゆる生命体や魔力を有する霊体は六つのうちどれか一つを必ず持っているの。血液型みたいなものだよ。両親の片方どちらか一つが遺伝する」

「へえ、じゃあ、母さんも水なのか？」

「理津子さんは風。だから、霧君のお父さんが水」

「……あたしは…火…だから、お父さんかお母さんのどちらかも火……」

「そんな、落ち込まなくても……もしこの世界に水以外の魔族が来たら、晴代だつて契約できるんだよ。だから…そんな風にすねなくても」

「はあ、誰か水以外の人来てくれないかなあ……できれば、火で」

「とりあえず、このことは他言無用だぞ。半雪女がこの町にいらなんて知れたら、いろいろと騒ぎになる」

「ええ〜。こんなことめったにないのに」

「いいから誰にも言うな。もしばらしたら、お前のオタク趣味をみんなに全部ばらす。あと、会長に頼んでお前を正式な執行部メンバーに無理やり昇格させる」

「そこまで、脅してやっと納得したのか、渋々誰にも話さない約束した。」

ボーイ・ミーツ・アイスガール 4

十二月十二日 水曜日 晴れ時々雪

翌日、やっと電車が通常運行となり生徒会のメンバーも全員集合した。しかし、雨野の機嫌は相変わらずだった。霧矢をはじめとして、生徒会の男子にとって会長の機嫌が悪いということは生命保険の準備が必要ということの意味する。

「…それじゃあ、本日の生徒会活動…：雲沢」

「何だ」

「今日はおんたが仕切りなさい」

「何で俺なんだ。自分の仕事くらいきちんとやれ」

生徒会室に屍が一つできた。しかし、ターミネーター雲沢こと副会長ならば、この程度の攻撃なら数分で復活する。

「じゃあ、西村。あんたが仕切りなさい」

面倒くさそうに、会計の西村龍太にしむらりゅうたに進行を一任する。ちなみに彼は霧矢と同じく一年生で、霧矢のクラスメイトだ。

「今日は会報の原稿用紙を配りに行きます。部長、委員長のところに行ってください。そうだな、運動部がこの俺、西村と神田先輩と有島先輩。文化部を三条と上川。委員会を雲沢先輩と会長でお願いします」

全員がだるそうに生徒会室を出る。「文化部」と書かれた封筒を西村から受け取り、晴代と二人で校舎を歩く。晴代は昨日の一件以来どうも様子がおかしい。

「お前、何で今日はそんなにアクセサリを身に着けてるんだ？」

「あたしの火を少しでも消すため…：水の象徴たる…」

「オカルトに目覚めるのは感心しないな、ただでさえ腐りかけてきているつてのに」

「腐ってなんかない！ 確かに同人誌とか読んだりするのは好きだ

けど、カップリングとかやおいにはまだ興味ないから」

「はいはい、とりあえず、お前学校のみんなには、そういう趣味があることを隠してるんだろ。大声で言うとな人に聞こえるぞ」

「四大が一つ、ウンディーネよ。わが求めに応じ……」

「やめんか」

ボケとツツコミを繰り返しながら、文化部の活動場所を回っていく。みんな霧矢たちが予想していたよりも理解が早く、予定よりも相当早く配ることができた。残り一部。

「最後はどこなんだ」

「……科学部よ」

「僕はパスさせてもらうぞ」

「そうはさせるかあ！」

晴代は逃げようとする霧矢の襟首を掴んで無理やり理科室に連れて行く。

「無駄な抵抗はやめなさい！ 文香！ 生徒会よ！」

「はーなーせー！ ミスマッドサイエンティストに会うのはごめんだ！」

扉を開けると、白衣を着て眼鏡をかけた女子が実験器具とにらめっこしている。霧矢も晴代も昔からよく知っている生徒だ。

木村文香^{きむらふみか}。中学校からの知り合いで、晴代の友達でもある。それだけならよかったのだが、妙な方面の科学的知識が豊富で、得体の知れないものを作っては、こっそりと人に試すということを繰り返していた。霧矢も一度、実験台にされたことがある。

今年、霧矢たちが入学した時点では部員数が不足しており、休部状態だったのだが、彼女が入ったことで何とか廃部を免れたのだ。しかし、三年生が引退した今、現在、活動している化学部員は彼女だけである。

「ちよつと待て。もうすぐ、アレができる」

「アレ？ 暗殺用の毒物か？」

「三条、貴様は私が暗殺者にも見えるのか」

「暗殺者以外の何者でもないだろう。去年、お前から貰ったバレンタインデーのチョコレートを食べ、死にかけたことは、記憶にまだ新しいわ！」

「私特製の香料が入っていると、あの時にあらかじめ言い置いたはず。貴様はそれでもよいと言ったではないか」

バレンタインデーの放課後になって一つもチョコを貰えなかった残念な男に近づき、新作のチョコレートを作ったから食べてほしいと言う。無論、一つも貰えなかった男は自分が実験台にされているなど夢にも思わず、その女の子を女神のごとく崇め、試食する。

果物の香りの強い「それ」を食べると、世界が歪み、意識が遠のいていき、気が付いたら保健室のベッドの上だった。

「前にも言ったが、いくら特製だからと言って、実験室で作ったものを使うなんてどういう神経の持ち主だ！ しかも酪酸とメタノールから作ったとか、明らかに危険すぎるだろう！」

「貴様は薬局の息子だろう。科学部員である私特製の香料というのが何を意味するか、理解していなかったわけではあるまい」

「うるせえ！ 酪酸はまだしもメタノールを使うなんて、僕の目を潰すつもりだったのか！」

際限のない言い争いに、晴代がピリオドを打った。

「はいはい、それよりも、仕事が先でしょ」

封筒から原稿用紙を取り出し、晴代が説明を始める。霧矢は文香と関わり合いになりたくないので適当に理科室をうるついでいた。

「……というわけで、原稿よろしく。何か質問は？」

「特にない。しかし、晴代。その身に着けたるアクセサリーは何なのだ」

「まあ……趣味よ。何となく身につけたくなったというか……」

いくら友達とはいえ、相手は科学部の部長だ。半雪女に気に入られるようにと、自分の火属性を抑えるために水の力を宿したアクセサリーを身に着けているなんて言えまい。それに霧矢があれだけ釘

を刺したのだから、言うわけがない。

「ふむ……」

「用件が済んだのなら、さっさと行くぞ。僕はここに長居するのはごめんだ」

「待って、もう一つ」

「何だ」

「科学部って明日から何かする予定ある？」

「特にない」

「だったら、あたしたちの仕事を手伝ってくれない。駅前のクリスマスイベントの手伝い」

「構わないが、何故そのようなことを頼む」

「深刻な人手不足なのよ。この通りお願い！」

晴代は霧矢の口を塞いだ。霧矢はもがくがその言葉は伝わらない。

「了解した。では、明日の放課後、駅前で会おう」

理科室を出ると、霧矢は晴代に不満をぶつける。

「おい、助っ人を頼むにしても何でよりによって木村なんだ！ あ

いつ、何をするかわからないぞ！」

「大丈夫、あたしが見張ってるから」

そういう問題ではない。そもそも見張らなければならぬという時点でアウトだ。彼女の異常な行動は同じ中学校出身者なら全員が知っている。ドライアイスで炸裂弾を作ったり、スプレー缶を改造して火炎放射器を作ったりするなど、危険な行動は枚挙にいとまがない。彼女ならクリスマスツリーに発火装置を仕掛けたりすることくらいやりかねないだろう。

「ただ今戻りました」

「お疲れ様」

程よく暖房の効いた生徒会室で、全員が疲れた表情でお茶を飲んでた。霧矢もポットからお湯を急須に注ぎ、二人分のお茶を入れた。

「西村君、今日の仕事はこれで終わりなの？」

「まだ全部終わったわけじゃないが、イベント組はこれ以上しなくてもいいって会長がさ」

「そうなんですか？ 会長」

「これ以上は大人数でやっててもあんまり意味ない。だから、三条、晴代ちゃん、西村、啓子はもう帰ってもいいわよ」

「会長は帰らないんですか？」

「私が帰ったら誰が指揮をとるのよ。会長の仕事くらいきちんとするわよ」

「おいおい雨野、俺がさつき言った台詞覚えてますか？」

生徒会室に爆音がこだましたかと思うと、副会長、雲沢清史の血だまりが床にできていた。しかし、恐れおののいたのは一年生だけで、二年生は気にすることもなく、お茶を飲んでいる。

「じゃ…じゃあ、俺たちはお先に失礼しますね……」

霧矢たちは、電車の都合で早抜けしなければならぬ西村と副会長、ありしまけい有島恵子の二人と一緒に下校することになった。

コートを着込み、外に出る。降雪がないとはいえ、昨日より冷え込んでいる今日は、スカートの女の子にとって厳しい一日となっただろう。

「しかし、上川が生徒会の助っ人になってくれるとは、ありがたい。総務は三条だけで、俺も心もとなかったんだ」

「本当は、入る気なんてなかったんだけどねえ。霧矢の代理で一日つて約束だったけど、雨野先輩に十二月の間でいいからつてしく頼まれて、しかも目の前で雲沢先輩がやられるのを見て断る気なんて起きないわよ」

「昨日も雲沢先輩はやられたのか…」

「ええ、でもあの光景は二人とも見慣れてるんでしょ」

二人とも暗い顔でうなずいた。そして二人とも雨野の攻撃を見慣れているところか、食らい慣れているのである。

「寒いことこの上ないですし、あんまり歩きたくないですね」

「有島先輩は寒さに弱いんですか？」

「私は冬より夏の方が好きなんです。将来は沖縄にでも住みたいな
って思っていますよ」

「確かに、ここみたいな川端康成の小説の舞台よりは住みやすいで
しょうね。僕としても沖縄には結構憧れてますよ」

「でも、あたしは最近この地がとっても好きになりましたよ」

「上川、お前ずっと寒いのは嫌だって言ってたのに、どうしたんだ」
「実はね、昨日とっても素敵なお女の子と出会えて……」

「おいこの百合女ア！ 貴様、秘密をばらされたいのか？」

霧矢にできる最大限の怖い顔で晴代を睨みつける。昨日、霜華の
ことは誰にも言わないと約束したはずだ。

「あたしは同性にそういう興味はない！ そういう意味で言ったん
じゃない！」

「どちらにしても、あの件は秘密だ。いいな」

「でも、西村君と有島先輩になら話してもいいんじゃないの？」

西村も有島も興味のありそうな顔をしている。しかし、この二人
が秘密を守るといふ確証はない。学校中に広まってしまえば、霧矢
の平穏が台無しになる。

「……ダメだ。僕たちが話していいことじゃない。それは霜華が決
めることだ。僕たちに勝手に自分の正体をばらされていい気分にな
るとは思えない」

「霜華？ 名前か、それ？」

西村が食いつくのを見て、霧矢はしまったと内心で思った。

「西村、この話は頼むから忘れてくれ。僕としてもこれは伏せてお
きたい」

「会長に拷問させると言ったら？」

意地の悪い顔で霧矢に笑いかけてきた。しかし、霧矢は動じなか
った。

「僕じゃ会長の拷問には耐えられないだろうけど、僕はきつとお前
に失望するだろうな。生徒会会計、西村龍太」

霧矢は思い切り相手を見下す視線を西村に向けた。西村はたじろいだ様子で冗談だと言って逃げたが、有島は何となく憂いを含んだ眼差しを霧矢に向けていた。

「ねえ、三条君。まさか、犯罪に巻き込まれているとかではないですよね」

「それはないです。安心してください、有島先輩」

「そうですか……」

有島は雨野と正反対の性格で、慈悲と善意の塊と言ってもいい。

悪魔の会長、天使の副会長と雲沢は称している。相手が下級生であっても相手を立てる話し方をするため、校内での人気も非常に高い。「私でよかつたら、遠慮なく相談してくださいね。今日の三条君は、今までなかった妙な感じがしているんですよ」

「妙な感じ？」

「ええ……」

何か言いたそうだったが、それは西村によって遮られた。

「先輩は下り電車ですよ。時間的に急いだ方がいいんじゃないですか？」

「そうですね。ちょっと、急がないといけません。すみません、本当はもう少しお話ししたかったのですが、ここでさよならみたいです」

時計を覗き込むと有島は慌ただしく、頭を下げた。

三人ともさよならを言うと、有島は駅の方へ向かって駆け出して行った。都会と違って田舎では一本電車を逃すと二時間近く待たなければならぬケースもざらにある。走り去るのを見届けながら、三人はゆっくりと歩いていく。

「じゃ、お二人さん。ここで」

駅で西村とも別れる。霧矢はいつも通り嫌味を言い、西村も同じように言い返す。二人の独特のあいさつのようなものだ。

駅前の広場には大きなモミの木が運び込まれていた。

「あの木を見ると、いよいよクリスマスだって感じがするよねえ」
「クリスマスつつたつて、この商店街もすたれてきてるし、もうあんまり意味なんてないのかもしれないけどな」

「何で、霧矢はそんな暗いことを言うのかなあ。あたしは結構好きだよ、クリスマス」

「そりゃ、クリスマス自体が嫌いなやつはあんまりいないだろうさ。でもわざわざこんなデカイモミの木を運び込んでまでイベントをやる必要なんてあるのかとは思うぞ」

ぶつくさ文句を言う霧矢を晴代がなだめるといって、会報配りとは逆の構図で薬局の前まで来ると、晴代は店の中を覗き込んだ。

「やっぱり、霜華ちゃんが店番してるんだね」

「単なる居候じゃうちも困る。住み込みのバイトだ。まあ、家事の手伝いもしてくれてるけど」

「はあ、いいなあ。霧矢のとこのクリスマスは楽しくなりそうだねえ」

「今年は、親父が帰ってこれない分、人数的にはプラマイゼロだ。

まあ霜華のゴタゴタが片付けば無事マイナスで迎えられるんだが…」

単身赴任中の父親は今年のクリスマスは学会の都合で帰ってこれないらしい。正月までには戻れるらしいが、それも数日だけで、またすぐ旅立つらしい。

「薬学の先生は大変だねえ…ところで、おじさんに霜華ちゃんのことどう説明するの？」

唐突な質問に霧矢は固まってしまふ。母親は天然だからそのまま信じたが、大学の教員である父親に雪女の話をしてもらって信じてくれるとは思いがたい。しかし、霜華の力を見たら見たで大騒ぎすることも間違いないだろう。

「……どう説明しようか…？」

「…おじさんが帰ってくるのって、大晦日と正月二日だけなんですよ。その間、あたしのところで預かってもいいけど…」

「火の魔力で寝正月になるのがオチだろう。それにお前の家の人にどう説明するつもりだ」

「うちに友達を泊めた回数なんて、両手じゃ足りないわよ。正月に泊めたことも結構あるし、そのところは大丈夫。それに魔力のほうも三日くらいなら大丈夫じゃないの？」

「それは僕にじゃなくて、霜華に直接聞くべきだ」

「まあ、そうよね。でも昨日知り合ったばかりだし、それを聞くのはもっと仲を深めた後にした方がいいと思うから。今日はここですよなら」

「そうだな。じゃ、また明日」

お互い手を振ると、霧矢は店に入る。

「ただいま」

「おかえりなさい。ご飯が先？ お風呂が先？ それとも……？
霧君、何かなく、その目は？」

霧矢は痛い人を見るような視線で霜華を見つめている。ネタの古さに呆れていたというのものもあるのだが、よく恥じらいもせずそんなことが言えるものだとは半分感心していた。

「お前、やっぱり精神安定剤飲むか？ レジの右手の棚の赤い瓶の薬だ」

「何で霧君はそういつも私を異常者みたいに扱うのよ」

「異常者だなんてそこまでひどい扱いはした覚えはない。頭のねじが外れた気の毒なお姫様くらいの感じで接してるさ」

相手を煙に巻くと、マフラーを外し、カバンを奥に放り出した。

接客用のソファーに乱暴に座ると、霜華がお茶を盆に載せて持ってきたので、口をつける。

「そうそう、理津子さんが明日から商店街のクリスマスツリー飾りつけの手伝いに行ってきたよって言ってた。力仕事が多い上に、毎年、浦高の人が手伝うとはいえ、人手不足気味だから若い子に手伝ってもらった方がいいからって」

その言葉を聞いた途端、霧矢はむせてしまう。しばらく咳き込む

と、霧矢は顔を赤くしながら、猛反発した。

「……別にお前は行かなくてもいい」

「何でしょう」

「行かなくていいものはいいんだ。僕たちだけで何とかなる！」

「そんな〜」

その時、店の電話が鳴った。霜華が受話器を取り上げた。

「はい、復調園調剤薬局です！ え、あ、はい。それについては、もう、理津子さんから指示を受けてますよう。あ、それはありがとうございます。わかります。わかりました…では明日の、午後三時半に駅前広場に行けばいいんですね？ え、じゃあ晴代も一緒なんだね…」

その言葉を聞いた途端、霧矢は霜華から受話器を奪い取った。

「もしもし、貴様、晴代か！ また妙なことに霜華を巻き込むつもりだな！」

「別に、霜華ちゃんだつて雨野先輩や西村君とか有島先輩みたいなこつちの世界での知り合いくらい作ったっていいじゃない。それに、おばさんからも手伝うように言われてたんですよ」

「それとこれとは別問題だ！ 西村と有島先輩はともかく、会長なんかに会わせてみる！ こいつ数日間トラウマで動けなくなるぞ！」

受話器越しに叫んでいるものの、相手の顔が見えないので、霧矢の凄みが通用しない。

「ねえ、霧君は私のこと気遣ってくれてるわけ？」

わざとらしく目をキラキラさせながら、霜華は霧矢の袖を引っ張ってきた。乱暴に振り払って霧矢は続ける。

「とりあえず、会長も地元三人と電車組二人でギリギリ間に合ったと言ってた。お前も木村を応援に頼んだわけだし、六人もいれば霜華は必要ない！」

啖呵を切ると、霜華は相手をバカにするような声で、霧矢にとって衝撃の事実を突きつけてきた。

「霧矢、あんた、携帯のメール、確認してないの？」

「はあ？」

受話器をいったん置き、脱ぎ捨てたコートのパocketsを漁る。携帯電話を取り出すと、新着メールが一件あった。雨野からつい数分前に送られてきたものようだ。霧矢と晴代の二件に同時送信されている。

三条と晴代ちゃんへ。去年はほんとギリギリで商店街の人に迷惑かけちゃったから、今年は早めに終わらせたいの。だから、明日までに二人ほど助っ人確保しててね。うちの生徒かどうかは問わないよ。そして、もしできなかつたら三条に責任をとってもらおうから。

最後の一文を読み終わると、力が抜け携帯電話を取り落とした。

「もしもし、霧矢？ メール読んだ？」

「ああ、読みましたとも……」

「ちょ……どうしたのよ、そんなにシヨックを受けるようなこと？」

霧矢の声が余りにも沈んでいたのか、晴代は驚いている。

「死ぬか、助っ人もう一名確保か、選べと……」

「だから手っ取り早く、霜華ちゃんに手伝ってもらおうと思ったんだけど……霧矢、明日の放課後までにもう一人確保できそう？」

そんな面倒なことに応じてくれそうな暇な知り合いは霧矢にはいない。必然的に霜華を連れて行かなければ死刑になるということだ。

「……じゃあ、明日……霜華を……連れて行けば……いいんだな……？」

「うん！ じゃ、また明日」

受話器を戻すと、霧矢は力なくカウンターの椅子に座り込んだ。

死んだ目つきで雨野に返信メールを送り、助っ人二名を確保できたことを知らせた。

「……霜華、明日三時半。駅前広場」

「オツケー！ ばっちょいだよ」

時計が七回鳴り、霜華は店のカーテンを閉めた。霧矢も家に上がり込むんだ。

「いいか、お前が魔族のハーフ、半雪女だったことを軽々しくみんな

なにばらすんじゃないぞ！ 特に雨野会長と科学部の木村には絶対に内緒だぞ！」

霜華はうなずいたが、霧矢の不安は消えなかった。晴代が不用意なことを口走ったせいで、西村と有島には霜華には秘密があるということがばれている。有島はともかく、好奇心の強い西村なら、霜華に秘密を問いただしてくるかもしれない。

イヤホンで音が漏れないようにして霧矢のほこりのかぶっていたゲームをしている霜華を横目で見ながら、霧矢は西村へどう説明するか考え続けていた。

「それじゃ、おやすみ〜」

十一時ほどになって、霧矢の部屋から霜華が出ていく。しかし、人間の適応力というのも大したものだ。霜華が家に来てから三日ほどが経ったが、もう家に霜華がいるということが当たり前のように感じられる。それは決して悪いことではないのだが、霧矢としてはどこいまいましい感覚もしていた。？

十二月十三日 木曜日 曇り

「駅まで歩くの？」

「残念ながら、松原先生は送れないそうだ……」

放課後になって、生徒会のクリスマス組五人&マッドサイエンティスト一名は穏やかだった午前とはがらりと変わって猛烈な寒風が吹き荒れている外を眺めていた。悪天候のため、生徒会の顧問の松原が駅まで送ってくれる予定だったのだが、急用で出張になってしまった。

「仕方ありません。他のみんなも歩いていますし、私たちも我慢しましょう」

有島は大して気にすることもせず、歩きはじめる。防寒具を着ているとはいえ、平然としている様子を見ると霧矢としては尊敬せず

にはいられない。

駅の方角に対して追い風とはいえ、この寒さは身に応える。雨野、有島、文香は平気そうだが、他は寒さで震えている。一昨日から新たな積雪はないため、路面の雪は凍りついてシャーベット状になっていた。歩くたびに固い音がする。

駅に着くころには三人の体力が限界になっていた。部活動に加入していない、早帰りの他の生徒も駅まで歩いてきたが彼らも辛そうだった。しかし、霧矢たちはこの寒い中作業をしなければならぬのだ。

「おっ！ 霧君だ！」

この寒い中、ブラウス一枚とスカート姿で平然としている半雪女が手を振っている。

「あの子が三条の助っ人ね？」

「はい…不本意ですが、あいつ以外に適当な人材を見つけないのは不可能でした。ですが、あいつの素性については詮索しないようお願いします」

「この気温での服装でいられるとは、彼女はいったい何者なんだろう？」

西村がもつともな疑問を口にするが、霧矢は無視した。

「初めまして、私は霧君の薬局に住み込みで働いている北原霜華といます。皆さんよろしくお願ひします」

「……おい、三条。こんな可愛い女の子が住み込みのバイトだと……？」

羨望と憤怒の入り混じった形相で西村が霧矢を睨みつけている。

霧矢は彼を華麗にスルーして、生徒会メンバーの紹介に移った。

「で、こつちのうだつの上がない短髪が西村龍太。晴代は省略。

この眼鏡女が木村文香、科学部の部長で晴代の友達だ。この三人は僕と同じ学年だ」

「おい、俺だけ自己紹介の扱いひどくないか？」

「黙れ、このダメ男が」

「何だと！ このへタレ！」

「テメエだけには言われたくない！ この色ボケ！」

しばらく二人の制限のない罵り合いが続いていたが、雨野が二人の背後で殺気を漂わせるとピタリと止んだ。

三人とも霜華と握手するが、西村は霜華の可愛さで違う世界に旅立っている。

「そして、この二人が二年生で会長の雨野光里、副会長の有島恵子」
雨野はめつたに見せないにこやかスマイルを輝かせる。しかし、有島は霜華を警戒の眼差しで見ている。霜華も有島を妙な目つきで見ている。

全員が二人に注目する。

「上川さんが昨日話していたのは、彼女なんですか？」

「え…あ、はい」

有島はしばらく逡巡していたが、何かを思い立ったように歩き出した。

「…すみません、光里ちゃん。先に始めてください。霜華さん、三条君と上川さんをお借りします。ああ、大丈夫です。すぐに戻りますから」

「啓子……？」

何も言わずに有島は三人を人気のない広場の裏に連れて行った。

雨野はポケットの中から道具を取り出す。

(…まさか、いや、そんなことが…)？

メリット・デメリット 1

「単刀直入に言います。北原霜華さん、あなたは魔族の血を引いていますね？」

霧矢と晴代は息をのんだ。しかし、霜華は驚くこともなく認めた。「ええ、でも、有島啓子さんでしたっけ。あなたにも魔族の血が流れているんじゃないの？」

有島が魔族の血を引いているという衝撃の事実で、二人は動けなくなった。こんな身近に魔族の血を引くものがいたなんて信じられなかった。

「……はい、父が光の魔族でした。あなたは？」

「ええ、母が水の魔族ですよ。で、私に何か用ですか」

お互いに何となく険悪な空気が漂っている。霧矢と晴代は二人を交互に見ながらどうしたらよいのかと考えていた。

「なぜ、あなたは三条君に近づいたんですか？ やはり契約主 プロバイダー になってもらうためですか？」

「確かに霧矢は水属性で契約主としては最適だけど、私はハーフ。普通に生活する分には契約主は必要としない。それくらいは知ってるはず」

霜華の口調はいつもとは違って変わって、冷静なものとなっている。

「ハーフであっても、契約主があつた方が、都合がいいのは言うまでもありません。今のところ三条君に契約の痕跡は認められません。が、そうなら彼がどうなるか……」

「その心配は杞憂。今のところは霧矢を契約させるつもりはない」
その言葉を聞くと、有島は戦闘の構えをとった。霜華もそれに応じて間合いをとる。

「『今のところ』はということ、いずれは契約させるつもりですか？」

「そのことは、時が来たら霧矢に話すつもり。ここであなたに話してもわかってもらえるとは思えないし、わかってもらおうとも思わない。もちろんそれは霧矢が決めること。彼が気に入らないのなら断つてくれても構わないと思ってる」

「……どちらにせよ、三条君を巻き込むのはよくありません。契約などしようものなら危険が及びます」

「ちよつと！ 有島先輩！ 何をするつもりですか！」

冷たい怒りを発しながら、有島は右手に光を収束させていく。

「もし、彼が何か危害を加えられたなら、先輩として私が黙ってはいません。あなたを止めます」

「契約が危険なんて私は初耳。私としてはそんなガセネタをどこから仕入れてきたのか知りたいくらいだけど」

「契約は危険です。それは断言できます」

「古今東西、魔族と契約した人間は数知れない。危険が及んだなんて話は聞いたことがない」

「そうですか。ですが、そういうケースが私の近くに存在していません」

「信じられない。魔族と人間の契約に危険などないはず」

「そう言うと思いましたが。ですか、私の父曰くそうらしいのです。

それに、あなたはあなたの目的の実現のために彼を利用しようとしている、それだけでしょ。そのためならば、彼をだますことも厭わない」

「利用するも何も、私は彼をだますつもりはないし、時が来れば真実をすべて話す。それは私が私自身に誓ったこと。これだけは絶対に揺るがない」

強い口調で言い切った。しかし有島は信じようとしな。収束させた光で剣を作り出した。

「どのような目的であれ、人間と魔族が契約するのは危険です。いくら三条君の理解が得られたところで、危険が及ぶ可能性があることに変わりはありません」

有島は光の剣を構えた。霜華は一步下がる。

「ここであなたと戦うつもりはない。魔力の無駄遣い。だから剣を収めて」

「構いませんが、条件があります」

霜華は何も言わなかった。有島は剣を下ろして続ける。

「今後、三条君と絶対に契約しないと誓ってください。三条君以外でもそうです」

「それは、私が決めることじゃなく、彼が決めることよ。それにこれは必要なこと。もし彼が契約に応じないのなら他を当たらなければいけない。絶対に」

「私はあなたに三条君や他の人に近づくなと言うつもりはありません。お友達として付き合うのはあなたの自由です。しかし、みなさんには平穏な生活を享受する権利があります。ですから、誰かに契約を持ちかけること自体しないと誓ってください。」

二人の間に沈黙が流れた。霧矢と晴代は何も言えなかった。

「……それはできない」

「……そうですか。では、仕方ありません」

有島は再び剣を構える。霜華も冷気を収束させて二本の氷の短剣を作り出し、両手で構えた。

「……私には私の目的があるの」

「その目的のために、三条君が危険な目に遭うのは、先輩として見過ごせません」

「ストップ！」

二人が切りかかるうとした瞬間、霧矢は叫んでいた。

「霧君、止めないでほしい」

「ええ、三条君は……」

「いや、そうじゃなくて、人に見られてます……」

二人とも動きを止めた。霧矢の肩越しに西村と文香が唾然として二人の決闘を眺めている。雨野は呆れ顔で有島を見つめている。

「……ご、これは…その…」

慌てて光の剣を消したが、時すでに遅し。バレバレである。

「啓子。ここでそれはまずかったわよ…」

「な…何なんですか…いつたい…」

全員押し黙っている。重い沈黙があたりを漂う。

「……………先輩、こうなったら仕方ありません。みんなにも説明するしか…」

霧矢としても不本意だったが、この場を収めるには彼らを納得させることが不可欠だ。

「……………わかりました」

有島が説明し終わると、みな信じられないと口になっている。

「にわかには信じられない」

「ええ、俺も耳を疑いますよ」

「でも、これが世界の真実だ。二人の力を見ただろう」

「まあ、光で剣を作り出したり、冷気を操って物を凍らせたり…」

「ちなみに、みんなの属性って何なのか、私は知りたいです」

晴代が疑問を口にした。西村と木村の属性が知りたいらしい。

「…西村君は土。木村さんは火です。ちなみに、光里ちゃんは風、

雲沢君は水、恵ちゃんは闇です」

「で、三条が水で、上川が火ですか」

「はい。そして、純血の魔族は対属性でない人間と契約することによつてのみ、この世界で生きることができます」

霧矢は雨野の方を向いた。

「会長は有島先輩がハーフだって知ってたみたいですね」

「ええ。まあ…いろいろあって、啓子が術を使うのを見たことがあるからね。でも、まさか三条のところに魔族、いやハーフか、がいたなんてねえ、予想外だった」

「来たのは、ついこの前の日曜日だったんですけどね…」

「それで、まああなたはまだ契約してないみたいだけど？　ねえ、

啓子」

「それはないようです。彼から水の魔力を感じます。霜華さんも今のところ契約していませんと言っています」

文香が質問、と手を挙げる。

「質問、姿形が大差ない魔族と人間を如何様にして見分けるのか。」

また、契約主とそうでないものを如何様にして見分けるのか。誰かご教授いただきたい」

「…じゃあ、私が」

霜華が返事をする。

「先ほど説明した通り、人間は不要な魔力を外に放出しているんだよ。一方、魔族はこの世界では魔力を生成できない。自分で不足しているものをさらに放出するなんてバカなことはいない。ハーフだって自給自足で精一杯だから、やはり放出しない。つまり、魔力を放出しているか、いないかで見分けられる。また、契約主は生成した魔力のすべてをある特定の個体にリンクさせているから、外部に放出できない。これで見分けられるよ」

「追加の質問。それに基づけば、魔族とそのハーフ、および契約主は識別できないはず。何故ならいずれも魔力を放出できないからである」

「契約者は体のどこかに紋様が浮き上がっているんだよ。魔族と契約主にしか見えないけど。ただハーフか純血かは相手に聞いて確かめるしかないと思うな」

「了解。では、有島副会長に確認。三条が契約主でないことがわかるのは、彼が水の魔力を放出しているのと、紋様がないことにある相違ありませんか？」

有島はうなずいた。西村が手を挙げる。

「じゃあ、俺が質問します。放出される魔力は魔族の血を引くものには見分けることができないのでしょうか？」

答えたのは有島ではなく雨野だった。

「人間には無理。ただし、特殊な方法を使えば可能よ。まあ、人間

でも契約主は魔力の流れを見ることができらしいけど」

そう答えると、雨野は制服の内ポケットから小型の単眼望遠鏡のような筒を取り出し、西村に手渡した。古めかしいデザインで古代文字が刻まれている。

「これは啓子にもらったもので、魔力分類器 カテゴリーサーチャ― っていう名前らしいんだけど、まあ、これで誰かを覗いてみるといういわ」

「上川が何か赤いオーラを放ってます…」

「晴代ちゃんには火の魔力を放出しています…」と、まあこんな感じよ」西村曰く、霧矢を見ると青く、自分を見ると茶、雨野は緑、木村は赤、有島と霜華は何もなかったらしい。

「火は赤、水は青、土は茶、風は緑、光は黄、闇は紫のオーラを放ってる。何もなければそいつは魔族か契約主。ちなみにそいつで覗けば、人間でも契約者の紋様を見ることが出来るわよ」

ふう、と息を吐いて雨野は筒をポケットにしまった。

「ところで、有島先輩は、契約は危険とか言っていましたけど…」

有島の顔が曇る。しかし、霜華はそんなことはありえない、といった表情だ。

「それは…」

有島が答えようとすると雨野が遮った。

「はいはい。そこまで。もう時間がないんだからさっさと飾りつけするわよ！」

不満そうな他のメンバーを睨みつけ、無理やりツリーのところまで連れて行く。霧矢としてはもっと知りたかったのだが、この状態の会長に逆らう気は起きなかった。

ツリーに電飾を取り付けながら、霧矢は横目で有島を見た。どこか心配そうな目をしながらツリーをロープで固定している。

きつと誰かが契約で危険な目に遭った人が身近にいたのだと思われる。そして霧矢にそんな目に遭ってほしくなかったのだらう。ま

た、霜華は自分の目的の実現のため、霧矢を協力者に選んだと言った。しかし、何の目的かは知らないが、霜華が悪いことを考えているようには思えなかった。

「それでは、今日のところは失礼します」

電車の時間が近づき、有島と西村は別れを告げる。「雨野も二人にねぎらいの言葉をかけた。

「……いいですか、霜華さん」

有島が霜華に何か言おうとしているが、雨野がそれを制した。

「やめときなさい。別に、啓子がどう思おうが契約するかどうかは、三条や霜華ちゃんの自由。私たちが口を出すことではない。私はそう思ってるわ」

「ですが、光里ちゃんはそれでいいんですか？ あんなことになるのは嫌でしょう？」

「私だつてあんなことは嫌だ。でもね、霜華ちゃんにはそこまでして達成したい目的があるんだから。それに、三条の拒否権だつて認めてる。私としてはそれを酌んであげたい」

有島は黙っていた。親友の言葉は彼女にとって重いものだった。

「……大丈夫です。僕も自分の身のことは自分で決められます。後悔もしませんから」

霧矢がそう言つと、諦めたように有島は駅の中へ消えていった。

「さて、私たちも今日のところはここまでにするか」

時計を見ると六時を回っていた。もともと冷たかった風はさらに冷たさを増している。霜華は平気そうだが、他のメンバーはもう震えていた。

「同意。私も帰宅を希望する」

「それじゃ、今日はここで解散。お疲れ様でした」

しかし、解散したはいいが、誰も動こうとしなかった。全員が誰かに質問があつたからだ。

「……………」

全員が遠慮し誰も質問しようとしないう。北風がコートを揺らしている。

「…では、あたしから質問」

晴代が口火を切った。

「雨野先輩へ。有島先輩がハーフだって何で知ってるんですか？」

「……それは、話すと少し長くなるけど…」

一年生の時、雨野と有島はクラスメイトだった。席は前と後で二人が友達になるのにそう時間はかからなかった。そしていつも、二人で駅まで歩くのが日課になっていた。

今年の冬、ある日の帰り道、二人は妙な男に出会った。

「さて、問題です。その男は私を見るなり、何と言ったでしょうか？ はい、霜華ちゃん」

「多分、『契約しろ』だと思う」

「さすが、魔族。大正解」

「正確にはハーフですよ」

これは失礼、と言うと雨野は続けた。

純血の魔族がこの世界に来た場合、しなければならぬことはただ一つ。とにかく力尽きる前に契約主を見つけなければいけない。

だが、不運なことに男は有島を魔族だと察知してしまった。さらに、男は雨野が契約に応じないと見るや、実力に訴えて炎を操り攻撃してきた。仕方なく、有島も雨野を守るために光の術を使い応戦した。

「それで、見事に先輩を守って見せたんですね？」

「いや…その…」

実力の方は男の方が明らかに上で、有島は劣勢となった。そしてあわや有島が倒されるといふところで、雨野は仕方なく、有島を助ける代わりに契約に応じる旨を伝えた。

「で…契約しちゃったんですか？」

「んなわけないでしょ。あの男バカだね」

男が気を緩めた瞬間、雨野は直接攻撃を加えた。急所に数発も蹴

りを打ち込み、鳩尾にひじ打ちを入れ、顔面に跳び膝蹴りを食らわせるなど、常人なら死に至る暴行の後、魔族である男をノックアウトしてしまった。

「……………」

「何よ。その沈黙は」

「会長…前々から戦闘力は人間離れしてると思っていましたけど…まさか素手で魔族を倒すほどだとは思いませんでした…」

他のみんなも霧矢に同意する。

「…………まあ、それがきっかけで啓子がハーフだってわかって、魔族のこととかいろいろ教えてもらったただけだね。で、命を助けたお礼としてもらったのが、さっき見せた魔力分類器」

霧矢にとつて雨野がここまで腕力の強い人間だったとは予想外だった。そう考えると、毎回お仕置きのために復活する雲沢の生命力もすごいと言えるかもしれない。

「じゃ答えたから、私から質問。霜華ちゃんへ、ただし答えたくないったら別にそれはそれで構わない。どうして、三条の家に押しかけたわけ？ 契約主としてなら水属性でもっと役立ちそうな人間は他にもいると思うんだけど」

霜華を優しい視線で見る。一方、霧矢は何となくバカにされた気分になった。

「一部だけ答えます」

迷った末に霜華はこう答えた。

彼女の計画の都合上、居場所には水の契約主と、風の人間が周囲にいて、火と土はないことが望ましかった。そしてゲートに近い町でこの条件を満たしていたのが三条家だったらいい。

「で、その計画ってのはまだ秘密ってわけね」

「それは、時が来たら霧君にきちんと話そうと思います。今はお話しできません。すみません」

霜華らしくもない、小さな声になっている。

「まあ、いいや。僕が聞いたところで、その時が来るまでははぐらかし続けるんだろ。だったら、無理に言わなくていい」

「珍しいね。霧矢だったら普通は、『吐け！ さもなくば…』とか言うはずなのに…」

「だ・ま・れ」

晴代は肩をすくめた。

「じゃあ、答えたから私の番。晴代は何でそんなに水のアクセサリをつけてるの？」

昨日と変わらず、晴代は妙なペンダントを首にかけ、カバンにはキーホルダーが大量に取り付けられている。

「…えっと、火の属性を消すために、水の象徴たるアクセサリをですね…」

「意味ないし、場合によっては自滅行為だよ」それ

「え？」

「人間の場合、対属性の魔力で直接ダメージを負うことはないけど、対属性のアイテムだけをそんな大量に身に着けたりしたら、魔法攻撃に対する抵抗力が低下することがあるよ」

晴代は慌ててペンダントを外してカバンにしまった。

質問が途切れたので、霧矢はここで終わりを宣言した。

「今日はここまででいいだろ。僕はもう帰る。行くぞ、霜華」

全員が別れのあいさつをすると、それぞれ違う方向へ歩きはじめる。

白い息を吐きながら、二人は薬局の方向へ歩きはじめる。

「霧君ってさ。結構いいところあるよね」

「そいつはどうも」

「何か、今日の霧君はいやにサバサバした感じだね。何か気に障ることでもあった？」

「別に」

「嘘でしょ」

「ああ」

「じゃあ、何なの」

「ああ」

あまりにも霧矢の態度がそっけないので、霜華は霧矢の前に立ちふさがった。

しかし、霧矢は立ち止まらなかった。そのまま霜華にぶつかってしまふ。霜華は仰け反った。

「痛いよ!」

「悪い…考え事をしてた」

霜華とぶつかったことで、霧矢は我に返った。霜華は霧矢の瞳を覗き込んでいる。

「……有島先輩が魔族だったなんて…信じられなかった…ってね」

「まあ、こつちに来る魔族自体そう多くないし、ハーフなんてもっと少ない」

「それに…会長が…ねえ…」

「まあ…あれは…」

霜華も少し引いたような笑みを浮かべている。霧矢としても、武器なしで霜華と戦って勝てるかと言われたら、ノーと答えざるを得ないだろう。純血の魔族を瞬殺したのだ。彼女に逆らうと言うことが何を意味するのか霧矢は改めて思い知らされた。

「私も、霧君が会長さんを恐れてた理由がわかった気がしたよ。私も気をつけなきゃまずいかもね」

二人ともため息をつく。

「なあ、本当に契約って人間にとって無害なのか？」

「…彼女のケースが何なのかは知らないけど、今までで人間が契約でダメージを負ったという話は聞いたことがない。それだけは本当信じてほしい」

自分の部屋にたどり着き、霧矢は体をベッドの上に投げ出した。

今日は、本当にいろいろいるなことがあり過ぎた。知り合いまで魔族のハーフだったとは…

妙なことが起こるのが人生だが、どうも最近起こり過ぎている。

霜華にはじまり、有島と雨野にも秘密があったとは知らなかった。

霜華も何か目的があるから、自分と契約させようとしている。しかし、その動機はまだ明かすつもりはないとも言っている。しかし、霜華も有島も語って見せたようにハーフは日常生活において契約を必要としない。必要とするなら、それは魔力を大量に消費する行動をするときだろう。

では魔力を大量に消費する行動とは何なのか。そこがはっきりしない。

有島は契約が危険だと言っていたが、何が危険なのかもはっきりしない。

正直な話、よくわからないことが多かった。考えても面倒なのでもうやめにしようと思矢は考えた。制服のネクタイを外し、机に放り投げる。今日晴代から借りたライトノベルをカバンから取り出した。

特に何も考えずに、そこにある「文字」を目でなぞる。数ページ読んだところで夕食の支度が出来たという霜華の声がして、下の階に下りて行った。今日もまた一日が終わった。

三人で話しながら、夕食を平らげ、当たり前のように時間を過ごす。

この時間は決して悪くはない。でも、何故か気に入らない自分もいた。

メリット・デメリット 2

十二月十四日 金曜日 晴れ

「今日はこんなに暖かいのに…作業はお休みかあ」

「まあ、休みなら休みでいいだろ。」

金曜日の放課後になって、霧矢と晴代は校門に立っていた。本来は今日も作業をするつもりだったのだが、急に雨野が今日は休みだと告げてきたのだ。

「昨日貸したのどうだった？」

「まだ半分くらいしか読んでない。でもまあ、それなりに面白いことは認める」

「…あれはあたしのイチオシだよ。あれをつまんないなんて言うやつがいたら、即抹殺！」

「ソウデスカ。ソレハヨカッター」

棒読みの返事をする、後ろから声をかけられる。振り向いてみると雲沢だった。

「三条、待ってくれ」

「雲沢先輩？ どうしたんですか急に」

「有島から。今日の昼にこれをお前に渡すようにと言われた。じゃあ、確かに渡したぞ。うゝさむ。さつさと生徒会室に戻ろう」

こんなに暖かいのに寒いとは、雪国の人間失格ではないだろうか。霧矢は思ったが、口には出さなかった。寒さで震えている上級生の背中を見送っていると、隣から晴代が封筒を取り上げた。

「有島先輩からかあ。もしかしてラブレターだったりしてね？」

「その何でもかんでもすぐ、カップリングに関する妄想にふけるのはやめろ。腐りかけてきている証拠だ」

有島ほどの女子が自分のことが好きだなんて言ったら学校中がひっくり返るだろう。

手紙を奪い返し、中身を取り出す。紙を広げるときれいな小さな字が綴ってあった。

霜華さんを連れて、電車に乗ってください。すみません、勝手なお願いですが、ぜひとも、お一人にお話ししておかなければならないことがあるのです。このことは家の方にもきちんと話してあるので、三條君は気にする必要はありません。

封筒を探ると、切符が二枚入っている。

「……だそうだ。と言うわけで、僕は行かないといかん」

「あたしもついて行っていいのかなあ？」

「勝手にしろ。だが、交通費は自腹を切るはめになるぞ。往復で千五百円近くするけどな」

財布を取り出し、中身を覗き込む。

「あと、少しだけ足りない」

「だったらお留守番だな」

「お金貸して」

「この前、お前にあんまん買ってやったから、僕の財布の中はほとんど空だ。明日なら小遣いがもらえていたが、今はそんな金はない」

「…はあ、食い意地の張った自分が憎らしいよ」

うなだれている晴代を横目に、霧矢は携帯で家に電話を掛ける。

「もしもし、復調園調剤薬局です。…って霧矢？」

「ああ、母さんか。霜華に代わってくれるか？」

しかし、霜華は不在だった。何でも気になることがあると言い残して、そのまま出かけてしまったらしい。

「ところで、母さんは有島先輩から話は聞いてると思うけど、ちょっとこれから遠くまで出かけてくる。霜華にはその件、話したい？」

「それが…霜ちゃんが出かけた後に電話がかかってきて…霜ちゃんには伝えられなかったのよ」

「何時ころだった？」

「そうねえ…今から一時間くらい前に霜ちゃんが出かけて、その十分くらい後に電話がかかってきたわねえ」

「そうか、わかった。とりあえず、夕食はいらさないから。あと霜華に会ったら四時五二分までに駅に来るように伝えてくれ」

電話を切った。肝心な時にいないやつだ。有島恵子の項目を選択し、電話を掛けるが、電源が切られているか、電波の届かないところにいるとなっている。仕方がないので届かない可能性が高いがメールを送る。

とりあえず、そっちに行きますが、霜華と連絡が取れません。どうしましょうか？

しばらく待つても返信は来ない。返信を待っている間に霧矢たちは駅まで着いてしまった。電車の時刻まであと十分。時間的にはちょうどよいが、駅のどこにも霜華の姿は見えなかった。

「ほらほら、お前はさっさと行った！」

晴代を追い払おうとするが、彼女は動こうともしない。

「ねえ、時間までに霜華ちゃんが来なかったら、切符はあたしがもらうことにしていい？」

「却下！」

「じゃあ、その切符どうするのさ」

「払い戻して、先輩に返す」

上目で霧矢を睨むと、何かを閃いたような表情になった。

「ねえ、もしもだよ。霧矢がこの前、雨野先輩のことをゴリラ会長って言ってたのをばらすと言ったら？」

晴代は意地の悪いニヤニヤ顔で霧矢を直視している。

「霜華！頼むからすぐに来てくれ！お願いだから！」

しかし、霧矢の願いは天に届かず、電車が到着しようとしていることを知らせるアナウンスが鳴った。晴代が霧矢のポケットに入っていた封筒を抜き取り、切符を一枚取り出すと、改札を通り抜けた。仕方なく、霧矢も晴代に続き、ホームに到着した電車に乗り込む。

ゆっくりと電車が動き出す。程よく暖房の効いた車内は快適だったが、まわりが帰宅する高校生であふれている中、魔族がどうだとか話す勇氣は二人ともない。二人とも沈黙したまま時間が過ぎ去り、眠りに落ちてしまった。

「次は終点です。お乗換えのご案内をいたします。新幹線ホームは三階にございます。上り、東京行き、十八時六分、十二番線……」
到着のアナウンスで、二人とも目を覚ました。

見慣れた駅より、はるかに大きな駅に降り立つ。慣れない自動改札機に切符を入れた。

時間带的に、帰宅する人でごったがえしている改札口で目を凝らすと、有島が立っていた。

「すみません、霜華と連絡が取れなくて……」

「いえ、仕方ありません。もともとは私の勝手なお願いです。忙し
い中わざわざ来ていただいております。それで、代わりに上川さんを連れてきたと」

「はい。邪魔でしたら追いかけてください」

「いいえ。上川さんも霜華さんといういろいろ付き合いがあるよう
です、知っておいても損はないでしょう」

「何を……ですか？」

「魔族との契約に関してです」

それだけ話すと、有島は二人を連れて駅ビルの外に出た。タクシ
ーを拾うと、二人に乗るように促した。有島は補助席に乗り込む。

「小林記念病院までお願いします」

薬局で育った霧矢はその病院の名前を知っている。この町で数本
の指に入る大きな病院だ。しかしそんなところに連れて行ってどう
しようというのだろうか。

「病院つてことはやっぱり、アレがらみで誰か倒れたんですか？」

「ええ。意識がないのですが、お二人も実際に見てもらった方が良
いと思います」

有島の声は、今まで聞いたことのないくらい沈んでいた。

十分ほど車を走らせると、白い建物が視界に入ってきた。
「着きました」

タクシーを降りると、有島が先導する形で病院に入る。夕食の時間帯で面会時間帯はとくに過ぎているのだが、誰も有島に声はかけない。

病院の建物の一番はずれの個室まで来ると、有島は足を止めた。

「……ここです」

憂いを含んだ顔で二人と向き合う。病室の名札を見ると、あまのまもる雨野護と書かれている。

「雨野……まさか！」

「はい、光里ちゃんの弟です。残念ながらもずっと眠り続けているんです」

引き戸を開けると、部屋は二重に仕切られていて、機会につながれた霧矢より少し年下の少年がベッドに横たわっているのが、ガラ又越しに見えた。

「彼が、雨野先輩の弟さんなんですね？」

「はい、護君です」

「やっぱり、契約のせいでしょうか……」

晴代が悲しそうな声を出すと、扉が開いて一人の女子高校生が入ってくる。

「先生曰く原因不明。現代医学では説明不可能だっけさ。脳波、血液、遺伝子疾患、臓器機能、一切異常なし。健康体そのもの。でも、意識が戻らず植物状態が去年の秋から続いている」

「会長……」

「今日も、相変わらずか……」

感情の込もっていない声で、昨日、西村に貸した魔力分類器を霧矢に差し出した。

「こいつで、護を見てごらん」

言われた通りに、筒に目を当てて、少年を見ると、魔力の放出が観測できない。

「オーラがない……やっぱり契約者か……」

「右手の甲に注目してみな」

彼の右手の甲に妙な幾何学模様が浮かび上がって、紫色に発光しているのが見えた。

「何か紫色に光ってるな……」

「はい。護君の属性は闇です。契約者の紋様はその人間の属性に対応した色で発光しています」

晴代に魔力分類器を手渡すと、彼女も同じように覗き込む。

「あ、ほんとだ。紫色の紋様が見えるよ」

「……もし、僕が霜華と契約したらこんな風に植物状態になってしまふんですか？」

もし、有島が首を縦に振れば、霜華と契約することなど絶対にできない。

「……契約自体で人間が植物状態になることはありませんから安心してください。しかし、彼がこんな風になってしまったのは、契約が関係しています。もっとも、護君が倒れたのは私と光里ちゃんが知り合ったときより前のことなので、私もすべてを知り尽くしているわけではありませんが」

雨野は霧矢たちに背を向けた。

「私が啓子に出会えたことは、私にとっても、護にとっても幸運だったとしか言いようがないわ。それまでは原因もわからなかったけど、魔族が関係していることはわかったからね……」

暴君会長らしからぬ、切ない声だった。

「そう考えると、あの火の魔族の方にも感謝しなければなりませんね……そうでなければ、光里ちゃんも私が魔族のハーフだと知らなかったままでしようしね」

有島も床を見ながら湿っぽい声を出した。

「でもさ、契約が関係してるなら、契約を解消してしまえばいい話じゃないんですか？」

晴代が霧矢も思っていたことを口に出した。

「…もしかして、一度結んだ契約は二度と消えないとか…？」
有島が顔を上げた。

「契約を解消することは可能です。ただし、お互いが望んだ時です。どちらかが解消に反対していれば、解消できないんですよ」

寂しそうな表情で微笑んでいる。

「それって何かに不便じゃない？」

「不便ではあるけれども、魔族にとって必要だから仕方がない」

霧矢の言葉に晴代は振り向く。霧矢は護を見たまま、晴代の方を向かずに話し続けた。

「もし、人間が勝手に契約を解消できるとしたら、ゲートから遠く離れたところで、契約を解消されたら、その魔族にとってはたまったものじゃない。もはやそれは死刑宣告に等しい。砂漠のど真ん中に水と食料なしで放り出されたようなものだ。ゲートにたどり着くまでに力尽きてしまうかもしれない。人間もそれを見越して、魔族を脅して意のままに扱うこともできるだろうしな」

「…珍しく、霧矢が冴えてるね」

「うるさいわ。僕だってこれくらいの論理的思考力はある」

「また、基本的に契約を意識的に解消すると、人間と魔族、双方が命に関わりかねないほどの大きなダメージを受けます。ですから、契約が解消されるのはまれなんです」

霧矢は振り返って、有島の方を見た。

「契約が原因だとしても、普通は契約ではこんな風にはならないと霜華も言っていた。だとすれば、単純に契約に原因があるわけじゃないと思います」

「私も、よくわからないのです。本当は霜華さんにも意見を聞きたいと思っていたのですが…今日は都合が悪かったようですね…」

霧矢は済まなさそうに頭を下げた。

「私はハーフですが、生まれてからずっとこっちの世界で暮らしています。向こうの世界に行ったことがないんですよ。実のところ、護君の症状と契約が関係している可能性があると言ったのは私の父

なんです。その父も魔族なのに契約のことをあまり知らないという…何ともお粗末な話ですが…」

「有島先輩のお父さんって、光の魔族でしたっけ？」

「はい。ありきたりに言えば、天使みたいなものです」

そう言うと、有島は病室のドアに鍵をかけ、目を閉じた。体に光が集まると、次の瞬間、背中に白い翼と頭上に光の輪が出現した。

「うわあ……」

二人とも美しさに息をのんだ。

「雪女の次は、天使か…はは、もう何が何だか…」

「霧矢、そこは喜ぶところじゃないの？」

「お前みたいな年中頭が春な人間と一緒にするな。どうせお前は『有島先輩うらやまし』とか思ってたんだろう」

霧矢は疲れた目で晴代を見るが、晴代はもう嬉しさで飛び跳ねている。

「先輩つてやつぱり、何か魔法みたいな術が使えるんですよ？」
目を輝かせながら、上目で有島を見つめている。

「そ、そうですね…まあ、あまり強力な術は使えないんですが…強力な光を発して相手の視覚を一時的に封じたりとか、ちょっとした光弾を打ち出したりはできます」

「うわあ〜ちょっと」

「試さなくて結構です！」

後輩の過剰な期待の眼差しを受けて、少し引いている有島に、霧矢は助け船を出す。有島も力を封じて、翼と光輪を消した。

「…もつと見たかったのに〜」

「だ・ま・れ」

霧矢は晴代の後頭部を軽く小突いた。雨野は扉の鍵を開けた。

「もう、いいでしょ。そろそろ帰る時間」

「では、最後に一つだけ」

真剣な顔つきに戻って、有島は霧矢を見つめた。

「…昨日、あんなことを言ってしまった私の言えることではないの

ですが…このことを霜華さんに聞いてみていただけないでしょうか？」

「霜華に…？」

「これは、私からもお願いしたい。啓子も啓子のお父さんも契約に關してはそれほど詳しいわけじゃない。どっちもこっちの世界での暮らしの方が長いからね。その点、霜華ちゃんはごく最近まで向こうにいた。その分何か知ってるかもしれない」

お願い、と雨野は頭を下げた。雨野が霧矢に頭を下げるなど、天変地異が起こっても不思議ではない出来事を目の前にして、霧矢は絶句する他なかった。

「は…はい…」

「明日は土曜日ですけど、飾りつけで今日の分の埋め合わせをするつもりなので、明日都合がよかったら、またお会いしましょう」

四人で病院を出た。昼間、晴れていた分、夜になって急激に冷え込んでいいる。路面は凍りつき、バランスを崩せばいつ転んでもおかしくない。

タクシーに乗り、駅に向かう。車内では誰も口を利かなかった。

（契約の何かが関係している…しかし、何が？）

（霜華さんを信用しないわけではありませんが…しかし、嫌な予感がします）

（護の植物状態の原因が分かれば…きっと…）

（やっぱり、危険でもあたしも契約したいなあ… 紋様もカッコいいし火の魔族力モン！）

何を考えているのかお互い知る余地もなく、タクシーは暗い街並みを走り抜けていった。

「…すっかり遅くなっちゃった」

三人は薄暗い駅のホームに降り立った。途中まで有島と一緒に乗っていたが、彼女の住んでいる場所は市街地の郊外なので先に降りていた。

「結局、明日も作業するんですか？」

晴代の質問に対し、雨野は逃げようとする霧矢の肩を掴んだ。

「できれば、来てほしいけど…来れないなら……………」

（デッド・オア・ワーク…!）

「まあ、三条、あんたの賢明な判断を期待するわ」

背後から迫る殺気に恐怖を覚えながら、霧矢は首を縦に振った。

「じゃあ、雨野先輩は西村君にも伝えてあるんですか？」

「西村は来たくないって言ってたけど、来なかったら三条と連帯責任ってことにしとくから」

雨野が最後まで言い終わらないうちに、霧矢は携帯電話を取り出し、西村龍太の項目を選択し、電話をかけた。

着信拒否された。

（あの…野郎…！ 僕を道連れにする気か？）

考えた末に、先日雨野から送られてきたグロ画像を添付したメールを送ることにした。

西村、貴様もこのようになりたくないのなら、明日絶対に来い！ さもなくば…

駅を出ると、飾りつけ途中のクリスマスツリーがまわりの民家の薄明かりに照らされて大きな影を作っていた。明日は電飾を取り付ける予定だが、メンバー一人の出欠によっては霧矢の命が危ない。

雨野と別れる交差点まで来ると、やっと西村から返信が来た。

たとえ、あんな風になるとしても、明日は行きたくない。土

曜日は正午まで寝るのが俺のポリシーだ。

（お前が屍になるのは勝手だけど、僕まで巻き添えを食らうのは認めんなんだよ）

鬼のような形相で液晶を睨みつけ、イライラで携帯を持つ手が震えている霧矢を見て、晴代は霧矢に耳打ちする。

「それだ！」

晴代の提案を受け入れ、西村にメールを送ると、数十秒で返信が

来た。

ぜひとも、手伝わせてくれ！

単純なバカで助かったと霧矢は安心するとともに、こんな奴が自分より生徒会の中では格が上だということに落胆してしまう。

「まあ、と言っわけで、明日西村は来るようです。ですので、命ばかりはお助け願います」

雨野は満足そうな表情をする。

「これで人数の問題はオーケー。じゃあ、また明日。それと、今日のこと霜華ちゃんによく頼むわね」

雨野は手を振ると住宅街の方へ歩き出した。

「ただいま」

「おかえりなさい！」

家の戸を開けると、霜華が出迎える。いつもと変わらない様子だ。

「お前、昼どこに行ってたんだよ。せつかく見せなきゃいけないものもあつたのに……」

「えっと……まあ、いろいろだよ」

何かを隠しているような表情だが、霧矢は追及しなかった。他人事には必要以上に介入しないのが霧矢のポリシーでもある。

「まあいい。それよりも話がある」

「話？」

「ちよつといくつか質問がある。ここじゃなんだから、部屋で話そう」

怪訝な顔をしている霜華をよそに、霧矢は荷物を居間に放り投げ、階段を上がっていく。霜華も霧矢に続く形でついてくる。部屋の小机で二人は向かい合う。

「さて、どこから話そうか……」

「え、何。二人きりでまさか、愛の告白？」

「違う。僕が聞きたいのは契約についてだ」

動じることもなく、ボケをスルーした霧矢を、霜華は上目づかい

で睨みつけている。相変わらず、子供じみたふるまいをしているが、霧矢としてはもうそんなことはどうでもいい。

「もしも、契約によって契約主が倒れるとしたら、考えられる原因をすべてあげてくれ。どんな些細なことでもいい。思い当たる可能性をすべてだ」

「いきなりどうしたの」

「今日、会長の弟に会ってきた」

霜華も護のことについて興味を持ったようだ。霧矢の話を実剣に聞いていた。霧矢が一通り話し終えると、霜華は腕組みを解いて、部屋を歩き回ると霧矢のベッドに腰掛けた。

「確かに、護君の昏倒は、魔族が関係してるのは間違いない。でも、契約が原因ではないと思うけど」

「魔族がらみだけど契約じゃない？」

「契約以外の魔法術式でああなってるんだと思う。たとえば意識破壊とか無期睡眠とか。挙げてったらキリがないけどね」

「魔法術式が原因なら、そいつを解呪したら解決するんじゃないのか？」

「どんな術式なのかはつきりしてるならできないこともないよ。ただ、強力な呪いの解呪となると、基本的に対属性の術を使わないといけないから……」

つまりは、彼の呪いが火によるものでなければ、霜華に解呪することはできない。

「彼の呪いが小から中程度の呪いか、強力なものだったとしても火か闇であることを祈るしかないかな」

「火はわかるけど、何で闇なんだ」

「やり方くらいなら教えられるから、有島さんにやってもらえばいい。もつともその呪いが私の知ってるものだったらだけだ」

しかし、自分の対属性以外の呪い以外は解呪できないなど随分と不便な話だと霧矢は思う。霜華にそのことを指摘すると、ポケットから何種類かのカードを取り出した。

「小から中程度の呪いなら、こんな感じのマジックカードで解呪できるよ。あと、それほど重傷でないならケガも治せる。ただ、一年以上も続くような強力な呪いなら、直接術をかけて呪いを解くしかないから…」

「マジックカード？」

霜華の説明によると、小さな魔方陣を記入したカードを使うことで、自分の属性以外の魔術を補助的に行使できるようになるらしい。ただし、術の威力は本来のものより大幅に劣る。それでも便利なので、大体の魔族は数枚持ち歩くのが常になっている。

霧矢が手に取って眺めてみると、どれも似ているが、一つだけ明らかに違うものがあつた。

「その、一番目立つのが回復用のカード。魔族にとっては常備薬みたいなもんだし、これで解呪できなかつたら呪いの対属性の人に解呪を頼むのが、向こうでは普通なんだよ。あと、それはカードそのものに魔力が込められているから、人間でも使えたりする」

しかし、そのカードで解呪できそうかと霧矢は尋ねたが、霜華は難しいと答えた。ここに至って護がまだ眠っているということは相当強力な呪いであるということに他ならない。小から中程度の呪いならば、長く続いても数週間で自然に解けるらしい。

「やっぱり、昏睡させる大魔法だと思うなあ。火か闇であることを祈るしか…」

霧矢は携帯電話を取り出し、今霜華から聞いたことをメールに打ち込んでいく。有島と雨野に送った。

「しかし、私はもっと別のことに興味があるんだけどね」

「別のこと？」

「護君と契約した魔族はどこに行っちゃったのか、ということ。魔族は契約主と近くにるのが基本なのに」

霜華が言うには、契約による魔力の伝達には物理的な距離は関係しないが、精神的な距離が影響してくるらしい。つまり、お互いの絆の強さによっては、魔力が上手く伝わらないことがあるのだ。さ

らに、お互いの絆が完全に失われてしまえば、契約は自然消滅してしまうらしい。絆を深めるには近くにるのが一番いい。もしくは、頻繁に連絡を取り合う等。

しかし、護は意識不明で連絡など取れるわけもない。近くに魔族がいるという話も聞いたことがない。

「向こうへ帰ってしまったか、もうすでに死んでしまったか、のどちらかじゃないのか？ 僕はよくわからないけど」

得た知識を元に、霧矢なりの仮説を立ててみたが、霜華は首を横に振った。

「どつちもありえないな。実は契約魔族と契約主がそれぞれ違う世界にいる場合、契約はその間、一時的に無効になっちゃうんだよ。だから、もし向こうに帰っちゃったんなら、契約の紋様は消えてるはず。あと、契約したうちのどちらかが死んだらその時点で契約は解消されて、契約主の紋様も消えちゃうから、その可能性もないよ」つまり、護と契約した魔族はまだ、こちらの世界のどこかにいるということだ。

「：契約主ほつたらかして何やってんだろうな」

霧矢はぼやいた。ただ、霜華と話してわかったことは、霜華は有島よりも非常に多くのことを知っているということだ。

霧矢の携帯電話が鳴る。メールではなく電話がかかってきている。開くと見たこともない番号からだ。訝りながら通話ボタンを押す。

「もしもし、どちらですか？」

「すみません、有島です。家の電話からかけているのですが、今よろしいですか？」

見たことのない番号は有島の家の電話番号だったようだ。構わない旨を伝えて、霜華にも話が伝わるように、ハンズフリーのボタンを押した。

「とりあえず、先ほどのメールの件なんですが、光里ちゃんとも相談した結果、明日作業が終わったら、三条君にはまた大変迷惑をおかけしますが、また病院に来てもらいたいそうなんです。お願いし

てよろしいですか？」

「病院行きの方が、優先順位が上でしょう。西村と晴代、木村の三人に作業させて、僕たちだけ先に行きましょう。後から手伝えばいいと思いますけど」

「みんなに迷惑ですし、上川さんだって一緒に来たいと言っくんじやないでしょうか？」

「だからですよ。あいつに知られる前に、さっさと済ませてしまいたいんです」

霧矢の意見に霜華が口を出した。

「だめだよ。晴代だって興味があるんだし、昨日だって一緒に行っただから、行きたいって言うなら連れて行ってあげなきゃ」

霧矢は霜華に文句を言ったが、相変わらずすねた霜華の扱いに霧矢は慣れていなかった。結局、有島も霜華の肩を持ち、最終的に霧矢は晴代の同行を認めざるを得なかった。

「それでは、夜分遅く、失礼しました。明日、九時半に駅前でお会いしましょう。それと、霜華さん、昨日は申し訳ありませんでした。何分私の無知が原因です。いろいろと教えていただきありがとうございます。ございました」

丁寧に礼を言うと、有島は電話を切った。

「……だそうだ。というわけで、明日の午後、一緒に病院に来てくれできれば、晴代には黙っていてほしいけどな……」

「晴代はきつと毎日がつまんないんだよ。刺激を求めて、退屈な日々につんざりしてたんだと思う。そして、私のような非日常的な存在に出会った。でも、そんな人を自分だけ何も知らされていない状態にするなんて、結構ひどいことだと私は思うよ」

そして、霜華は基本的に誰に対しても邪険に扱うことはしない。その行動が危険なものでない限り止めはしない、と語った。たとえば危険なものでも本人に覚悟があるのならと。

霧矢はその発言に一言だけ返した。

「ありえねえ」

霧矢が真顔で言い放った直後、頭上に氷の塊が出現した。そのまま重力に従い落下した推定三キログラムほどの塊は、霧矢の脳天を直撃して砕け散った。

「霧君の意地悪！ もう知らない！ おやすみ！」

意識を失い、床で伸びている霧矢に憤慨しながら、霜華は乱暴に部屋の戸を閉めた。

メリット・デメリット 3

十二月十五日 土曜日 晴れ時々雪

「おお、きりやよ、しんでしまうとはなさけない！」

聞き覚えのある声で霧矢は意識を取り戻した。しかしこの声は霜華ではない。重い体を起こして声の主の方を見ると、ショートヘアのオタク少女がそこにいた。

「お前、何で僕の部屋にいる」

疑問には答えず、晴代は霧矢の部屋をうろついている。

「昔と結構変わってるね。机の位置はこっちじゃなかったっけ」

「もう一度聞けど。何で僕の部屋にいるんだ」

強い口調で切り返した霧矢に晴代は渋々といった感じで口を開いた。

「何でって……迎えに来たけど、いつまで経っても出てこなかったから。霜華ちゃんの機嫌は悪いし、何か怒らせるような事でもした？」

時計を見ると、九時二十分。集合時間の十分前だ。

「昨日いろいろあって……あいつ、まだ怒ってるのか？」

「え、いろいろ？ もしかして霧矢、霜華ちゃんにあんなことや、こんなことを……」

「断言する。貴様の考えていることはすべて間違いである」

「文香みたいな喋り方しなくてもいいから。それよりも、さっさと行かないと、また雨野先輩の鉄拳制裁を食らうんじゃないの？」

力なく霧矢はうなずくと、無言で上着を着込み、部屋を出る。晴代の話では霜華は先に出てしまったらしい。

急ぎ足で駅まで歩く。今日の天気は作業するにはあまりよくなく、粉雪がちらちらと舞っている。

「そういえば、今日はスキー場のオープンだったな」

商店街の外れにある小さなスキー場は、町の観光収入の大部分を占めている。今日はオープン日ということもあって、スキー板やボードを持った人が駅から歩いてきていた。

「明日、滑ってみる？ 先輩たちも誘って」

「滑るのはいいかもしれないけど、板の手入れをろくにしてないし、それを今夜やる気はしない。滑るなら冬休みに入ってからだ」

家から徒歩十分程度のところにスキー場があるせいで、霧矢はスキーを小さいころから結構やりこんでいる。腕前もそれなりだ。しかし、腕前は昔から晴代の方がはるかに上で、地味にコンプレックスを抱えていたりもする。

駅に着くと、スキー観光客に紛れて、ツリーのもとに浦高生徒会のメンバーが集合していた。しかし、いつもより二人ほどメンバーが多い。

「来たな、二人とも……」

いつもは会報の編集をしている眼鏡をかけた青年と細目で無口な少女が佇んでいた。

「おはようございます。雲沢先輩、神田先輩」

雲沢は西村と二人、大きなあくびをする。その気の抜けた表情とやる気のなさから、雨野によって無理やり呼び出されたのだと霧矢にはすぐわかった。

霧矢は霜華と目が合ったが、昨日のことをまだ引きずっているらしく、霜華は鼻を鳴らしてそっぽを向いた。様子を見る限りでは、霜華は霧矢が来るまで文香や有島といろいろ話していたようだ。

「それじゃ、全員揃ったし、始めるわよ」

雨野が号令をかけると、全員が作業に取り掛かる。相変わらず、霜華はこの寒い中薄着で平然としていて人目を引いていた。雲沢と神田が特に何も意識していないのを見ると、すでに雨野や有島が二人に霜華について話していると思われる。

「なあ、三条。お前運がいいよな」

脚立に乗り電飾を飾り付けながら、雲沢は隣で同じように脚立の上で飾り付けている霧矢に話しかける。

「先輩はもうあいつのこといろいろと聞いてるんでしょ」

「ああ、有島から聞いたし、北原自身も自己紹介できちんとハーフだと言った。俺も神田も最初はびっくりしたけどな」

電飾を木に巻きつけながら雲沢は続けた。

「お前にはもつたいたいぞ。あんない子」

「……先輩、何か誤解してませんか？　そういう関係じゃないんですけど」

モールや飾り玉を括り付けながら、霧矢は雲沢に反論する。霧矢にとつては、霜華は居候であつて、それ以上もそれ以下でもない。

「そうなのか？　俺はてつきり……」

「晴代にも言いましたけど、完全な誤解ですよ。それ」

「両手に花とはうらやましいことだ」

軽くバカにする表情で、息を吐きながらやれやれといった口調で雲沢は首を振った。

「だから、違いますって。それに両手に花なんて言ったら、晴代に殺されますよ！」

「おーおー。ムキになっちゃって」

冷やかすような口調で霧矢をからかっている。

「正直、お前を見てるとうらやましいよ。女の子に囲まれて、しかもみんな優しいときてる」

「それは『隣の芝は青い』ですよ。それに晴代はああ見えてそれほど優しいわけじゃないですよ。会長ほどではないですけど、暴力的であることに変わりはないです。霜華だって、怒るといろいろ魔法攻撃を仕掛けてきますし」

「雨野よりましなら十分だ。あのゴリラときたらいつも俺を殴りやがって、殴ること以外に能がな……」

最後まで言い終わる前に、脚立が倒され雲沢は地面に落下した。

「誰がゴリラだって……？　もう一度言ってみな……」

駅前に悲鳴がこだまする。貴重な戦力が一人減ったが、雨野としてはもともと雲沢のことを戦力として見ていなかったらしい。

昼ごろになって一通り飾り付けが終わり、霧矢は脚立から降りた。「お疲れ様。三条、これでクリスマススの飾り付けは、ほぼ終了よ」「全員が拍手する。」

「最後の仕事は、そうだね……霜華ちゃんにやってもらおうかな」「雨野はツリーのとっぺんに取り付ける星を霜華に手渡した

「わっかりました」では最後の仕事行きますね」「高いテンションで脚立に上がる。危なっかしい足取りだが、無事、頂点に星を取り付けることができた。

全員が歓声を上げ、もう一度拍手した。

「さてと、今日はこれでお開き。三条と、霜華ちゃんは昨日お願いした通り、いいかな？」

低姿勢な雨野を見て、学習しない浦高の副会長はからかうが、一瞬で屍にされた。

神田が死体と化した雲沢を軽々と片手で拾い上げ、会釈をすると無言で立ち去った。普段は非常に目立たない神田だが、雨野と同等の体力の持ち主であるようだ。

「どうしますか？ 上川さんや木村さんも一緒に来ますか？」

「行きます！ 交通費は用意してあります！ 準備は万端です！」

「晴代から聞きました。私も行ってもよろしいだろうか」

霧矢としては遠ざけておきたい二人は、首を突っ込む気満々だった。ため息をついていると、後ろから何か呼びかけられる。

「おい、俺は置き去りですか？」

「目的地はあんたの家と逆方向よ。それに、あんた、交通費持ち合わせてるの？」

「……いくらくらいかかりますか」

「いろいろ考えると二千円は必要よ。あんたは大人しく帰りなさい」「西村は肩を落とし、みんなと一緒に駅の待合室に入った。

「はあ……お前の言ってたことは嘘じゃなかったけど、何か寂しい

ねえ……」

「どうせお前のことだ。一日中一緒にいられるとでも思ってたんだろっ」

午前中、西村は霜華と一緒に作業していた。しかし、思いのほかはかどり、一日中かかると思われた作業は午前だけで終了してしまった。

昨日、西村を引きずり出すのに使ったのは、「来れば霜華と一緒に作業できる」というものだった。あつという間に食いつき、あつという間に釣れた。

上り電車の到着を知らせるアナウンスが鳴り、西村はとぼとぼホームに向かった。

「西村、これでクリスマスツリー関係の仕事は終わりだからな。駅前商店街での手伝いとかはもうないからな」

霧矢がとどめの一撃を放つと、西村は電車の中で両手両膝を地についた。

「私は、現実世界でネットに出てくる記号みたいな体勢を取る人を初めて見たぞ」

「確かに、あたしもそれには同意」

電車のドアが閉まり、ゆっくりと西村を乗せた電車は霧矢たちの目的地の反対側に向けて走り出した。

西村を乗せた電車が見えなくなるのを見届けると、晴代が唐突に話し出した。

「ところで、霧矢が昨日いろいろあったとか言ってたけど、霜華ちゃんまさか霧矢に変なことされたんじゃないよね？」

いきなり変なことを言い始め、霧矢は固まってしまふ。「変なことはされてないけど、傷つくようなことは言われたよ」

霜華がわざとらしく悲しそうな目を見ると、一同が霧矢を直視する。

「三条、あんた、女の子に対するデリカシーってもんはないわけ？」

「三条君、いくらなんでも…最低限の心構えは必要ですよ……」

「やはり、貴様は女の敵か」

「霧矢、昔からそうだったもんね…あたしにもいろいろ変なこと言ってきたことあるし…」

紅一点ならぬ黒一点の上、四面楚歌の状況で、霧矢は助けを求めように霜華を見るが、当然の報い、といった表情で素知らぬ顔をしていた。

（やっぱり、金を貸してでも西村にはついてきてもらうべきだったか？）

結局、霧矢は五人から仲間外れにされ、違う車両に追いやられてしまった。隣の車両では女の子たちがガールズトークに花を咲かせているのが見えた。

土曜日で真つ昼間の地方在来線だけあって、乗客はあまりいない。好きな席に座れるのはよいのだが、到着までの時間、暇を持て余してしまう。本でも持ってくればよかったのだろうが、財布以外持ち合わせていなかった。

霧矢が孤独な時間を過ごしている一方で、霜華たちは魔族についての話をしていた。まわりに誰もいないため、話したところで奇異の目で見られることもない。

「昨日、霧矢ともいろいろ話したし、メールでも聞いたと思うけど、護君の昏睡の原因は魔族との契約の副作用じゃなくて、何らかの呪いを受けている可能性が高いと思う。特に契約者は魔法攻撃に対する耐性が常人より低いしね」

「どつという意味かご教授願いたい。大体は晴代から聞いたが、この件については初耳だ」

「あたしも、契約主が魔法攻撃に弱いつて言うのは知らないなあ」
未契約の人間は、生成した魔力を周囲に放出している。しかし、決して無駄に放出しているわけではない。魔族と異なり、魔法攻撃に対する耐性が生来低い人間は、生成した魔力を放出することで、

わずかではあるが防御用の障壁を作っている。しかし、魔族と契約してしまつと魔力の放出はストップし、その魔力は契約した魔族に回されるため、障壁の生成ができなくなる。そのため、魔法攻撃に対する耐性が低下し、呪いなどにかかりやすくなる。

「これが、人間にとつて契約のデメリット。といつても日常生活で魔族に出会うことなんてめつたにないし、しかも魔法攻撃を受けることはもつとないだろうから、さほどデメリットでもないかもしれないけど…」

「もしかして、あたしが水のアクセサリーをつけてるとダメつてのは……」

「晴代は火の魔力で障壁を作つてる。水の魔力を持つ物体が近くにあり過ぎると、つまり、大量に身に着けたりすると、せつかくの障壁が打ち消されちゃうんだよ」

文香は熱心にノートにメモを取っている。科学部員の性と言つべきなのか、物事に関する理論的な話にはとても興味があるようだ。

「その点は理解した。では、人間が魔族と契約することによって得られるメリットは何か」

文香の問いに対して答えたのは、霜華ではなく有島だった。

「魔族と比べて人間にはメリットが少ないと思いますよ。ただ、一つあります。まあ、それをメリットと感じるかどうかは人それぞれですが…」

「ねえ、こういう話をするときは、霧矢も一緒の方がいいような気がするんだけど…」

晴代が口をはさんだが、霜華は昨日のことにまだ怒っていて、霧矢を呼ぶ気にはなれなかった。晴代としては、そこまですぬることだろうかとも思っている。

「いいの。そのうち話しくから」

「いや…でも…」

「いいのー!」

(霜華ちゃん…一度怒ると、なかなか素直になれないんだね…でも、

何となく可愛いかも…)

「それで、メリットと思われるものは何なのか」

文香が一言一句聞き漏らすまいと、メモを取る気満々の状態で質問する。

「実は、契約した人間は身体に何らかの変化が出ます。それが何かは人それぞれですが、私の母の場合、バリアーを張る術が使えるようになりました」

晴代が歓声を上げる。しかし、有島は曇った表情のままだ。

「実は、父は護君の昏睡の原因は、このせいではないかと思っっているんですよ」

契約したことにより、護は何らかのスキルを手に入れた。しかし、そのスキルを暴走させ、その反動で倒れたのではないか、という仮説だ。

「なるほど、その発想は私にはなかった。確かにその説も一理あるかもね。ただ、何かそれも考え過ぎのような気もするけど」

「ですが、逆に呪いをかけられたとするならば、何の理由でだと思えますか？ まだ中学生の子供にわざわざ呪いをかける必要が見当たらないのですが」

二人とも黙り込んでしまう。

どちらの指摘も的を得ていたからだ。

「まあ、着いてみればわかるわよ。それまではいくら考えても仕方ない」

雨野が強引に話題を終わらせた。

*

駅に着くと、霧矢は電車から一番に降りた。

(……暇なことこの上なかった……くそ、しかも寒い！)

寒いホームに立ち、女子五人が降りてくるのを待つのは結構きつ

いものだった。こういう時に限ってのらくらと行動するのがお約束らしい。

ゆっくりと五人が出てくる。しかし、霧矢の呼びかけを無視して五人は急激にスピードを上げて、さっさと改札へ向かった。

「おいこら！ 待ってくれ！」

あたふたと霧矢は五人を追いかけた。五人はこれ見よがしに早歩きを始める。しかも運の悪いことに、人ごみで五人と霧矢は分断されてしまう。

人の群れをかき分け、ロータリーに出ると、五人の姿は見えなかった。あたりをきよるきよるしていると、遠くから呼びかける声が聞こえてきた。

「霧矢、こっちだよ！」

晴代がバスから手を振っている。仕方なく、バス乗り場まで歩き始めたが、あと数メートルのところまでバスは発車してしまった。

(……何だこりゃ……)

絶句している中、霧矢のポケットが振動した。晴代からメールが送られてきている。

「少しは反省した？」って霜華ちゃんが言ってたよ。昨日来たんだし、距離的に歩いてでも行けるでしょ。

霜華は携帯を持っていないので借りたのだらう。そして、この狙ったようなバスの発車時刻はあらかじめ計画しておいたに違いない。この文面で霧矢は確信した。

「おのれ、半雪女！ もういい！ だったら勝手にしろ！」

頭にきて叫んでしまう。近くを歩いていた人は何事かと振り向いたが、霧矢のイライラはそんなことを気にする余裕も消し去っていた。

考えてみれば、雨野たちが必要としているのは霜華であって、霧矢がその場にいる必要はない。雪道を病院まで歩くのも面倒だった。考えた末、駅ビルで時間を潰すことにした。霧矢の住むド田舎とは違って、この町はそれなりに店や設備が充実している。昼食をま

だ食べていないので、駅ビル構内にあるファーストフード店に入
た。

適当に選んだメニューを注文し、昼食を受け取って席に着いた。
土曜日の昼時ということもあって、部活帰りの高校生などで店内は
混んでいた。

(……あの程度で、そこまで怒るか？ 普通)

昨日霜華に見せてもらったまま、返すのを忘れたマジックカード
をいじりながら、ストローでジュースを吸い上げる。

昨日、霜華は、マジックカードは人間でも使えると言っていた。
霧矢としても試してみたくないわけではなかったが、呪いにかかっ
ていたり、ケガをしていたりするわけでもない。さらに回復以外の
カードが何なのかは説明すら受けていない。うかつに使用したら何
が発動するかわかったものではないので軽々しく扱えなかった。二
種類のカードを見比べながら、ハンバーガーにかぶりついていると、
二十代後半くらいの女性が近づいてきた。

「…相席してもいいですか？ ここしか空いていないので」

「ええ、どうぞ」

霧矢の向かいに座ると、その女性はジュースを飲みながら霧矢に
話しかけてきた。

「単刀直入に言うけど、何でマジックカードを持つてるのかしら？」

「！」

「あなたは契約主でもないのに、カードを持っているということは、
知り合いに魔族がいるということよね」

霧矢は突如現れたこの女性の発言に、動揺を隠せなかった。

「その顔からして、凶星のようね。お姉さんの話を聞いてくれるか
しら？」

「……………何が狙いです？」

「魔族の力が必要なよ。具体的には魔族が契約主を集めてるの」
霧矢は女の右手に何かの力が集まっていくのを感じた。

(……………ッ！ まさか、ここでやる気か！)

人ごみの店内の中、霧矢は大急ぎで逃げ出した。
「ちよつと！ 待ちなさい！」

それは正しいのか 1

(……くそ！ 何でこんなことに巻き込まれなきゃならないんだ！)
霧矢は駅の構内を走っていた。怪しい女は人ごみの中を悠悠と追いかけてくる。そこに人などいないかのごとく、霧矢と女の距離は縮まっていく。

(こんなことになるくらいなら、こんなカードはしまっておくべきだった！)

心の中で自分の浅はかさを責めながら、霧矢はとにかく走り続ける。しかし、逃げているだけで精一杯で、他の策を練る時間がなかった。

全力で駅を走り、改札の近くにある男子トイレに逃げ込んだ。相手は女だ。人目もあるのでそう簡単に入ってこれないはずだ。携帯電話を取り出し、晴代の電話番号を選択する。

(……頼む！ 出てくれ！)

念じながらかかるのを待ったが、スピーカーから聞こえてきた音声は霧矢にとって非情なものだった。

(畜生！ 病院にいるせいだな。電源が切られてる！)

電源を切り忘れていることを祈って雨野と有島にもかけたが、晴代だって切っているのだ。あの二人が切り忘れてはいるはずがなかった。

仕方がないので、早めに誰かがメールをチェックしてくれることを期待して、晴代、雨野、有島の三人にメールを一齐送信する。しかし、この調子では助けに来るのはいつになるのか、わかったものではない。今すぐメールをチェックしたとしても、タクシーもろもろの時間を考慮して、少なくとも二十分ほどは持ちこたえる必要がある。

入り口から外を覗いていると、確実に女はこちらに近づいている。「……すみません、こちらへんに高校生くらいの短髪の男の子がい

ませんでしたか？」

「……このトイレに入っていましたよ。よほど慌てていたんでしょうなあ。ものすごい勢いで駆け込んでいきましたよ」

女は聞き込み調査を成功させてしまう。霧矢は心の中で答えた男性を憎んだ。

それなりに人の出入りの多いトイレではあるが、今は霧矢一人しかいない。下手をしたら、人目を気にせず入ってくるかもしれない。そうすれば、まさに袋の鼠。逃げ場はない。

いや、それ以前に相手が女一人だという保証はどこにもない。仲間に男がいるかもしれない。今更になつて、ここに逃げ込んだ自分を霧矢は責めた。

「ねえ、お姉さんの話を聞いてくれないかなあ？」

霧矢の視界に最初に入ってきたのは、トイレにある窓だった。霧矢の体格ならギリギリ通り抜けられるかどうかの大きさだ。しかし、ここは駅ビルの二階である。いくら雪が積もっているからと言っても、このまま飛び降りたらただでは済まない。

「そこにいるのはわかってるわよ。別に、危害を加えようとかそういうつもりはないんだけど、君が出てこないのなら、お姉さんもしるゝる覚悟を決めなきゃいけないんだけどなあ」

脅しをかけてくる。もはや一刻の猶予はない。どう考えても、霧矢は雨野と同等の体力の持ち主ではないから、魔族と正面で戦っても勝てるとは思えない。しかし、相手の手に落ちれば何をされるかわからない。

(ならば！ 答えは一つ！)

清掃道具のロッカーを開け、長さ五メートルほどの水撒き用のホースを取り出す。しっかりと固定し、窓から垂らす。地面までの長さが二メートルほど足りないが、そこからは飛び降りるしかない。そろそろと降りはじめると、しびれを切らした女が男子トイレに入ってきた。

「ちよつと！ 何やってるのー！」

女が発した大声にびっくりして、霧矢のホースを握っていた手が滑った。霧矢の体を重力がとらえ、そのまま加速しながら落ちていく。

「がはっ……！」

猛烈な衝撃が霧矢の体を襲う。数コマ遅れて、全身に激痛が走った。幸い背中から着地したので、頭にダメージは一切ない。しかし、今まで経験したことのない痛みに、霧矢はのたうちまわっていた。

「大丈夫？」

女が窓から霧矢を見下ろしている。しかし、明確な意思を持って攻撃しようとしてきた割には本気で霧矢のことを心配している表情だ。

「まあ、いいわ。今すぐそっちに行くから、待ってなさい」

数十秒経って少しだけ痛みは引いてきたが、腰にダメージを負ってしまったらしく、立ち上がることができない。仰向けになって涙で霞んだ鉛色の空を見ることしかできなかった。

(……くそ……ここで終わるのか?)

無理やり体勢をうつぶせに変え、這ってでも逃げようとしてもがいていたが、女はもう霧矢の前に現れていた。

「場所的にちょうどいいわ。まあ、お話だけでも聞いてくれるかしら？」

落ちた先は裏路地だった。通行人は皆無。いるのはゴミ箱を漁る野良犬だけだった。

女は屈みこむと、うつぶせになっている霧矢の目を覗き込んだ。

「自己紹介から始めましょうか。私はリリアン・ポーン。君の名前は何かというかしら？」

「……三条霧矢だ。それがどうした」

「霧矢君か。ねえ、君はマジックカードを持つてみたいんだけど、契約はしてないみたいね。魔族と契約しないなんてもったいないわねえ。せっかく異能の力も手に入るっていうのに」

「契約で異能だと……?」

「あら、知らなかったの。まったく、言わないなんてどんな魔族なのか……」

リリアンは首を振った。

「人間は魔族と契約すると、ちょっとした異能が使えるようになるのよ。どんな能力が目覚めるかは人それぞれだけど」

リリアンが話し終わると、霧矢は顔を上げた。

「今度はこっちが質問させてもらう。何が目的だ」

「あらあら、いきなりその質問かあ。お姉さん困っちゃったな」

わざとらしく明るく困ったふりをしている。しかし、霧矢としてはそれがリリアンの一番言いたいことであろうことを理解していた。「こんな真似をしてまで、人材を集めてるんだ。それ相応の理由があるはずだろう」

「なかなか、鋭いのね。嫌いじゃないわよ、そういう人」

骨にひびが入ったらしく、少し腰に力を入れるだけで激痛が走る。

「そうね……とりあえず、目的だけど、簡単に言えば、魔族を使って足のつかないように誰かを殺そうってやつね。そのため魔族が契約者が欲しいのよ」

「絶対に断る。僕は人殺しにはならない」

間髪入れずに霧矢は拒絶の意志を示した。

「そう言うと思ったわ。でも大切なのはこれからよ」

向きを変えると、リリアンはゴミバケツの上に腰を下ろし、足を組んだ。

「霧矢君、君は誰かを殺してやりたいと思うほど憎んだことはない?」

「…生憎だが、僕はそんな軽々しく人を殺めたいと思うほど、短気な人間じゃない。そんなことを考えるやつは…ろくな…」

腰の痛みで話は途切れてしまう。見かねたように、リリアンは霧矢にアドバイスする。

「ポケットに入ってるのを使ったらどうかしら。それくらいのダメ

「ジだったら簡単に治ると思うけど」

(…霜華のマジックカードのことか…)

リリアンの言うことを素直に聞くのも癪だったが、痛みが霧矢の限界に達していたのも事実だった。ためらったが、ポケットから赤い紋様の刻まれたカードを取り出した。

「ケガを負った場所にかざしてみるといいわよ」

うつぶせの体勢で腰にカードを持っていき、念じてみると、カードが光り輝いて消えたかと思うと、痛みがなくなっていた。

(……治ってる…のか…?)

ねじってみても痛みは全く感じず、霧矢は普通に立ち上がることができた。コートにまとわりついた雪を払い、霧矢はリリアンを直視した。

「さて、痛みも消えたところで話を続けましょうか」

「……僕は殺人者になるつもりはない。殺人者の協力者にもだ」

「殺人者の殺人者にも？」

挑発的な笑みを浮かべてリリアンは霧矢を見る。霧矢はまだ使っていないカードを持って身構えた。

「この国の司法は腐ってる。誰かに大切な人を殺されても、どうせ犯人はそのうち刑務所から出てくる。犯人が死刑になるなんてめつたにない。さらにひどいときは、精神異常ってことで無罪になって病院に入院して終わり。それを狙って、わざと演じている汚い犯罪者もいる」

少し悲しそうな目をしながら、リリアンは続けた。

「大切な人を殺されても、復讐する機会すら与えられない。個人的な復讐もまた犯罪。殺人者と同列扱いされるの」

「…だから、魔族の力を使って復讐をするって言うのか？」

「そう。魔族の魔法や契約主の異能で人を殺しても証拠は残らない。残っても立件できない。私は、天罰の代行者」

「ゴミバケツから立ち上がると、リリアンは霧矢の前に立った。

「霧矢君。君は誰かの無念を晴らしてあげたいとは思わない？」

霧矢は構えていたカードを下ろした。しばらく、目を閉じて考えた。

もし、家に帰ってみて母親が無残にも殺されていたとしたら？

もし、父親がバラバラにされていたという連絡を受けたら？

もし、山中のどこかで友人の血まみれの肉片が見つかったら？

(…そんなことになったら、僕はどう思うだろうか…)

あまりにも非現実的な話で、想像できなかった。しかし、犯罪の被害者はその想像すらする前に現実になるのだ。そして、多くの場合、咎人は相応の罰を受けることはない。数年だけ塀の中で過ごし、また社会に戻ってくる。

大切な人は殺されたのに、憎き仇敵はのうのうと生きながらえている。残された人にとってはさぞかし悔しいだろう。

だが、いくら復讐とはいえ殺人は許されるのか。たとえ相手が殺人者であつても人間を殺してよいのか。相手と同じ殺人者という存在になつてもよいのだろうか。

(…わからない。実際に誰かが殺されなければ…判断なんてできるわけがない)

さらに霧矢は質問する。自分の意見をはっきりさせたかった。

「…仮に復讐したとして、何が残るんですか。空虚な満足だけじゃないんですか？」

自然と霧矢の口調は年上に向けるものになつていた。リリアンに対する警戒が解けたわけではなかったが、彼女の信念は本物であるということが感じ取れたからかもしれない。

「そうかもしれないわ。でも、大切な人を奪われた上に、その空虚な満足さえ得ることを禁じられていたら君はどう思うかしら？」

「…残された者へせめてもの救いを、ですか？」

リリアンはうなずいた。霧矢としてもわからなくもなかった。しかし、そのために自らの手を赤く染めることはできないのも確かだった。

「あなたも、誰か大切な人を？」

「まあ……ね」

霧矢から目をそむけ、横を向いて息を吐いた。

寂しそうな横顔だった。霧矢が言葉に詰まっていると、ポケットが振動した。二階から落ちてても無事だったとは少し意外だった。

「…はい、もしもし」

「霧君！ 魔族に襲われたって本当なの？」

焦った声の霜華の声が聞こえてきた。

「ああ。でも、まあ何とかなった。逃げようとして大ケガを負ったが、お前のカードのおかげで助かった。ありがとな」

「で、どうなったの？」

「捕まったけど、一応、友好的に接してくれてる。捕まえてどうこうしようというつもりはないらしいが、ちょっとした勧誘を受けてる」

「無事だったんだ……よかった…本当によかった…」

受話器の向こうで安心してため息をつくのが聞こえた。

「霧矢君の知り合いの魔族かしら？」

「はい。水の魔族のハーフで、半雪女です。まあ光のハーフ、半天使もいるんですけど、純血の知り合いはいませんよ」

「二人も知り合いがいたなんてね…」

感心した様子でリアンはため息をついた。

「…とりあえず、今は駅にいて問題ない。そっちはどうだったんだ？」

「はいはい。まあ、契約異能の暴走と呪いの両方が混ざってると言った方がいいかな。つまり、私の推測と有島さんの推測は両方とも合ってたってわけ」

「よくわからんが、原因はわかったんだな？」

「うん…でも、原因と対処法はわかってても、それを実行不可能…という最悪な結末になっちゃった…」

落胆した声で霜華は言葉をひねり出した。

「呪いの属性は、やっぱり火と闇以外だったのか？」

「うん…氷の呪いで意識を一時的に凍結させる魔術。でも、これ自体ならカードでも解呪できるよ。ただ、契約異能のせいでややこしいことになってる」

「契約異能って、契約主が使えるようになる異能の力のことだよな？」

霧矢の言葉に、霜華は戸惑う。

「あれ、私、霧君に契約異能について話したことあったっけ？」

「よくも黙っててくれたな。おかげで何も知らないままサイキックにされるところだったぞ」

「冗談交じりでさりげなく不満を伝えた。」

「そのうち話そうと思ってたけど、今回の魔族の人から聞いたのかな？」

霧矢がそうだと答えると、霜華は話を続けた。

「私が見た限り、護君に発現した異能は、自分のある状態を半永久的に持続させるもの。つまり、魔のシンクロを起こしちゃうってるわけ」

「自分の意識凍結を本来は一時的なものなのに、半永久的なものにしちまったってわけか？」

「そう。持続を解除しようと思っても、そもそもその意識がないから解除できない。それにこういう風に継続している状態はカードじや解呪できない。火の魔族で相当な使い手じゃないとダメ」

「相当な使い手の火の魔族が必要か……わかった。とりあえず、また後でかけ直す」

息を吐くと、霧矢は携帯電話をポケットにしまった。リリアンは興味を持ったようだ。

「契約異能でトラブルでも起きたのかしら？」

「そんなところですよ。解呪に火の魔族が必要らしい」

「私に協力してくれるなら、火の魔族を紹介してあげてもいいけど。もちろん腕は折り紙つきよ。どうする？」

ギブ・アンド・テイクを持ちかけてきた。しかし、霧矢の答えは決まっていた。

「彼女がどう言うかはわかりませんが、僕はお断りします」
霧矢としては、リリアンの信条を否定することはできなかった。かといって肯定する気にもならない。ただ、自分だったら、自分のために誰かが殺人を犯したらいい気は絶対にしないということは確信していた。

正直な話、昨日会ったばかりの知り合いの知り合いのために、殺人の片棒を担がされるのは嫌だった。人助けは嫌いではない。しかし、そのために人の道を踏み外すのは絶対に嫌だった。結局、霧矢は考えた末に、応じられないという結論になった。

「…残念ね。その子を助けるチャンスだったのに」

「僕としては、どっちでもいいんですよ。呪いにかかった人は知り合いの弟に過ぎませんから、僕が誰かを手にかけてまで助けるいわれはありません。そもそも昨日まで存在すら知らなかったですしね。僕が彼のためにあなたたちを手伝う理由なんてありませんから」

薄ら笑いを浮かべて、霧矢は言い放った。

「もし、あなたがどうしてもギブ・アンド・テイクを要求するならば僕でなくて、彼の姉に提案したらどうです？ 少なくとも僕よりはあなたの申し出に応じる可能性は高いと思いますけど」

「できるなら護を助けてやりたい。でも、誰も手に掛けたくない。少なくとも自分は。」

所詮人間はエゴイストなのだ。特に親しいわけでもない人を助けるために、誰かを殺す理由などない。リリアンの言葉を借りれば、その後、自分はずっと暗い思いにとらわれたまま過ごすことになるかもしれないのだ。秤にかければどちらに傾くかなどいちいち語る必要すらない。

「君は思っていたより、冷たい人間なのね」

「それはどうも。でも、程度の差こそあれ、人間はみな冷たいんですよ。そうでなければ、あなたみたいな思いをする人は今頃この世

界にはいませんから」

霧矢の台詞をリリアンは否定できなかった。仕方なく彼女は話題を変えた。

「そのお姉さんはどんな人なの？」

腕力が滅茶苦茶強い。怒らせたら命はない。ただ、面倒見はよく、結構みんなから慕われている。強情な面もあるが、悪人ではない。

しかし、彼女はリリアンの誘いを受けて、どう答えるだろうか？ 極悪人は殺されて当然。その手伝いをして、護が目を覚ますのならこれほど安い取引もない。そう思うのだろうか。

そして、彼女と霧矢の決定的な違いは、助けたい人が大切な存在であるということだ。

「でも、そのお姉さんは契約主ではないし、契約相手もいないんじゃないの？ それで仕事してもらっても、足がついちやって捕まっちゃうわよ。さつきも言った通り、魔法か、契約異能か、どちらかじゃないと意味がないのよ」

雨野に契約相手ならいないわけではない。属性は一致しないが、対属性ではないので契約は可能だ。しかし、性格的にも信条的にもその相手がそんな目的のために雨野と契約するとは思えない。二人はお互いに無二の親友だが、その点での合意はきつと得られまい。

「…ね。だから、お姉さんは霧矢君にお願いしてるの。君はそのうち契約するんでしょ？ さつき電話で話してた子と」

霜華も霧矢と契約するつもりはあるようだが、果たして霧矢が契約異能を用いて正義の実現の名の下に殺人を行ったと知ったら、どう思うだろうか。

ただの殺人なら間違いなく失望するだろう。しかし、裁かれない罪人への天誅という理由ならどうか。霜華は自分の行いを認めてくれるだろうか？

認めてくれたとしても、霧矢は復讐であつても殺人を犯したくはない。なぜなら霧矢は極悪人は殺されて当然と割り切ることはできないからだ。それによって妙な罪悪感を背負うのはごめんだし、下

手をすれば、護もその罪悪感に襲われることになるかもしれない。

この究極の取引は、応じるには代価が不明確だ。霧矢が冷血漢であるならそれはそれで全く問題はなかった。断ればよい。しかし、三条霧矢という人間は中途半端なエゴイストだった。人助けは嫌いではないが、それによって自分が重すぎる代償を背負うならやろうとしない。そういう人間だ。

「……まあ、いきなりこんなことを言われて納得するなら、それはそれでちよつと問題かもね」

リリアンはポケットを探る。メモ帳を取り出し、ペンでいろいろ書き込んでいる。

「これ、私の携帯番号。回答期限はクリスマス・イブの三日前の金曜日」

霧矢はためらったが、結局紙片を受け取った。

「じゃあ、霧矢君。私は君が私たちの考えを理解してくれることを期待するわ」

背を向けると、リリアンは姿を消した。

「……殺人者の殺人者、天罰の代行者：か」

しばらく、霧矢はその場に立ち尽くしていた。確かに、魔族の力や契約異能で人を殺しても科学的に証明できず、立件は不可能だろう。

簡単にまとめてしまえば、護を助けたければ、必殺仕事人になれと。そういうことだ。

（ああ！ もうイライラする！）

中途半端なエゴイストは煮え切らない気持ちで、駅の入りに向かって歩き出した。

駅前のバスターミナルには病院行きのバスが停まっていた。晴代にこれから向かうとメールを送り、霧矢はバスに乗り込んだ。

ゆつくりとバスが発車し、白銀の道路を走っていく。

「次は、小林記念病院前です。お降りの際は忘れ物の無いようお願いします」

それは正しいのか 2

白い建物の前の大通りにあるバス停では有島が待っていた。

「三条君！ とりあえず、無事でよかったです…」

本当に心配そうな顔をしていた。その表情が、自分にはあまりにももったいなく感じられたので、霧矢は謝罪の言葉を口にせずにはいられなかった。

「すみません。僕が駅で時間を潰したりなんかせずに、きちんと歩いて行けばよかったです」

「…とりあえず、お話は病院の談話コーナーでしましょう。みんなもそこで三条君を待っていますから」

有島に従って、霧矢は歩き出す。時計を見ると午後三時半。みんなきつと談話コーナーでお茶でもしているのだろう。

土曜日の昼間ということもあって、病院は見舞客で人が多かった。談話コーナーの一角では、女子四人が飲み物を片手に座っていたが、霧矢の姿を見ると全員が駆け寄ってきた。

「みんな、とりあえず、僕はこの通り無事です。ご心配をおかけしました」

冗談を込めた口調で、霧矢は頭を下げた。しかし、みんなはそうは思わなかったらしい。霜華に至っては、有島より心配した顔をしていた。

「ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

霜華が霧矢の手を取って頭を下げた。突然のことに霧矢は啞然とする。

「私がつまらない意地を張って霧君を一人きりにしたから……そもそも、マジックカードを預けっぱなしにしたのが…本当にごめんなさい！」

数時間前の態度とは百八十度異なる霜華の様子は、見ていて逆に滑稽だった。しかし、リリアンの話を聞いた直後で、笑うだけの心

の余裕は霧矢にはなかった。

「…別に怒ってない。それよりも、会長と有島先輩に話がある。三人だけで話したいから、少し席を外すぞ。晴代と木村とそのままゆっくりしてくれ」

霧矢は雨野と有島を連れて、談話コーナーから去った。人に聞かれないところとして霧矢が思い浮かべたのは、護の病室だった。

昨日来た部屋の扉を開ける。相変わらず窓ガラスの向こうで少年は眠っている。

*

「……会長、お話があります」

いつになく深刻な顔をしている霧矢を見て、雨野も有島も重要な話だということはわかっていようだ。深呼吸して霧矢は話し始めた。

「もし、天罰の代行者になれば、護君を救えるとするならばどうしますか？」

二人とも霧矢の言葉の意味をとらえかねている。霧矢は続けた。

「さつき、リリアン・ポーンという魔族の女、いや今から思い返してみると契約主だったのかもしれませんが…に出会いました。彼女曰く、復讐の手伝いをしてくれれば、火の魔族を紹介してくれると」「復讐の手伝いだって？」

霧矢はリリアンから聞いたことをすべて話した。雨野の眉が吊り上っていく。

「…つまり、私が啓子と契約して、契約異能の力でその復讐を手伝え、と言うわけね」

「話の流れ的には、非科学的な力なら何でもいいみたいなので、霜華や有島先輩単独でもいいのかもしれませんが、僕としては会長が有島先輩と契約するのを念頭に置いてました。要約すれば、火の魔族を紹介する代わりに、こちらも力を使える人を助っ人として一人

紹介すると。そういうことです」

一呼吸置いて、霧矢は続けた。

「正直な話、僕が霜華と契約して、そうするというのが、向こうの考えだったようです。ですが、僕としてはそんなことに協力したいとは今の段階では思えませんでした」

「…私がするかしないかを決めると。そういうことね？」

霧矢はうなずいた。雨野はしばらくの間、護を見つめ、意を決したように口を開いた。

「…啓子。私と契約してくれる？ もちろん、私だけでやる。啓子は協力しなくていい」

「光里ちゃん！ それはダメです！ いくら正義の復讐だと言っても、殺人は殺人です！ 私は友達を人殺しにしたくない！」

雨野は有島の肩を掴んだ。真剣な眼差しで有島を見つめた。

「…他に、護を助ける方法があるなら、それを選びたい…でも、他にあるの？」

有島は黙っていた。確かに、火の魔族がいなければ護が目覚ま可能性はゼロに等しい。そして、有島にも霜華にも火の魔族とのコネクトは今のところない。リアンの紹介がなければ、火の魔族を手に入れる機会は雨野にとっては宝くじの一等並みに低い。

「いくら光里ちゃんの頼みとはいえ、その願いは聞けません。いくら護君のためでも、そのために契約はしたくありません」

「…じゃあ、護はずっとこうやって眠っていると言うの？」

感情的になつた雨野の声が病室の中に響く。

「…ずっと眠っているとは言いません。確かに私の知り合いに火の魔族はいません。ですが、いつか見つけることもできるはずです…去年だつて偶然でしたけど。ですからその時を待つて、光里ちゃんの方から契約を申し出れば…」

「それって十年後？ それとも五十年後？ それじゃ、いつになるかわからないのよ！ それに、霜華ちゃんだつて言っていた。これ

くらい強力な呪いは相当な使い手じゃないと解呪できないって。並の火の魔族じゃ無理なのよ！ 霜華ちゃんが原因を見つけてくれて、三条がその治療の足がかりを探してきた。これは千載一遇のチャンスよ！ これをむざむざ見逃すって言うの？」

半泣きになった声で、雨野は続けた。

「どうせ、ターゲットは殺されて当然の人間なんですよ。護を助けるのに天罰の代行者になることくらい、私は全く躊躇なんかしない！」

「殺されて当然な人間って…！ 本当にそう思っているんですか？」
「啓子。あんたは優しい人だから、私を殺人者にしたくないって言うのもわかる。でもね、私にしたら、罪人の命と引き換えに護の意識が戻るっていうなら、この手を赤く染めたって後悔なんかしない！」

「そんなことをして護君を助けても、彼が喜ぶと思うんですか！」
「あんたは護の何を知っているって言うのよ！ 話すらしたことないくせに！」

いきり立った雨野を遮る形で霧矢は二人の中に割って入った。これ以上の二人の応酬を見るのは耐えられなかった。

「こんな話をするべきではありませんでした。すみません。僕が悪いです」

「三条……」

「この話は忘れてください。無かったことにして、別の方法を考えましょう。僕も会長を殺人者にしたくない。こんな話を持ち出した僕がバカでした。ですから、二人とも仲直りをして……」

最後まで言い終わる前に、雨野が霧矢の襟首を掴んだ。

「…三条。リリアンさんの連絡先を教えなさい……」

リリアンから受け取った紙は霧矢のコートのポケットの中に入っている。しかし、雨野はリリアンの指定した条件を忘れていた。

「…たとえば、教えたとしても、契約異能の使えない人は…お断りと申っていました…有島先輩が嫌だと…言っている以上…会長は…仲

間に…入れて…もらえないでしょう」

首を締め上げられているため、霧矢は途切れ途切れにしか話すことができなかった。霧矢の顔色が危険な色に変わり始めたが、雨野は手を緩めなかった。

「いいから、連絡先を教えなさい！ 死にたいの？」

意識が遠のきはじめ、霧矢はポケットを指さす。左手で霧矢の首を押さえながら、雨野は霧矢のコートの中のメモ用紙を引っ張り出した。

「光里ちゃん、放してあげてください！ 三条君が苦しんでます！」

紙片をポケットにしまうと、雨野は手を放した。霧矢は手を床に付けて咳き込んだ。

「啓子。私は絶対にあきらめない。私に契約相手がいないのなら、こちらから見つけるまでよ。十二月二十一日までに絶対に探し出して契約する。それが強大な火の魔族なら、私は天罰の代行者にならなくて済むけど、それはあまり期待できない」

「…光里ちゃん…」

「そんな声を出すくらいなら、今、私と契約してよ」

「私は魔族として、契約主が殺人の手段として契約異能を使うのなら、契約はしたくない」

きっぱりと言い放ち、両手を広げて、ドアの前に立ちふさがった。

「そう。なら、私は他の魔族を探しに行くまで。果たすべき仕事が終わるまで、会長の仕事よろしく。有島副会長」

雨野が有島の前に立った。目でどけと合図している。しかし、有島は動こうとしない。

「ごめん。啓子」

それだけ言うと、雨野は病室から駆け出した。

残されたのは鳩尾に拳を打ち込まれうずくまる有島と、咳き込み続けている霧矢、姉のしようとしていることなど一切知らない護だけだった。

*

「霧矢、先輩たちと何を話してるのかなあ？」

「おそらく、先ほど出会ったという魔族のことではないのか？」

文香は霜華から聞き取ったことをノートにまとめている。契約について詳しく書かれたそれは、もはや完全な記録文書に近かった。

「ところで霜華、済まないが契約異能についてももう一度詳しく説明を求める。望む力を手にすると言っていたが、今一つ理解できない」
ペンで、契約異能の項目にアンダーラインを引くと、下の余白に説明を書き取っていく。

「人間が魔族と契約すると、人間には契約異能の力が目覚めるのは説明したよね」

文香はうなずく。霜華は続けた。

「どんな能力に目覚めるかは人それぞれなんだけど、目覚める能力はその契約した時に、その人間が強く願っていることに近いものが属性的に目覚めるんだよ」

「え…？ 強く願っていることってどういうことかな？」

晴代が湯飲みを口に運びながら、興味を示す。

「例えば、土の人間が契約の時に誰かを守りたいと強く願ったとする。そうすると、土の防御系の異能が使えるようになったりする。土壁で攻撃を防いだりとか、砂嵐で敵の攻撃を妨害したりとか。それもまた人によっていろいろだけだね」

「じゃあじゃあ、あたしが、誰かを倒したいと強く願ってたりしたら…」

「炎とか熱を操って敵を倒すとか…そんな感じの契約異能になるんじゃないのかなあ？」

文香は熱心にノートに書き込んでいく。

「…でもさ。だったら、誰かを殺したいとか強く願っていたとしたら…」

「とんでもないほど誰かに対して強い殺意を抱いているのならば別

「ただ、基本的には敵を倒したいと同じだと思うよ」

「でも、そのとんでもないほどの殺意があるなら……」

「……おそらく、ものすごい攻撃力を伴った契約異能が目覚めるだろうね。あつという間に相手を殺せるほどの」

霜華はお茶を飲み干すと、立ち上がって紙コップをゴミ箱に捨てた。外を眺めると、相変わらず粉雪がちらちらと舞っている。高層階にあるため、窓からは白く染まった街並みを一望することができた。

(…霧君が魔族に勧誘を受けた……何の?)

霜華としては、とりあえず霧矢の身の安全を確認することだけを考えており、連絡を取ったときに聞いた勧誘を受けたという霧矢の言葉を完全にスルーしていた。しかし、今になって冷静に考えてみると、霧矢がいろいろ危険なことに巻き込まれているのではないかと、不安になってきたのも確かだ。

(後で聞いてみよう……)

クリスマスケーキのような街を眺めていると、晴代が隣にやってきた。

「ねえ、お正月はあたしのところに泊まりに来ない?」

「え……?」

「霧矢のお父さんってさ、大学の先生でしばらくの間、家を空けててクリスマスには戻ってこれないんだけど、このお正月に久々に帰ってこれるんだって」

霜華は晴代の次の言葉を引き取った。

「家族水入らず、お正月を過ごさせてあげたいから、私は晴代の家に泊まっていた方がいいってことだね?」

「霜華ちゃんが邪魔だってことはないだろうけど……おじさんも結構気を使うだろうし……それにさ、あたしたちの仲を深めるってことで……! お正月には霧矢や来てくれるなら雨野先輩もうちに呼ぶつもりだし、結構うちも寂しいからね……いてくれると嬉しいんだ」

晴代はちよつとうるたえながら、霜華を誘っている。

「…それとも…火の人間が二人以上いる家に数日でもいたら、まずかったりする？」

「数日くらいなら問題ないけど…迷惑じゃないの？」

霧矢がもしこの場にいたら、「いきなりうちに押しかけてきたお前が何を言うか」とか言いそうだった。晴代は首を横に振った。

「霧矢にも話してあるし、もし、気が向いたらぜひうちへどうぞ！」

「……ありがとう。嬉しいよ」

自分より背の高い女の子に霜華は笑顔で返した。

（こっちの世界の人はこんなにも暖かいのに……風華のわからずや……）

晴代が後ろを向いた。

「あれ、雨野先輩。どうしたんですか？」

「……霜華ちゃん。二人きりで話したいの。一緒に外まで来てくれる？」

有無を言わず、霜華は雨野に引っ張られていった。

*

「大丈夫ですか？」

しばらくして、有島は痛みをこらえて立ち上がった。

「ええ…死ぬかと思ったけど、何とか…無事です」

一日に二回も生命の危機に立たされたのは霧矢にとって初めてのことだった。のどに違和感が残るが、そんなことを気にしている場合ではない。

「すぐに、追わないと！」

「三条君。そんなに焦らなくても大丈夫です。この世界に魔族はそう多くありませんし、ゲートの近くにありとは言っても、ゲートはくぐるだけで相当魔力を消費するらしいですから、こっちにくる魔族の毎年の数は片手で足りません。来週までに探し出して契約なんて無理ですよ」

有島はなだめるように言い、まだ咳き込んでいる霧矢の背中をさする。しかし、霧矢は有島が一つ重大なことを見落としていることに気付いていた。

「違います！ 会長には先輩以外に知り合いの魔族が、もう一人いる！」

霧矢は有島の手を払って立ち上がった。

「まさか……」

「ええ、霜華が危ない！」

霧矢はドアを乱暴に開け、廊下を駆けていく。有島は眠っている男の子に会釈をすると、ドアを優しく閉め、霧矢に続いた。

病院内を疾走するなど迷惑行為以外の何者でもない。すれ違う看護師から注意されたが、無視して談話コーナーまで突っ走る。薄暗い廊下が一気に明るくなる場所で急停止して左に九十度回転した。

「晴代！ 霜華はどこにいる！ 答える！」

晴代の両肩をつかみ、乱暴に前後に揺する。

「彼女なら、会長が連れて行ったぞ。二人だけで話があるとか何とか言っていたな」

目を回してふらふらしている晴代の横で、新聞を読んでいた文香がにべもなく答えた。

「くそ！ 遅かったか！」

テーブルを拳で叩く。まわりにいた人は何事かと霧矢の方を振り向いた。

「とりあえず、探すぞ！ 木村は先輩と一緒に建物の中。晴代は僕と一緒に外を探すぞ！ 説明は後でしてやる。とにかく大至急だ！」

晴代の襟首をつかみ、霧矢はエレベーターに乗り込む。一階のポタンを押す。

「何があつたつて言うのよ。そんな血相を変えるようなこと？」

「簡単に言うと、会長は魔族との契約を強く望んでいる。霜華がそのターゲットにされている」

「何で先輩がいきなり契約したいなんて言い出したのさ？」

「護を助けるための取引に応じるためだ。そのためには契約主になる必要がある」

抽象的すぎて晴代は理解できなかった。しかし、霧矢の切迫した表情から大切なことであるということはわかっていた。

「とりあえず、私たちのすべきことだけ聞く。それでいいんですよ」
「助かる。僕たちのすべきことは、会長に早まったことをさせないことだ」

エレベーターのドアが開く。霧矢は駆け出す。

受付嬢は息切れした霧矢と晴代を見て何事かと思っていたようだが、霧矢が霜華について尋ねると、「薄着の女の子なら先ほどもう一人の女の子と正面から出て行った」と答えてくれた。霧矢は正面口から表に出る。

寒風が容赦なく吹き付け、身体に染みてくる。

（会長は狡猾だ。そう簡単には邪魔されないとどこに居るはずだ…）
あたりを見回しながら、建物の周囲を駆け足で回っていく。しかし、建物を一周したが、霜華の姿はない。

「ねえ、霧矢。もしかして、先輩たちは外にいないんじゃないのかな？」

晴代が白い息を吐く。

「でも、受付の人は外に出たと言ってたぞ。瞬間移動でも使えなきゃ中にはいないだろ」

「…ねえ。雨野先輩ってものすごく頭が回る人なんですよ」

雨野の知恵はもはや狡猾というレベルではない。人の裏の裏をかき、腹の中まで見通してくる。策を弄して罠にはめようとしても、逆にはめ返すだけの知恵と腕力を持っている。

しかし、晴代はそこを考えた。雨野がいつも通りに動いているのなら、霜華と契約しようとするなら霧矢たちが阻止しようとするのとくらい予測がつくだらう。そして、数えきれないくらいこの病院にきたことのある雨野にとって、この建物の構造を利用して、時間を稼ぐことくらい造作もないはずだ。

「……つまり、二人は中にいるのか？」

晴代は黙ったまま走り出した。霧矢もそれに続く。病院の裏側の業務用搬入口から建物に忍び込むと、人気の全くない中庭に二人分の足跡が雪の上に残されているのが見えた。

「でかした！ 晴代！」

足跡をたどっていくと、再び建物の中に入る。近くにいた人に尋ねると、やはり霜華と雨野らしき女の子二人が通っていたと言う。

「……ここらへんで、二人きりになれそうな場所と言ったら、何があ
る？」

息を切らしながら、霧矢は案内板を見ている晴代に問いかけた。

「ここら一带は、みんな一般病棟で入院患者も見舞客も多い。この棟で二人きりで内緒話をするんだったら……」

晴代は案内板の一点を指さす。

「……やっぱりそこか」

階段を駆け上がり、鍵が開いているのを見て霧矢は確信した。

(間違いなく、ここにいる)

関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を開け放つと、粉雪が風に舞って顔に吹き付けてきた。小林記念病院のB棟屋上は雪国の姿を三百六十度眺めるのに十分すぎる高さだった。

吹雪の中で、お互いに対峙する少女たちの姿が見えた。

「……さすがは私の見込んだ生徒会役員。私の追跡妨害を振り切つてくるとはね」

「会長。霜華と契約するつもりですか？」

最上階だけあって風は強く、霜華と雨野の黒髪がたなびいている。「……そうしたいのはやまやまだけど、断られちゃったわね。残念だ
けど」

「私も有島さんと同じ。そんな目的で契約異能を得るためなら協力
はできない」

毅然とした態度で、霜華は雨野と向き合っている。

「ほんと。霜華ちゃんは三条にはもつたないわ。強く、たくましく、美しい。同じ女子として尊敬せずにはいられないわ」

「…今日のところは、私はもうここに用はない。何と言われようと私は魔族を探しに行く。絶対に契約してみせる」

ゆっくりと階段のドアを開ける。こちらを振り返ることなく、雨野は背中であげた。

「三条、啓子に『ごめんね』と伝えておいてちょうだい」
それだけ言い残すと、雨野は姿を消した。

それは正しいのか 3

「霧君は、誘いを断ったんだね」

「……まあ……な」

冷凍庫同然の屋上から退避し、霧矢たちは有島と合流して談話コーナーに再び座っていた。一同、お通夜のような空気を醸し出している。

「私は…霧矢も霜華ちゃんも正しかったと思う。先輩の気持ちもわからなくもないけど、それでもそんな方法で護君を助けても…彼は喜ばないと思う」

晴代にとつて雨野の豹変は相当ショッキングなものだったようだ。普段はコーヒー味の砂糖水としか言えない甘ったるいものを飲んでいるのだが、今はひじの横で真つ黒な液体が湯気を上げていた。

「…私もそう言ったら、『あんたは護の何を知っているの』となじられました。確かに、このメンバーの中で、護君のことを一番よく知っているのは光里ちゃんなんです。むしろ光里ちゃん以外は全く知らないでしょうね」

死んだような目で、有島は机を見つめている。声いつもの生気がない。

パタンという冊子を閉じる音を立てると、文香は立ち上がった。

「…もうそろそろ帰ってもよい時間だ。会長のことは残念だが、もはや嘆いていてもどうにもならん。それよりは、家に帰ってゆっくりとまた他の方法を考えた方がよいはずだ」

ゆっくりと読んでいた雑誌をラックに戻すと、帰り支度を始める。みんなも彼女にならって荷物を整理し始めた。

*

「なあ、もし、僕が昨日お前の言葉に『ありえねえ』なんて言葉を

吐かなければ、こんなことにはならなかったのかもな」

帰りの電車の中で、霧矢は隣に座っている霜華に語りかけた。病院を出てからバスに乗り、駅で切符を買っている時もこのことが頭を離れなかった。

もし、自分が霜華を傷つければ、霜華は機嫌を損ねることなく、一緒に病院に行き、リリアンと出会うこともなかった。

「自分がもし過去に何かをしなかったらどうなっていたかなんて、今にならなきゃわからないことだし、そんな仮定は無意味。むしろそれを反省して教訓とすることで、未来に生かしていくのが本来あるべき姿じゃないの？」

気に留めることもなく、霜華は霧矢の言葉をたしなめた。

「それを言うんだったら、いつまでもこだわって素直になれなかった私にも責任があるよ。でも、あらゆるすべての行動はお互いに何らかの影響をもたらしているから、そんなことを言ったら、人類が滅ばない限り問題は絶対に解決しない」

「それが人類の原罪なのかねえ…？」

霧矢はため息をついた。

「とりあえず、昨日言った台詞は取り消す。済まなかった」

「…わかってくれればそれでいいんだよ。でも、それを認められると、こつちとしても会長さんのことを責められないんだよな…」

意味深な台詞に霧矢は目を細めた。霜華は続けた。

霜華は、それが危険な行動であっても、本人にその危険を背負う覚悟があるのなら止めはしないと語った。しかし、それならば、霧矢たちは雨野の行動を止めることはできない。

雨野は護を助けるためなら、何でもする覚悟を持っているのは明らかだ。だが、良心のリミットだけは外れていないのは霧矢にもわかった。もし、外れていたのならば、有島や霜華を拷問してでも契約させていたはずだ。しかし、それをしなかったということは、あくまで善人には手を出さないという彼女なりのポリシーがあるということを示している。

「……会長さんは、人を殺した悪い人は死んで当然だと思ってるんだよね？」

「……みたいだな。僕もそこはわからないわけじゃない……」
腕を組み、流れていく薄暗い景色を眺めた。

霧矢がリリアンの提案をはねつけたのは、罪もない人を殺した奴は死んで当然ということに反発したからではない。むしろ、そこに關してほとんど異議はなかった。だが、それでも霧矢は彼女の申し出を断った。その理由を突き詰めて言うならば、無関係の人の復讐感情を満たすためだけに、この手を血に染めるのが嫌だったからだ。たとえそれが、護を助けるといふ報酬を伴っていたとしても、そもそも霧矢にとつて護の価値はそれほど高くない。

結局は自分なりの正義や良心ではなく、自分のエゴではねつけたのだ。そして、自分が断ったことで護が目覚ます可能性が失われたという罪悪感から逃れるために、紙片を受け取り、雨野にこの話をした。

すべては自分のエゴが招いてしまったと言つてもいい。

「何か、すごく嫌そうな顔してるよ。もしかして、不愉快なことも思い出した？」

中途半端なエゴイストは、自分のエゴで動くとともに、それに対する自己嫌悪と後悔が常に付きまとつていゝ。目の前の困難から逃れることはできても、後から困難は精神的なプレッシャーに姿を変えて降りかかってくるのだ。完全なエゴイストとはそこが異なる。

「……中途半端は中途半端でいろるときついついな。そう思ったんだ」

霜華は突つ込もうと口を開きかけたが、口をつぐんだ。今の霧矢の表情はいつもの不機嫌な時に見せるものとは違つ、別の不愉快な表情をしていたからだ。

*

駅で文香と別れ、霧矢、霜華、晴代は商店街を無言で歩き続けた。あたりはもう暗くなっていたが、昨日までとは違い、スキー場のナイターの照明が商店街を明るく照らしていた。

薬局の手前まで来ると、晴代は立ち止まった。

「霧矢。例の件、霜華ちゃんに話しておいたんだ。お正月に泊まりに来ないって」

「…何を言い出すのかと思えば、別に構わん。まあ、僕もお前のところに顔は出すし、霜華の気分次第で好きにしてもらっていい。薬局も年末年始は休みだしな」

「じゃあ、決まり。まあ、明日のスキーはお預けだね」

「こんな気分で滑ったら、人にぶつかるわ。会長の件が片付くまでそんな気分にはなれん」

「……じゃあ、また月曜日」

霧矢の「会長」という言葉に、表情を曇らせたが、晴代はいつもの明るい声で、さよならを言った。霧矢と霜華も手を振って、家に入った。

「まあ、霧君や有島さんはいろいろと心配するだろうけど、多分時間切れになるよ。会長さんが、魔族を見つけ出すなんて、ほとんど不可能だろうし」

「…どうしてそう思う？」

「だって、人間は魔力を見ることができないから、魔族と人間を区別できないよ。いちいち『あなたは魔族ですか』なんて尋ねるほど、会長さんは痛いまねはしなないと思うけど」

「…そう言えばそうだな。確かに、人間には魔力が見えないし、有島先輩も契約相手探しになんて協力しないだろうから…大丈夫か」

そこに気が付くまで随分と時間のかかったものだ。自分の間抜けさに少し呆れた。安心して一気に力が抜け、霧矢は居間のこたつに潜り込んだ。

「よっし。一緒に対戦ゲームでもするか！」

「おお！ 初めて霧君が私にまともに付き合ってくれそうだよ」
霜華は今から飛び出すと、二階に上がっていく。霧矢がコートを手掛かりに掛けようとして、ポケットの中のものを取り出すと、未使用のマジックカードが出てきた。

(…そうそう。こいつを返し忘れたのがそもそも始まりだったな)
霧矢はコートを居間のハンガーに掛けると、階段を上っていく。
「おい。霜華。こいつを返しとくぞ」

自分の部屋の戸を開け、霧矢はカードを霜華の前にひょいと投げた。

カードが光ったかと思うと、霜華の足元で小規模の爆発が起こった。

「え……………？」

煙がもうもうと立ち込めているのを、霧矢は啞然と眺めていた。
数秒後にやっと霜華のシルエットが見えてきた。

「だ…大丈夫か……………？」

無表情でその場に立ち尽くしている。それほどケガはしていないようだが、長い黒髪の先端が焼け焦げてチリチリになっている。

しかし、霧矢にそんなことを気にしている余裕はなかった。霜華の服がボロボロになっており、健全な思春期男子には目に毒な光景が広がっていたからだ。

(…サイズ的には五段階評価の二かな。一応僕的にはぎりぎりだけど許容範囲だな…)

確実に口に出したらセクハラになる感想を心の中でつぶやくと、百八十度回転して、霧矢は自分の部屋を出ようとする。が、後ろから肩をつかまれた。

「そのサイズの話は、私も地味にそれは少し気にしてたんだけど……………ねえ、霧君。一撃で楽になると、二回の半殺し、どっちがいい？」

「何イ！？ 心を読んだだと！」

「……どっちがいいのかな？ 霧君」

「……どっちも遠慮する！」

手を振り払って逃げようとするが、足と床がいつの間にか氷で接着され動くことができない。

「近所迷惑この上ない悲鳴が夜の商店街に響き渡った。自業自得である。」

「な…何が起こったの？」

理津子が階段を駆け上がってくる。目に入って来たものは、殴られて顔を真っ赤に腫れ上がらせて廊下にうつぶせに倒れている息子の姿と、怒りの表情を浮かべながら、あられもない姿で立ち尽くしている女の子だった。

「あらあら……」

部屋の中をきよるきよると見まわした理津子は一言。

「知らない間に、霧矢も随分とまあ、男の子らしくなったのねえ」
どこまでも非常識な母親だった。

それは正しいのか 4

十二月十六日 日曜日 曇り時々雪

「おはよう……」

朝から機嫌の悪い霜華に霧矢は腫れ物に触るように、小さな声であいさつした。服が破れてしまったので、今日の彼女は、初めて会った時の格好をしていた。

「……おはよう……」

こちらに顔を向けず、背中を見せたまま、低い声が返ってきた。

居間のこたつの上には朝食が並んでいる。が、霧矢のメニューだけは貧相だった。やはり、昨日のことをまだ引きずっているらしいが、昨日の怒り方とはまた違った怒り方だ。

「いただきます……」

少ない朝食メニューに箸をつける。すぐに食べ終わってしまったが、それほど食欲もなかったので問題はなかった。茶碗を片付け、テレビをつけた。

最近では明るいニュースが少ない。今年の冬のボーナスは過去最低だったとか、寒波の襲来による大雪で多くの人が亡くなったなど、暗い話題は事欠かないのに、一向に明るいニュースは入ってこない。……そうそう、霧矢。母さんからの今年のお年玉はなしよ」

思い出したようにとんでもないことを話し始めた理津子に向かって、霧矢は啞然とした表情で振り返った。

「な……何で、だよ……」

手をわなわなと震わせながら、非情な宣告に向き合った。

「だって、昨日、霜ちゃんのをボロボロにしちゃったでしょ。その分、霧矢のお年玉から引いておくからね」

霜華の方を見ると、ざまあといった表情でお茶を飲んでいる。

（そもそも、お前が説明もせずマジックカードを預けっぱなしに

していたのが……！)

上目で霜華を睨んだが、霜華は微動だにしない。

理津子と霜華は店の方に出てしまい、霧矢は一人になった。部屋に戻り、完全に存在を忘れていた週末課題に手を伸ばす。課題のリストに目を通した瞬間、霧矢は卒倒しかけた。

(やべえ…あと二十時間でこんな量終わるのか?)

睡眠時間とその他もろもろを差し引くと、使える時間は十時間ほど。一方、霧矢の予想ではすべて終わらせるには十二時間ほどかかるを見た。金曜日と土曜日に何も手を付けてない分、今日になつてもものすごい量を背負ってしまった。

(とりあえず、簡単なものからてきぱきと終わらせよう)

得意教科である英語と社会を探し出す。

ノートにペンを走らせはじめると、机の上においてある携帯電話が振動する。

霧矢、やっぱりスキー行こうよ。晴れてるし、新雪も積もつてて最高だよ！

能天気な絵文字を多用したメールを目にし、仏頂面で霧矢は返信を送った。あの年中頭に春が来ている女は課題のことなど忘れきっているに違いない。

メールを送ったが、返信は来なかった。まあ、それならそれで別に構わない。再び、課題との格闘を始めた。

一時間ほど経って、社会の課題が終了した。思ったよりは早く終わった。この調子なら何とか間に合わせることができるともいれない。

水でも飲もうと階段を下りていくと、勢いよく家の戸が開く音が聞こえた。

「ごめんください！」

聞き覚えのある声が家の玄関の方から聞こえ、霧矢は玄関に出る。

「……晴代…お前…何しに来た…？」

スキーウェアを着たまま、涙目になって教科書の入ったカバンを提げている幼馴染がそこに立っていた。

「……霧矢……助けて……」

晴代が最後まで言い終わる前に、霧矢は背を向けた。

「……お前、自己責任って言葉を知っているか？」

玄関で大泣きを始めた。店のほうにまで聞こえたらしく、何事かと霜華がやってくる。

「あれ、晴代だ。どうしたの、そんな格好で」

半雪女にとつてスキーウェアは珍しい格好だったらしい。晴代の服装を興味津々で見ている。

「……霧矢……勉強教えて……」

「……無理！」

「何で！」

「僕も今日は人に勉強を教えるほどの余裕はない！ 自分で何とかしろ」

晴代の成績は校内では下の中くらいで、最悪というわけではないが低い部類に入る。他方、霧矢はどうかというと、晴代よりはまじだが、中の上くらいで特別良いというわけでもない。霧矢でも苦労するほどの課題なのだから、晴代がどうかなどはもはや考える必要すらない。

「……大変そうだね……」

霜華は勉強とは距離を置いた生活をしているので、霧矢たちの苦しみは理解できない。

「とりあえず、昨日引っ張りまわしたせいだから、霧君が責任を取ったら？」

朝から変わらず、いじいじと傷をつつくような口調で霧矢に手伝うことを提案する。しかし、引っ張りまわしたとは言つものの、もともとは晴代がホイホイとついてきたことに原因がある。西村みたいにさつさと帰っていれば、課題など簡単に片付き、スキーを楽しめただろう。

「宿題の手助けを頼むんだったら、僕よりも木村の方が頼りになるだろ。頼むから、そっちを当たってくれ」

文香は学年で片手に入るほどの秀才だ。特に理系科目は学年一位を取ることも珍しくない。しかし、晴代は首を横に振った。

「文香は今日ダメだって言ってた。家族と一緒に出掛けると何とかで今日は空いてない」

「だったら……会長……は……ダメだな……」

この近場に住んでいる霧矢以上の成績の持ち主は、雨野しかいないが、昨日あんなことがあったばかりなのに、宿題を手伝ってくれなどと言ったら、間違いないく撲殺死体にされる。

「……やっぱり、先輩って魔族を探し回っているのかな？」

心配そうな表情で晴代はうつむいた。

「……実は、今朝、連絡を取ろうとしたんだけど、着信拒否されちゃった……」

着信を拒否するということは、雨野の決意はもはや絶対に揺るがないということだ。何者にも邪魔されず、目的を果たす。そういうことだろう。

しかし昨日、霜華も言っていた通り、雨野は魔族と人間を見分けることはできない。霜華のように和服を着ていたり、冬でも薄着でいるとかなら別だが、基本魔族は人間と見分けがつかない。そう霧矢は晴代に話した。

「……だといけど……」

「大丈夫だって。リアンの言ってた日までに探し出すなんて無理だって。だから、会長の問題はクリアだ。それよりも、僕は忙しい。また明日な」

早く暖房の効いた部屋で課題の続きをしたいと思いつながら、晴代に背を向けると、殺気を感じた。

「……ねえ、霧矢。誰のおかげでクリスマスツリーの飾り付けが早く終わったと思っているのかな……かな……？」

「誰のおかげって……」

アンサー。それは、晴代、霜華、文香の三人である。また、文香は晴代の依頼がなければ動かなかった。ゆえに、晴代の協力がなければ、霧矢たちはまだ作業を続けていたはずである。

「僕は恩知らずな人間です。ごめんなさい。所詮僕はエゴイストですとも」

半分嘘で半分本当のことを口にしたが、晴代に後頭部を英和辞典の角で殴られ、霧矢はうずくまった。

「霧君、手伝ってあげたら？」

「お前は、課題を出さないとどうなるかわからんから、そんなことが言えるんだ！」

県立浦沼高校で課題を提出しないと、教師によるお仕置きが待っている。課題未提出者への居残り補習は浦高名物の一つとして語られている。

別に居残り自体はそれほど苦痛ではないのだが、それに雨野光里という人物が加わるとそれは一気に死刑執行となる。居残り補習はすべての校内活動に優先する。つまり、居残り補習になると生徒会活動を休むことになり、雨野の鉄拳制裁を受けることになるのだ。

「とりあえず、今日は無理！ 自己責任だ。お前の課題はお前で片付ける！」

きつぱりと言い放ったが、いきなり両手で首を絞められた。

「……………手伝いなさい…手伝いなさい…手伝いなさい…手伝いなさい…手伝いなさい……………」

血流がとまり、視界がぼやけてきた。

数十秒ほど耐えていたが、我慢の限界だった。霧矢は首を縦に振った。

「ありがと。さっすが霧矢！ あんたと友達であたしよかった！」

(この女……………白々しいことをよくも……………)

どこまで晴代は雨野の影響を受けてしまったのか、余計なものをもらってしまったものだとし心の中で呆れた。

結局、居間のこたつに入りながら、二人で課題と格闘することに

なった。

霧矢は黙々と取り組み、晴代が分からないところを質問するとうスタイルだ。しかし、下から数えた方が早い高校生にとって、この課題は試練としか言いようがなかった。ほぼすべての問題を質問するので、霧矢は一向に進まなかった。

「なあ…お前、いったいどんな勉強法をしてるんだ……」

もう何度目になるのか数えるのも面倒になるくらい多く質問され、ついに霧矢の我慢は限界に達した。霧矢は人の勉強スタイルに優等生でもない自分が、とやかく口を出すのはよくないことだと思っていて、日常でも口に出したことはなかったのだが、今の晴代の様子を見ては質問せずにはいられなかった。

「……え、普通にノート取ってそれを元に勉強してるよ……」

「嘘つけ。普通にノート取ってるなら、これくらいの問題普通に解けるはずだ！」

晴代が解いているのは、数学の基本問題だった。それでも、二人のクラスは違うが、数学の担当は同じ松原先生でノートの内容は同じはずだ。

「貸してみろ！」

「あ！ ちょっと！」

晴代のカバンからはみ出していた数学のノートをひょいと、取り上げた。晴代はうろたえて、霧矢の手から取り返そうとするが、霧矢は器用にかわし、ノートを開いた。

「………おい………貴様………」

「………えっと………何のことかなあ……。………あははは………は………」

数学の解答例が中途半端に書かれている。それはまだいい。公式もあいまいで読む方にはわかりづらいが、問題はそんなことではない。

「何で………漫画のキャラクターとキャラクターの名前の間にバツ印が入ってるんだ………?」

「えっと、実は………この前、友達にそのノートを貸して、返ってき

たばっかりで……」

苦し紛れの言い訳を繰り広げているが、この文字は明らかに晴代のものだ。怒りの表情で、霧矢は畳み掛ける。

「しかも、こちらの記憶が正しければ、このキャラは二人とも男だったと思うが……」

晴代は目をそむけて口笛を吹いている。顔は汗だらけだ。

「つまり、貴様は神聖なる数学の授業時間に、ふしだらな妄想に勤しんでいた。そして、その結果、基本問題の解き方すら理解できず、自業自得ともいうべき状態にありながら、その手助けを、この三条霧矢という都合のいい相手に求めたというわけだな！」

「だって……松原の授業はよくわからないし……授業聞いてても面白くないんだもん」

烈火のごとく、怒りで言葉を荒げている霧矢から目をそむけ、晴代は口を尖らせてすねている。こちらへんは霜華に似ているが、自分で招いたことへの対処を平気で他人に頼る分、霜華より性質が悪い。呆れ顔で霧矢はノートを机に叩きつけた。

「……とりあえず、授業はまともに聞け。ノートもしっかり取れ。数学は余裕がないなら予習する必要は特にない。ただ、復習だけはきちんとやっておけ」

「うん。文香に相談した時もそう言った。授業をしっかりと聞いて、きちんと復習さえすれば、数学を恐れる必要などどこにもないって」

霧矢の頭が再沸騰する。爪が掌に食い込む寸前まで拳を握りしめた。

「貴様アアア！ 言われていたんなら、何故それを実行に移そうと思わない！」

「え。だって、いろいろとめんどくさいし……」
ため息をつく。もうこの女には何を言っても無駄だ。霧矢は無言で、自分の課題に再び取り組み始める。

それにしても、やっぱりこの女は腐り始めていた。霧矢の中の晴

代の位置づけが、軽度から中度のオタクから、重度のオタク（腐女子属性あり）に切り替わった。

昼時になって、晴代は昼ご飯を食べに荷物は霧矢の家に放置したまま、いったん家に帰ってしまった。霧矢も、霜華の作った食事に箸をつけながら、英文のプリントに目を通していている。行儀が悪いが、ただでさえ進捗が遅い霧矢が晴代によってさらに遅らされている事実がある以上、理津子も霜華も黙認していた。

「The company would not pay the salary, the union decided...」

ぶつぶつと暗い表情で、プリントを読んでいる霧矢を霜華は呆れ顔で見ている。

「ねえ、霧君、さつきからもすごい顔つきしてるけど、何か嫌なことでもあったの？」

「I was disappointed at her, because she has such an extraordinary hobby.」

霜華は「she」が晴代のことであるということはわかったようだが、「an extraordinary hobby」というのが何を指すのかよくわからず、首を傾げていた。霧矢としては知らない方がよいとはぐらかした。霜華にはピュアなままでいてほしい。そう願っていた。

昼食の片付けを終えると、理津子と霜華はまた店の方に出ていく。しかし、今日は日曜日で隣の診療所も空いていないので、客足はほとんどなく暇なはずだ。

晴代に邪魔される前に、進めるだけ進めておこうと、ノートを取り出す。しばらく取り組んでいると、玄関の戸が滑る音が聞こえた。「霧矢！　続きよろしく！」

ドタドタと部屋に駆け込んでくる。さすがにスキーウェアは置いてきたようだが、それでも、先ほどまで着ていたウェアの下の中学校時代のジャージはそのまま、いくら近所とはいえ、それで歩い

てくるのはどうかと思ったりもする。それでも、このド田舎なので晴代の家から霧矢の家までの百メートル弱で誰にも会わなかったということもありうるが。

「じゃあ〜はりきって数学の続きいつちやいましょ〜！」

「テメエ……他人の迷惑つてモンを考えたことは……」

せつかくペースが上がってきたのに、ここぞというタイミングで邪魔をされる。血走った目で霜華を睨んだが、応える様子もない。

課題に取り組みながら、昼の時間は過ぎて行った。しかし、この迷惑女のせいで霧矢の課題は一向に進まない。晴代も晴代で質問ばかりしているので一向に進まない。

時計が三回鳴り、一休みしに、霜華が居間に入ってくる。

「……お疲れ様」

「霜華ちゃん……あたし、もうダメ……」

「泣き言を言うな！ このヘタレ女！」

本当のことを言うと、泣き言を言いたいのには霧矢の方だった。上手くやれば今日中に終わると思っていたのに、晴代の乱入のせいでペースを大幅に乱されてしまった。これでは、確実に終わらない。

「二人ともどんな内容のものをやってるの？」

興味を持った口調だったので、霧矢は教材を放り投げた。器用にキヤッチし、付箋の付いたページを開く。

「……何、これ？」

曇った声が居間に響く。霧矢としてはそら見たことか、と思ったが、次の瞬間その期待は裏切られた。

「何でこんな簡単な問題に二人は苦戦してるのかなあ？」

二人とも啞然として霜華を見つめた。

「この問二は普通に正弦定理と内接円の公式で解けるし、問三は単なる分数の掛け算で、問四は二次不等式を解くだけの簡単なものですよ……て、あれ？ どうしたの、そんな顔して」

「ちよ……お前……数学が解けるのか？」

「まあ、大体は。向こうでも結構好きだったし、これくらいの内容

だったら……」

その後は、晴代が霜華に質問し、霧矢は自分の課題に取り組むというスタイルに切り替わった。晴代曰く霜華は霧矢よりずっと教えるのが上手いらしく、数倍のペースで進んでいった。霧矢も元のペースを取り戻せた。

(……数学好きの雪女ねえ……)

横目でちらちらと晴代に付き添っている霜華を見ながら、霧矢は数学の課題を終わらせた。残るは国語と理科。霧矢の一番の難敵だ。「そう言えばさ。ちょうど一週間前だったよね」

「何が」

ぶつきらばうにペンをノートに走らせながら霧矢は霜華の言葉を聞き流した。

「私と霧君が出会ったの。時刻的にもちょうど今くらいじゃなかった？」

「そう言えば、そうかもしれんな。まったく、母さんが天然なせいで余計な居候を抱えることになっちまったが」

「居候じゃないもん。薬局の住み込みアルバイトだもん」

霧矢としてはどっちでもいい。ちなみに霜華が晴代と出会ったのはもう数時間後のことだ。考えてみれば、もう一週間が経った。

しかし、この一週間は霧矢にとって相当な変化をもたらした。そして現在進行中で、もたらし続けている。そして、その変化は自分をどこへ導くのだろうか。

*

「それで、やはり、彼女になりそうなのかね？」

「ええ、昨日連絡した通り、おとといの夜、彼女から電話がありまして、契約相手を探し出したらすぐに協力すると」

とあるビルの応接室で、リリアンと老人は対面していた。

「……私としては、そんなことを報酬とするのは感心せんな。呪い

の解呪くらいなら無償で協力してやったらよかるうに」

老人はコーヒーマグのカップに口をつける。リリアンはスプーンでカップの中身をかき回している。ミルクを入れ茶色になっている液体が渦を作る。

「私も、できることならそうしてあげたいのですが。ただ、綺麗ごとで片付けられるようなものではないでしょう」

「……大体調べはついておるよ。三条霧矢と雨野光里についてはな、ゆっくりと歩き、机の引き出しから老人は紙を一枚取り出した。

「……三条霧矢は、ごく平凡な少年だ。町の個人経営の保険調剤薬局の一人息子で高校一年生。成績はそこそこで特に記すものはない」
つまらなさそうな顔で紙をリリアンに渡す。

「……そして、雨野光里についてだが、これもまあ近年まれにみる、喧嘩の達人らしいが、普通の女の子に変わりはない」

老人はそこから先は口にしようとしなかったが、リリアンはうなずく。彼女は何を言おうとしていたのかを理解していたからだ。老人はソファに腰を下ろした。

「君は、人の窮地くらい救ってやることはできんのかね。異能で殺すことにこだわる必要がなければ、うちの若いのが、確実にやってくれるのじゃが」

困ったような表情で老人はリリアンを見つめる。しかし、リリアンは首を横に振った。

「相川さん。私は何度も言ったはずですよ。これは復讐だと。そして、これを広く世に知らしめなければ意味がないんです。そのためには、あの事件の犯人をあの手が起こつたのと、まさに同じ日時に異能を使って殺す必要があるんです。ですから、人手不足じゃだめなんですよ」

相川と呼ばれた老人は、ため息をつくともカップに口をつけた。

「私は、悪による正義の実現という名目のもと、異能を持つ者の集まりとして、この探偵事務所を開いた。しかし、魔族と関わり合いがあるとはいえ。そんな平凡な子供たちをこんな闇の世界に引きず

り込むのは、いささかよろしくない」

「あら、でも相川さんだって。昔、異能のない若者をこちらの世界に引きずり込んだじゃありませんか」

リリアンは意地の悪い目つきで相川を見つめた。相川は黙ったまままだ。

「彼だって異能も何も無い何の変哲もない高校生だったのに、無理やりこちらの世界に引きずり込んだ挙句、今じゃ完全な事務所の戦力の一部じゃないですか」

「そのことを弁解するつもりはない。ただ、彼は私の目的に理解を示してくれておる。しかし、光里ちゃん、といったか、はあくまで弟を助けるためであって、目的に純粹に共鳴してくれたわけではないのじゃろう?」

リリアンは黙ってコーヒークップを傾ける。相川は続けた。

「……とにかく、作戦の期日までの残りは少ない。仮にその子が闇の世界に足を踏み入れるのをよしとしたところで、その子が契約相手を見つけることが出来るとなると、巷の殺し屋でも雇ってこなければならん。しかし、そんなことをするのは君のプライドが許さんだろう。復讐なのに、志を同じくした者ではなく、金で裏世界の人間を使って何とかするなどな」

リリアンはうなずく。あくまで目的は復讐であり、それは悪を憎む人のボランティアに近いものでもあるのだ。金で殺し屋を雇うなど考えられなかった。

この相川探偵事務所は、魔族とはまた違った異能を持つ人間が集まってできた何でも屋のようなものだ。暗殺だろうと護衛だろうとどんな依頼であっても請け負うが、それが彼らなりの正義に反するなら絶対に応じないことでも、裏の世界ではよく知られている。

「……私も子供を巻き込むのは不本意なことですよ。しかし、人手が見つからないとなると……」

「どうするのかね?」

心配そうな表情で相川は彼女を見た。しばらく黙った後で、リリ

アンは口を開いた。

「無理やりにも霧矢君か彼付きの魔族に協力してもらいます。解
呪込みで」

大切な人への想い 1

十二月十七日 月曜日 雪のち晴れ

「行つてきます……………」

結論から言えば、霧矢は課題を終わらせることができなかった。

「ちょ…元気出してよ。今日からまた一週間が始まるし、今週終わると、冬休みなんですよ？」

霜華が焦りながら、死にそうな目をした霧矢を励ましながら玄関から送り出した。しかし、霜華の励ましは霧矢には届かず、暗い気持ちで霧矢の精神を支配していた。

(……………会長に殺されるな、こりゃ……………)

雪道をとぼとぼと歩きながら、霧矢は前の人を通った地面の足跡を見つめていた。授業中に内職をしたとしても、終わらないだろう。むしろ、内職などしようものなら晴代と同じように授業についていけなくなる分、将来的に考えてマイナスである。

「おはよう……………」

玄関に入ると西村がいた。霧矢の顔が暗いので、何があったのか大体察したようだ。

「ご愁傷様。終わらなかつたんだな」

見下すような声で話す彼の顔は明るかった。霧矢も何があったのか察した。

「うらやましいことこの上ない。お前は今週も生き延びることができるといっわけだな」

「三条、お前にいい言葉を贈ってやる。こついつのをアリとキリギリスつて言っただぜ」

人差し指でピシッと霧矢を指さす。霧矢は何を言っているのかよくわからず首を傾げた。

「お前は、この休日ずっと、麗しき女の子たちと遊んでいた。だが、しかし俺、西村龍太はその間コツコツと課題に取り組んでいた。その差がこれだ。ざまあ」

遊んでいたと言われるのは心外だった。むしろ、女の子と遊んでいて課題が終わらなかつたのなら、霧矢は健全な高校生男子として後悔などしない。しかし、実際は、霜華に吊るし上げを食らい、リアンに変な勧誘をされ二階から落ち、雨野に首を絞められ、晴代の課題の手伝いを強要されるという、遊びとは程遠いサバイバルに近い休日だった。

「そう言えば、今朝、駅で有島先輩を見かけたけど、何かあったのか？ ものすごく暗い表情で俺がいさつしても、上の空で三回ほど呼びかけてやっと返事してくれたけど、それがまたものすごい小さな声でさ。お前、心当たりはないか？」

やれやれと首を振りながら、西村は歩き出す。霧矢も彼に続く。「おととい、会長と喧嘩してね。それをまだ、引きずっているんじゃないのか？」

無理もない、と霧矢は思う。雨野が有島を殴るなど霧矢も信じられなかった。親友を殴つてでも護を助けたかったのだ。そして、彼女は霜華を連れ出して契約を迫ろうした。正直な話、あんな直情的に動く雨野を霧矢は見たことがなかった。

「…有島先輩と会長が喧嘩？ おいおい、そりゃどうい風吹き回しだ？」

「……いろいろあつたのさ」
廊下で話し込んでいると、霧矢をこの状態に追い込んだ張本人がやってくる。

「二人ともおはよう。何話してんの？」
霧矢は嫌そうな顔で晴代を見る。晴代も迷惑をかけてしまったことに少し引け目を感じているらしく、いつもより遠慮がちな口調だった。

「西村に、おととい何があつたかを説明している。そうだ、お前が

代わりに説明してやってくれ。僕はホームルームまでやり残した課題をやるから」

それだけ言い残すと、霧矢は二人を残して教室に入った。

午前の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴り、霧矢は伸びをする。教科係が課題を集め、担当教員のところまで持っていく。が、霧矢は出せないものが一つあった。

弁当の包みを取り出すと、西村が声をかけてくる。

「みんなで一緒に、生徒会室で食おうって先輩が」

霧矢としては断りたかった。会長に「今日は課題補習のため活動に出られません」と言うだけの覚悟はまだ決まっていなかったからだ。しかし、西村にそれを伝えると、西村は満面の笑みを浮かべ、グーサインを出した。

「安心しろ。今日、会長は休みだつてさ！」

その瞬間、普段から見慣れている友人の姿が、神に見えたような気がした。霧矢の表情が一気に明るくなる。軽いステップで生徒会室に向かって歩き始めた。

生徒会室のドアを開けると、有島、晴代、文香、雲沢、神田がもう集合していた。しかし、有島はお通夜のような雰囲気醸し出している。

(……やっぱり……気に病んでるのか?)

二人が席に着くと、暗い声で、いただきますとつぶやいた。

「……先輩。大丈夫ですつて。会長は、ちよつと焦っているだけですよ。もう少しすれば冷静に自分を見れるようになるはずですから」「そ、そうですね。雨野先輩は頭いいですから、そのうち、間違ってるって気が付きますつて」

霧矢と晴代が元気づけているが、有島の表情は沈んだままだ。

「……もし、光里ちゃんが誰かを手にかけたりしたら……」

箸でおかずをつついている。完全に心ここに在らずという状態だ。「今朝からずっとこうだ。授業中も上の空で、先生も呆れてたぞ」

雲沢がため息をつく。彼は雨野や有島と同じクラスなので二人のことをよく知っている。しかし、おとこの出来事については詳しいことは知らないらしく、どうして有島はふさぎ込んでいるのかはわからないようだ。

「会長なら大丈夫だろう。私たちがすべきことは、火の魔族を探すことだ。呪いを解くための」

文香が一言添える。晴代もうなずく。

「とりあえず、今日の学校帰りに会長の家に寄ってみたらどうです。僕は会長がどこに住んでいるのかは、わかりませんが、先輩なら知ってるんじゃないですか？」

「……そう……ですね……寄って……みましよう……か……」

やつれた声で、有島は途切れ途切れに返事をした。全員が優しく微笑みかける。

「……じゃあ、みんなで一緒に光里ちゃんの家に行ってみましよう……」

くたびれた笑みを浮かべ、有島は霧矢たちを見た。しかし、そこで西村がある事実気が付く。

「なあ、一緒に会長の家に行くのはいいんだけどよ。三条と上川、お前ら今週の課題終わってないだろ。居残りをすっぽかそうものなら、先生に殺されるぞ」

「はい、復調園調剤薬局です……って、あれ、霧君？」

考えあぐねた末、霧矢は代わりに霜華を行かせることにした。霧矢は二十分ほどで残りは終わると見たので、先に行ってもらい後から合流しようと決めた。晴代はとてもではないが、今日は無理である。涙を流しながら晴代は課題に取り組んでいる。

「それじゃ、先に行ってください。僕もすぐに終わらせてそっちに行きますから」

今日のお見舞いメンバーは、有島、文香、西村、雲沢で、生徒会の仕事は神田が快くすべてを引き受けてくれた。廊下で四人は霧矢

に別れを告げると、学校から姿を消した。

大切な人への想い 2

「こんにちはです。みなさん」

霜華はクリスマスツリーの下で四人にあいさつしたが、みんな奇異の目で霜華を見ている。このメンバーは霜華の和服姿を一度も見ることがなかったからだ。特に西村や雲沢は完全に見とれていた。

「半雪女だから」と適当に説明して一人だけ暗い半天使の方を見た。有島がしおれた表情をしているが、霜華も何となく理由は察している。黙ったまま、有島についていくことにした。

「西村君、晴代はどうしたの？」

霜華に話しかけられ、西村は顔を少し赤らめている。

「え…えっと、課題が終わらなかつたらしくて…居残り補習…」

「西村、お前、鼻の下が伸びすぎだ。もっと落ち着け。いくらモテないからと言って、そこまで異性に耐性がないのもどうかと思うぞ」

小声で話しながら、雲沢が西村の頭を小突く。そう言う雲沢もそれほどモテているわけでもなく、霧矢のことをうらやましく思っていたりもするのだが。

「三条のやつ、ほんとうらやましいつすよ。いつの間にあんなにモテるようになったのか」

「それは俺も同意だ。あいつもモテない男同士仲間だと思っていたのに、実は上川という幼馴染に、北原という押しかけ居候までいるとは……」

ヒソヒソ声で話しながら、男二人は歩いていく。靴が雪を踏む音があたりに響いている。

「今日は会長さん学校に来なかつたって霧君は言ってたけど…やっぱりおとといのことを引きずっているのかな？」

霜華は文香と一緒に話すことにした。別に西村と話していてもよかったのだが、同じ女の子として文香と話していた方が何となく気分が楽に感じられたからだ。

「その可能性が一番高いだろう。しかし、私が懸念しているのはもつと他のことだ」

「他のこと？」

「ああ、今日学校に来ていないのが、体調不良や倦怠感によるものならば全く問題はない。しかし、もしも、家にいないとなるとこれは面倒なことになる」

文香の眼鏡の奥には憂いの光が浮かんでいた。霜華も彼女が何を恐れているのかは理解している。しかし、霜華は大丈夫だと霧矢にも話した。それを告げようとすると有島が足を止める。

「着きました」

駅から十分ほど歩いた住宅街の隅にある小さな二階建ての一軒家だった。表札に雨野と書かれてあるが、人の気配はない。

「会長さんのご両親ってまさか……」

霜華の問いに対して、有島が答えた。口を真一文字に結んで、固い口調で語りだした。

「ご両親は健在です。しかし、二人ともこの家で暮らしてはいません」

「……会長だけっすか？」

「ええ。護君が倒れて以来、どうも二人ともそりが合わなくなってしまうたらしく……」

途中まで話して有島はみんなに背を向けた。あまり人の不幸話を語るのは好きではないらしい。インターホンのボタンを押す。

「……やはり……そうなのだな……？」

「……残念ですが……」

有島は何度もインターホンを押すが、誰も出てこないのは変わりがなかった。

「本気で契約相手を探しに出かけた……そう考えるのが、一番納得がいきますけどね」

西村が腕を組む。有島は目に涙を浮かべている。

「……光里ちゃん……ほんとに……そこまでして……」

「だ、大丈夫だよ。会長さんは普通の人間だから、魔力の流れを見ることができないよ。契約相手を探すなんて無理な話だって。だからそのうち戻ってくるよ、きっと」

霜華がなだめるように有島の肩を叩く。しかし、有島の気分は晴れなかつた。

「どういう…意味ですか？」

「だって、会長さんは魔族と人間を区別できないから、契約相手を探そうにもそんなことは無理だよ。いちいち『あなたは魔族ですか』と道行く人に尋ねるなんてことはしないとと思うよ。だから、気に病む必要はないと思うよ」

穏やかな笑顔で、霜華は持論を展開するが、文香に遮られた。

「いや、会長は魔族と人間を区別できる」

「え……？」

霜華は啞然として、文香を見つめた。有島も文香の意見に同意した。

「え…でも、会長さんはただの人間だし……」

「魔力分類器だ。あれがあれば、魔族と人間を区別できる」

文香が神妙な面持ちで答えた。霜華や霧矢は完全に忘れていたが、雨野は有島から譲り受けた魔力分類器を持っている。魔力分類器で人ごみを覗けば、魔族や契約主を探すことなど造作もない。もっとも、魔族自体はそう簡単に見つかるものではないが、ハードルは大幅に下がっている。雨野の熱意なら、実際に探し出せてもおかしくはない。

「……魔力分類器……何だそれ？」

雲沢は訳が分からないといった表情で西村に説明を求めている。

西村が説明していると、彼のポケットから音が鳴った。

「…三条からだな」

液晶画面を見て、息を吐くと通話ボタンを押した。

「もしもし、三条か？ 今どこにいる？」

一言だけ話すと、西村は電話を切った。彼曰く、霧矢は今駅にい

るらしく、迎えに来てくれるようにと言ったらしい。話し合った末に、全員で駅に戻ることにした。きつと雨野はどこかで魔力分類器を覗きながら、歩き回っているのだろう。

霜華にとつて、魔力分類器は完全に盲点だった。魔族にとつては完全に不要なものであり、契約主にとつても不要なもののため、普段意識することはまずなかった。かくなる上は、できるだけ早く、雨野を探し出さないといけない。

しかし、仮に探し出せたとしても、あれほど固い決意を抱いた彼女を説得で思いとどまらせることなどできるのだろうか。霜華はその答えはわかっている。

物事の正しさなど結局は主観でしかない。だから、自分に悔いの残らないようにやれ。そう言っていたのは誰だったか。

(…私はもう忘れてしまった)

「おーい。霜華！」

駅に着くと、霧矢は霜華に向かって呼びかける。しかし、霜華の顔がこわばっているのも、何かあったということに察した。

「……それで、会長はどうだった？」

霧矢が問いかけると、霜華は首を振った。霜華は魔力分類器について説明を始めた。話すにつれて、霧矢の表情が険しくなっていた。

「…僕も随分間抜けだったな。自分が借りたものの存在すらも忘れていたなんてな」

「で…どうでしょうか……」

有島の声はさらに沈み込んでいた。雨野が家にいないということが精神にさらに追い打ちをかけ、涙を浮かべている。

(…どうしよう、って言われてもな…どうすればいいの…)

霧矢は西村の方を見るが、彼は目をそらした。雲沢を見ても目をそらされた。苦し紛れに文香を見たが、逆に睨み返されてしまった。

「……どうすればいいと思う？」

「それを聞いているんだよ。霧君」

霜華に突っ込まれてしまう。お前だって何か考えろと心中で思いながら腕組みをする。

気まずい沈黙が漂う。その間にもクリスマスツリーの影はどんどんと長くなっていく。晴代がいてくれたら何となく良い解決策を見つけてくれそうな気がしたが、肝心な時に限ってここにいない。駅のアナウンスが電車の到着を告げ、有島はとぼとぼと改札口をくぐっていった。その背中がまた何とも言えない哀愁を漂わせていた。

全員が別れを告げ、あたりには霜華と霧矢以外なくなつた。薄暗闇の中に二人は立っていた。霧矢と霜華が二人ともお互いのことを役立たずだと思っていたのは秘密である。

疲れてしまい、ベンチに腰を下ろしていると、くたびれた様子の晴代が歩いてきた。霧矢たちを見つけるとこっちに駆け寄ってきた。「で……どうだった？」

霜華が説明すると、晴代は心配そうな表情をする。霧矢は疲れた表情で電飾のスイッチの入り、暗くなつた駅前広場を照らしているツリーを眺めていた。

「……で、先輩はもう帰っちゃったってわけ？」

「見りゃわかるだろ。あり得ないほど落ち込んだ表情をした。聖夜にあんな暗い表情の天使が降臨してみる。ホワイトクリスマスが一気に台無しになるわ」

ハッ！ と息を吐くと、霧矢は背もたれに寄りかかって力を抜いた。霜華は投げやりになっている霧矢を軽く小突いた。

しばらく晴代は腕組みをしていたが、何かを思いついたかのように手をポンと叩いた。

「……雨野先輩の家を今夜張り込んでみよう。帰ってきたときに説得してみれば……」

「お断りだ。凍死するのは御免蒙る。やるならお前一人でやってく

れ。昨日はお前のせいで徹夜する羽目になって、疲れてるんだよ。今日はさっさと休みたい」

ド田舎だけあって、遮るものもなくはつきりと見えるオリオン座を見上げながら、霧矢が力なく拒絶を示したが、次の瞬間、霧矢の後頭部に氷の塊が命中した。痛みで目から星が出て、オリオン座の三ツ星が四つになったような気がした。

「霜華！ お前な、いくら僕の答えが気に入らないとしても、いきなり魔法攻撃をするんじゃない！ まずは口で言え！」

霧矢は説教するが、霜華は無視し、晴代と計画を話し込んでいる。今日は晴れている分、放射冷却現象で夜は氷点下まで冷え込むはずだ。雪女ならいざ知らず、普通の人間がああ気温の中で張り込んでいたら間違いなく凍死する。

「じゃあ、三人で雨野先輩の家の前で張り込んでいよう。そして説得しよう」

晴代が強引に結論を出す。霧矢は文句を言おうとしたが、晴代は拳をボキボキと鳴らし、霜華は何かの術の詠唱をしている。

どうして、僕の知り合いの女の子は暴力が好きなんだろう。

「おい、もうやめにしようぜ。寒くて死にそうだ」

星はますます輝きを増す午後九時。まわりの住宅街から明かりが漏れているが、雨野家の窓はすべて真っ暗のままだ。

「霧矢。あんた、それでも雪国生まれの男の子？　こんなに分厚い防寒対策してもまだ寒いつてわけ？」

「関係あるか！　スキーのナイターの時間だつてそろそろ終わりだぞ。しかも路面は凍結してアイスバーンになつてるし！　こんな寒けりゃ防寒対策なんて意味をなさん！」

晴代は寒そうにしているが割と平気そうだ。そして、霜華は完全に雪女の本領を発揮し、薄手の着物一枚で家の前を平然とろろろしている。カイロを何枚も体に張り付けた上に、セーターを二重に着込んで、スキーウェアの上下まで着て防寒をしているのは霧矢だけだった。もつとも、雲沢なら五分と持たずにノックアウトするだろうが。

夕食を食べてすぐに張り込みを始めたが、雨野が現れる気配はなかった。霧矢はこれで何本目になるかわからないが、雨野の家のすぐ近くにある自動販売機で買った暖かい缶コーヒーをあおった。熱い液体が胃の中から全身を温める。ゆっくりと白い息を吐き出した。「なあ、説得するつて言つても、どうやってあの会長を説き伏せるつもりだ。あの覚悟じゃきつと、無理だと思うぞ。だから、さつさと帰つて……」

「ヘタレたことを言うんじゃないわよ。あんたは雨野先輩が、いくら正義の名の下だとしても殺人者になつてもいいつて言うの？」

「それとこれとは別問題だ。確かに、僕も会長にはそんなことをしてほしくはない。ただな、説得できなきゃ、意味ないだろ。その時はどうするんだつて聞いてるんだ」

「…説得してみせるよー！」

「無理だろうな。会長の決意は固い。有島先輩に拳を打ち込んだ上に、霜華まで連れ出そうとしたんだぞ。そんな会長が一言や二言の『殺人はよくない』とか『そんなことをして護が喜ぶとでも』なんて薄っぺらな言葉で揺らぐとでも思っているのか？」

霧矢の冷静な指摘に、晴代は黙ってしまふ。沈黙が住宅街を支配した。

「……じゃあ、霧矢はどうすればいいと思ってるのさ。『帰る』っていうのは、なしだよ。それ以外で何か、先輩を思いとどまらせる方法はある？」

「知るか。『帰る』が封じられた時点で僕は答えるべき選択肢をなくしてる」

面倒くさそうに答えると、霧矢は雨野家のブロック塀に寄りかかった。スキー場のナイターの光が夜の街を照らしている。

二人とは距離をとって、家のまわりをうろろろしていた霜華が近づいてきた。

「ねえ、二人とも、会長さんを止める方法を思いついたんだけど……」

「とりあえず、聞くだけ聞いておこうか」

霜華が小声で話すと、霧矢は即刻拒絶の意志を示した。

「確かにその方法は一番確実な方法かもしれん。しかしな、そんな乱暴なことを実行に移してみる。あの会長のことだ、本気で僕らを潰しにかかってくるぞ。そして、その作戦が成功したとしても、間違いなく霜華、お前は無理やりにも契約を迫られるし、お前がダメなら本気で有島先輩に迫ってくるだろう。どんな手を用いてもな」

「あたしは霜華ちゃんの作戦に賛成よ。乱暴だけど確実。それに雨野先輩を直接傷つけるわけじゃないし、結構いい作戦だと思うけど」

「もし、成功したとして、霜華や有島先輩を会長からどう守るつもりだ。会長は魔族を倒すくらいは朝飯前だっことはお前らも知ってるだろう」

晴代が小声でその方法を述べた。即答できるような内容ではなか

ったので、霧矢はここではその回答を保留し、晴代に新たな提案をした。

「その答えは今すぐ出せない。だから、とりあえず今日のところは帰ろう。有島先輩と相談した上で決めよう」

晴代は霧矢がただ帰りたいたいだけではないのかと、不満そうだったが、今すぐに決められないことであることも確かだった。渋々ではあったが、今日のところは引き揚げるということに同意した。

「じゃあ、また明日学校で。その時に有島先輩に」

「ああ。僕も僕なりの答えを出してみる」

手を振ると、二人は家の中に入った。霜華は無言だった。霧矢も答えを出すことができず、黙ったままだった。

*

(やっぱり、そうそう簡単に見つかるものじゃないわね…)

駅の改札口で万華鏡のような筒を持ち、終電の時間まで雨野は利用客を眺めていた。しかし、通り過ぎる人間はどれも、何かしらの魔力を放出していた。

魔力分類器を手に入れてこれほど役に立ったと思っただけではない。今までは、道行く人を眺めて「あの人はこんな属性をもっているのか。ふーん」くらいにしか使い道がなかった。しかし、今では雨野の目的を達成するための最大のツールとなっている。しかし、これも有島から貰ったものであるということを考えると、少し心に引っ掛かるものがあったのも確かだった。

終電の中で、雨野は筒を目に当てながら、列車のすべての車両を回った。乗っている人は変わった行動をする女の子を奇異の眼差しで見っていたが、もはや今の雨野には何の意味もなさない。魔族を見つけ出し、何が何でも契約する。ただそれだけが今の彼女を動かしている。

駅に停まることに新たに乗り込んでくる乗客はすべてチェックす

る。しかし、雨野の思いは天に届かない。あつという間に駅についてしまった。

肩を落として、雨野は電車から降りる。駅員、売店の売り子を全員チエックするが、それもまた単なる人間。ゆっくりとした足取りで駅舎から外に出る。もう日付も変わりかけており、スキーのナイター灯も消えて、商店街は薄暗くなっていた。

おととい、完成させたツリーの電飾が一人いない駅前広場を照らしている。有島や霧矢と作業してからわずかしか経っていないと言っのに、もうかなりの月日が経ったような気がした。

雨野としても、有島が協力してくれないのは、初めから大体予測はついていた。霜華も霧矢と契約する意志があり、その意志は強固なものだとわかっていた。

雨野は、ゲートはこの町の近くにあるということしか知らない。分類器を使えばゲートを見ることは可能だろうが、魔族の助けがなければただの人間は向こうの世界へは行けない。人は少ないがゲートに近いこの町と、近場で一番人の多い病院のある町を重点的に探すのが良策だろう。

デッドラインまであまり時間はない。金曜日までに絶対に契約しなければならぬ。強力な火の魔族に出会えれば人を殺めずに済むが、そんな淡い期待はしない。いや、魔族に出会うこと自体が淡い期待なのかもしれない。でも、それだけは諦めたくない。

ある日、気が付いたら、護は突然意識を失っていた。どうしてなのかわからず、ただ嘆いていた。穏やかな日常はその日を境に色褪せていった。両親は不和になり、お互いを避けるように二人とも家を空けがちになった。たまに帰ってきては、生活費を置いて行くだけだ。

行き場のないイライラを解消するために何でもやった。空手、柔道、剣道を練習し、夜の街に繰り出して町をうろついている不良を叩きのめしたりもした。しかし、気分は少しも晴れなかった。暗い

気持ちも表情にも出ていたのか、かつての友人も自分を避けるようになっていった。気が付いたら、一人ぼっち。友達は誰一人として寄り付かず、ただ学校と誰もいない家を往復するだけ。暇さえあれば、護の見舞いに通う。そんな生活だった。そして、知り合いが多く進学した隣の高校ではなく、中学校のすぐそばにあるあまり人氣のない高校に進学した。

そこで出会ったのが……

（私は愚かかもしれない……それでも、私はこの道を選ぶ。護を助けてみせる！）

ポケットから定期券を取り出す。これがいらなくなる時が来るとそう信じたい。いや、そうさせてみせる。

護が倒れたから家族が壊れた。ならば、護が快方に向かったら……魔力分類器を握りしめ、雨野は歩き出した。

大切な人への想い 4

十二月十八日 火曜日 晴れ

「確かに、そうすれば…問題は…ほとんど…解決する…でしょうね…」
「ええ。ですが、非常に乱暴な方法ですし、僕もあまり気は進みません。それにそう簡単に決めてしまっていないようなものではないと思います」

晴代を締め出し、放課後の生徒会室で有島と二人きりで霧矢は話していた。霜華と晴代の提案は非常に効果的な反面、その後、また別の問題を引き起こしかねない。

有島も悩んでいた。概要はあらかじめメールで伝えておいたが、改めて面と向かって説明すると、それが一段とよくわかる。有島は完全にやつれ果てており、学校に来るのも苦痛のようだった。言うまでもなく雨野は今日も欠席している。

「先輩… 本当に僕が招いたことです。僕のことを気に入らなければ、光の剣で斬られたとしても文句は言いませんよ」

冗談で励まそうと思ったのだが、それに反応する気力も失われていた。うつろな目で机を見つめている。天使の副会長はもはや、抜け殻としか形容できなかつた。

「… 光里ちゃんを守るために…私…」

一言一句がかすれている。聞いている霧矢も辛かつた。しかし、ここで答えを出さなければ、本当に雨野が天罰の代行者になってしまつかもしれない。

「… 上川さんは…それでいい…と…言っているんですか…？」

「ええ。あいつはむしる進んでそれを望んでいます。その覚悟も十分にあるようです。僕的には気に入りませんけどね」

晴代は問題ない。しかし、霜華がどうも渋っている。会長を無力

化する作戦は賛成だが、有島・霜華の防衛策には手放しで賛成することはできないと言っていた。有島を守る方法については別に異議はないものの、自分は極限状態に陥るまでは不要と言っている。

霧矢としても、別にそれならばそれでも構わないと思っている。問題は有島がどう思うかということだ。有島がプラン全体に反対するならば、計画を実行に移すことで有島に迷惑をかける恐れがあるので、計画は中止となる。霜華と同様に、作戦自体には賛成するが、防御策は必要ないのであればそれはそれでよい。

霧矢は有島の回答を待った。

「わかりました。では、上川さんをここに呼んでください」

霧矢は廊下で待っていた晴代に声をかけた。晴代が生徒会室に入ってくる。

決然とした声で、有島は晴代に言った。

「上川晴代さん。あなたは私と契約する気があるんですね？」

「はい。先輩と契約してしまえば、雨野先輩も先輩に手出しはできないはずですよ」

「契約に当たって、いくつか注意事項があります。気が進まないのなら、断っても結構ですよ」

晴代は唾をのみ込んだ。

「まず、一つ目。いったん契約をすると、簡単には解除できません。無理やり解除しようとするとお互いが命に関わりかねないダメージを受けます。ただし、お互いの信頼が失われたときはダメージを受けずに契約は自然消滅します」

晴代はうなずいた。有島は了解の意を示すと、続けた。

「次に、二つ目、人間は契約すると、魔法攻撃に対する耐性が低下します。護君のように呪いにかかりやすくなったり、普通の人間なら平気な術でもダメージを受けたりします。それでも、よろしいですか？」

晴代がうなずくのを見て、有島は瞳を閉じた。

「最後に、魔族と契約した人間は、契約異能という術が使えるよう

になります。あなたは火の人間ですので、炎や熱の異能が目覚めると思われず。しかし、その術が暴走する可能性も否定できません。下手をしたら力に溺れて自滅する可能性もあります。その覚悟はありますか？」

晴代が返事をする、有島は目を開けた。

「わかりました。では、少し痛いですが、我慢してくださいね」

椅子から立ち上がると、生徒会室にある文房具の引き出しを開ける。カッターナイフを取り出した。

「お互いの血で、お互いの体に名前を書き込みます。そうですね……手の甲にしましょうか」

カッターで有島は自分の指を突き刺した。赤黒い血が滲み出てくる。

晴代の手の甲に、自分の名前を書き込んでいく。書き終わると、赤い血文字が変形し、護のものとよく似た紋様が赤く光ると消えた。晴代も自分の指を切り、有島の手の甲に、名前を書き込んでいく。同様に血文字が変形し白い紋様が有島の手の甲で光ると消えた。

次の瞬間、有島から眩い閃光が光り、晴代から爆炎が生じた。とつさに霧矢はその場に伏せた。気が付いた時には生徒会室は黒こげになっていた。

「……契約は完了しました」

「……うん……」

二人ともこの惨状は予測できなかったらしく、啞然としていた。

二人は全くの無傷だったが、契約に立ち会っていた霧矢は爆風のあおりをもろに受けて髪型が変わっていた。

「霧矢……大丈夫？」

「……ここは天国か？」

顔のあちこちに火傷を作り、髪の毛の焦げた霧矢は、冗談を言うと、気絶した。有島が、霧矢に駆け寄り、手をかざす。

光の治癒術で霧矢の火傷が治り、霧矢は完全に元の状態に戻った。

「とりあえず……片付けませんと……」

「どうした！ 何があった！」

爆音を聞きつけ、西村と雲沢が生徒会室に駆け込んできた、が、二人が見たものは絨毯爆撃の跡地のような生徒会室に横たわっている男子生徒と、片付けている女子生徒二名だった。

「全く、死ぬかと思っただぞ！」

放課後の帰り道、霧矢は晴代に対し文句を垂れていた。しかし、これは晴代に言っても仕方のないことでもあった。どちらかという、霧矢に退避を勧めなかった有島のせいである。

晴代に目覚めた契約異能は、手に触れたものを熱するという原始的なものだった。帰り道で晴代は雪壁を融かして遊んでいた。

雪玉を作り、手であつという間に融かす。見ていて面白いが、何かの役に立つかどうかと言われたら微妙だ。お湯を一瞬で沸かせるとか、そんなところだろうか。ただ、晴代は魔族と契約できたという事で気分が高揚し、恍惚状態になっていた。

しかし、考えてみたら、晴代に首を絞められたら焼き殺される可能性もある。リアンの言った通り、証拠は残らない。凶器が何なのかは全くわからないまま迷宮入りになるだろう。

「…で、今日実行するのか？」

「うん。絶対に雨野先輩を殺人者なんかにはさせない！」

「僕は見てるだけだぞ。立ち合いはするが協力はしない。お前と霜華でやってくれ。ピンチになったら逃げる手助けはしてやるが、戦闘には参加しないからな」

ため息をつきながら、晴代の明るさに呆れる。雨野の戦闘力をいささか甘く見過ぎているような気もする。

「いいか。僕は警告したからな。もし会長とやり合って大けがをしたとしても、僕に文句を言うなよ。いくら契約異能を手に入れたからといって、そう簡単に勝てると思うな！」

半雪女+熱を操る女 vs . 浦高史上最凶の会長となるとどちらが勝つのか。もつとも、直接戦闘を行うのが目的ではないので、戦い

にならないことを祈りたいが。

今日も収穫はゼロだった。近隣の町をすべて回ったが、魔族は一人もいない。この調子だと、本当に不本意だが、腕力に訴えざるを得ないかもしれない。その対象が有島か霜華のどちらになるかはわからないが、そんな結末にはしたくない。

人生とは時に残酷だ。大切なものと大切なものを秤にかけて、どちらかを選ばなくてはならないときがある。そして、どちらを選んだとしても常に後悔が付きまとう。そういうものだ。

残りは、水、木、金の三日しかない。金は締め切りなので、実質的には二日半だ。金曜の終業式は生徒会長としてのスピーチがあるが、そんなことは秤にかけるまでもない。

(…啓子…ごめん。私は…親友に迷惑をかけてばかりだ……いや、もう私のことなんて友達じゃない、とも思ってる?)

ホームに降り立つ。ゆっくりと終電が駅から出ていく。

街灯が薄暗く照らしている雪道をとぼとぼと歩く。真冬の夜の十二時前に外を歩いている物好きはどこにもいない。

いや、いた。

「……三条。あんた、私の家の前で何してるわけ?」

(ゲツ……! 隠れているのになぜバレた?)

雨野には確実に見えない場所に霧矢は隠れていたはずなのに、見破られてしまう。息を殺して知らぬふりをしていたが、見つけ出された。

「……か…会長…お久しぶりです。何でここに隠れてるってわかったんです?」

「そんなに齒をガチガチさせてれば、普通に聞こえるわよ。どれほどの間待ってたわけ?」

「は…八時から…ずっと…」

寒さで凍えながら、電柱に寄りかかっている霧矢を見て、雨野はため息をついた。よく凍死しなかったものだと半ば呆れるとともに、半ば感心した。

「それで、わざわざ私に何の用？」

「…：…：それでは、た…：単刀直入に言います。か…：会長の持つている魔力分類器を、ぼ…：僕たちで、あ…：預からせてもらいます」

電柱の下から立ち上がり、雨野から間合いを取りながら霧矢は言い放ったが、寒さで声が震えているため全く凄みがない。雨野は短く息を吐き、首を横に振った。

「そんなのに応じるとでも思っているの？ 魔力分類器は私の計画に必須のものよ。あれがなかったら護を助けることができない」

霧矢は保温水筒のふたを開け、中に入っているブラックコーヒ―をコップに注ぎ飲み下す。熱い液体のおかげで寒さが少し和らぎ、まともに話すことができるようになった。

「僕としては、会長が応じる気がないなら、別にそれはそれで構わないと思つてますよ。確かに浦高の会長が殺人者になるのは嫌ですが、僕に実害があるわけじゃないし」

霧矢は視線を雨野に合わせずに、空になった水筒を振った。

「あれ、もうなくなっちゃったのか…：もつと飲みたかったのに」

水筒をカバンにしまうと、霧矢は雨野を見た。

「ただ、僕はそれでよくても、あいつらはそうは思つてないみたいなんですよ。ですから、僕はケガ人が出る前に、あなたを説得したい。それでうちの薬品を使う羽目になるのは願ひ下げなんです。ですから、魔力分類器を渡してください。火の魔族を探すのなら協力しますから」

「嫌だと言つたら？」

「別に。僕は会長に対しては何もしません。返り討ちにされて大けがをするのはごめんですから。ただ、後ろには注意した方がいいですよ」

霧矢が言い終わると、雨野の後ろに霜華が現れた。雨野は振り返る。

「こんばんは。霜華ちゃん。私と契約してくれる気になった？」

「いいえ。会長さん。それよりも、誰かいい相手を見つけた？」

銀色の月の光に照らし出された霜華の黒髪がなびき、より一層雪女らしく見えた。妖艶な微笑みを浮かべ、霜華は雨野と対峙した。

「……魔力分類器を渡してください。雨野先輩！」

霜華と挟み撃ちにする形で、晴代が姿を現した。

「これはこれは。こんばんは。晴代ちゃん。私の邪魔をしに来たつてわけ？」

「ええ。ですが、先輩の邪魔ならもうすでにした後です」

「へえ。何をしたのかしら？」

晴代はスチール缶を取り出し、右手で握った。缶が赤く光り、どろどろの銑鉄となって地面にしたり落ちた。雪の上に落ち、ジュワツという音を立てて光を失う。

霧矢は雨野が奥歯を噛む音がここまで聞こえた気がした。

「あたしが先に有島先輩と契約しました。これでもう有島先輩は先輩と契約できない！」

悔しそうな表情を浮かべ、雨野は晴代を睨みつける。高確率で使うことになる保険が潰されたのだ。雨野の計画は事実上頓挫してしまったことになる。残る知り合いは霜華だけだ。

「……三条、あなたは霜華ちゃんと契約したの？」

「さあ、それはどうでしょう。ご自分で調べたらどうです。その魔力分類器で」

雨野は不敵な笑みを浮かべる。

「どうせ、私を取り出した途端、奪うか、破壊する気ですよ。それくらいの予測はつくわよ」

「さすがは会長。我が生徒会のリーダー、雨野光里はそうでなくては」

「お褒めの言葉ありがとう。私の信頼できる部下、三条霧矢」

その言葉が宣戦布告だった。霜華と晴代が雨野に向かって走り出す。霧矢は腕組みして雨野家のブロック塀に寄りかかって観戦していた。

霜華が数個の氷の礫を雨野に向かって飛ばした、が、雨野はすべてかわしきった。その隙に晴代が雨野のカバンをつかみ取るうとするが、それも器用にかわした。二人の攻撃を見切って大きく飛び上がり、ブロック塀の上に立つ。

「私を甘く見てもらっても困るわよ。二人とも」

霜華の攻撃は遠距離でも届く反面、見切られると容易にかわされてしまう。逆に、晴代の能力は直接触れていないと効果がないが、いったん触れてしまえば相手が普通の人間であるなら一撃で倒せるもつとも、これは殺し合いではないので晴代も加減して火傷を負うくらいの威力にとどめるだろう。

「先輩！ できれば誰もあたしたちはケガ人を出したくありません！ お願いですから魔力分類器をこちらによこしてください！」

雨野は二人を無視して、霧矢の脇に降り立った。

「三条。あんたはどうして戦おうとしないわけ？」

「季節外れですが『飛んで火に入る夏の虫』って言葉をよく知ってるからですよ。僕がここにいるのは、万が一この三人の誰かがケガをしたときの救護のためです」

片目を瞑って、霧矢はいつの間にか自動販売機で買ってきたコーヒーを飲みながら、面倒くさそうに答えた。雨野はため息をつく。

「この二人も、あんたと同じくらいの理解度があるとよかつたんだけどねえ」

「言い訳を言わせてもらおうとしたら、僕は一応二人に警告しましたが、でも、二人ともやると言って聞き入れようとしませんでしたから。」

残念ながら」

霧矢も雨野と一緒にため息をつく。空き缶をゴミ箱に向かって放り投げた。

「この直接戦闘に関してだけ言えば、僕の立場は中立です。できれ

ば、僕を攻撃しないでください、とだけ言っておきます」

霧矢はそう言うと、雨野から距離をとる。雨野は二人に向かって身構える。

「二人に忠告よ。痛い思いをしたくなかったら潔く退きなさい。殺しはしないけど、金曜日まで動けなくなるくらいのダメージは受けると思ってた方がいいわよ」

晴代と霜華も身構えた。両者とも退く気配は微塵も感じられない。霧矢はうなだれた。

「そうですね、ならば、私たちも会長さんを金曜日まで動けないようにするまで。そうすれば、魔力分類器を奪わなくても、すべて解決ですよ！」

霜華が氷の剣を握ると、思い切り飛び上がる。空中で一回転し、雨野に斬りかかった。雨野は余裕の笑みを浮かべながら、左手で霜華の柄を握る手を殴りつけ、右手で正拳を打ち込む。霜華は剣を取り落とし、雨野の前方に倒れ伏した。次の瞬間、背後から晴代が近寄り、雨野のカバンを燃やそうとするが、雨野の裏拳が当たり、弾き飛ばされる。五メートルほど後方に吹き飛ばされ、鈍い音とともに仰向けに地面に叩きつけられた。

「がはっ！」

晴代はそのままノックアウトされた。霜華の方を見てみると、意識はあるようだった。しかしものすごい痛みを感じているのを見て取ることができた。

霧矢は、二対一をものともしない雨野の腕に、改めて舌を巻いていた。

「どう？ 力の差がわかった？ それでも向かってくるのならこっちもギアをもう一段階上げるけどどうする？」

霧矢は雨野の脇に立った。

「もう十分だ。会長が喧嘩の達人だってことはこれでわかっただろ。これ以上戦っても、ケガが増えるだけだ。帰るぞ」

「霧君は…会長さんが、殺人者になっても…いいって言うの？」

霜華が痛みをこらえながら、絞り出すような声で訴えかけた。霧矢は白い息を吐き答えた。

「お前こそ。『覚悟があるなら止めはしない』と言ったのは誰だ？」
霜華は黙ってしまふ。霧矢は続けた。

「確かに、会長には人殺しにはなっただけではない。でもな、会長だつてそれくらいはわかつてると思うぞ。僕は会長が無理やりお前と契約しようとしたなら止めるが、他の魔族とお互い合意の上で契約するのなら、もはやそれは会長の勝手というやつだ。そう思う。僕たちがそれに関してどうこう言うのは、余計なおせっかいとしか言いようがない」

霧矢が霜華と晴代を助け起こすと、雨野はあくびをする。

「そろそろ、私は明日に備えて寝たいんだけど、もうお休みを言うていい？」

「ええ。日付も変わりましたし、こつちこそ乱暴な真似をしてすみませんでした」

雨野は家の鍵を開けると、霧矢の方を向いて微笑んだ。

「三条。私はあんたみたいな理解ある後輩を持って幸せだよ」

「会長。もし、あなたが霜華と無理やり契約しようとした時は、僕はあなたを止めます。誰と契約しようとする時は、脅迫を用いた場合は別です。それだけはきちんと言っておきます」

雨野はこちらを見ずにうなずくと、ドアを閉めた。

大切な人への想い 6

十二月十九日 水曜日 雪時々曇り

「そうだった…んですか…」

「まあ、僕と霜華が契約してしまえば、もう会長の計画は事実上実行不可能です。あと二日で見つけ出せるとは思えません」

「しかし、お前らも勇気あるよな。会長を闇討ちにしようだなんてさ」

「見事に返り討ちにされたがな。僕は無傷だったけど」

放課後の生徒会室にいるのは、有島と西村だけだった。会報の編集も終了し、冬休み前の生徒会の仕事は全部終了した。他のメンバーはさっさと帰ってしまった。

お茶を飲みながら、霧矢は完成した会報の原稿をめくる。

「それで、どうなったんだ？」

「霜華はともかく、晴代は全身打撲で体が動かせずに寝込んでるよ。まあ、うちの薬局の湿布がまいどありだったけど。雲沢さんならともかく、あんな攻撃一日じゃ治らん。だから、あれほど忠告しておいたと言うのに……」

「何でガールズがケガして男のお前が無傷なんだよ」

「言っただろ。僕は戦わなかったって」

「俺だったら身を挺してでも、女の子を守るぞ。ヘタレのお前とは違ってたな！」

指を霧矢に突きつける。霧矢は西村の方を見ずに湯飲みを傾けた。「そうは言うが、仮にお前があ場所に居合わせたとして、二人と一緒に戦ってみる。間違いなく、今頃、お前は大学病院のICU送りにされて、点滴と全身麻酔だ。女の子だから手加減されたんだ。男だったら間違いなく半殺しにされてる」

うっと凶星を突かれると、西村は霧矢の隣の椅子に腰を下ろした。

急須を傾けて自分の湯飲みに緑色の液体を注いでいく。

「しかしよう。お前、考えを変えたのか？」

「何がだ」

西村はカバンから持参してきた菓子の袋を開けて、机の上にはらまいた。霧矢はサラダおかきの袋を自分の方に引き寄せた。

「いただきます」

「好きに食ってくれても構わんが、食うんだったら俺の質問に答え
てくれ。その菓子を持ってきたのは俺だぞ」

「で、質問って何だ。霜華や晴代のスリーサイズとかか？ 残念だ
が僕は知らん」

「…な、なぜ、お前は、俺の心が…読める…って違う！ どうして、
会長を止めようと思わなくなったのか、聞きたいんだよ！」

霧矢は湯飲みに残っているお茶を飲み干すと、急須を手元に引き
寄せた。

「どうして…か。会長の気持ちもわからなくもないから、かな」

おかわりのお茶を注ぎ、おかきの個包装を破いて、霧矢は続けた。
「正直な話な、僕としてはどうでもよくなった。会長が僕たちを巻
き込もうとしてるなら、それは困るから止めるけど、会長が一人で
やる分には別に会長の自己責任だろって思ったのさ」

霧矢はボリボリとおかきを噛み砕く。黙ったまま西村はお茶に口
をつけた。

「…それにしても、もし見つからなかったら、会長はどうする気な
んだろうな」

「あの決意から見て、諦めたりなんかしないだろう。霜華を襲って
もおかしくはないと思う」

「…お前、あのゴリラ会長から彼女を守るとい意志はあるのか？」
「ない」

霧矢は即答する。あまりの潔さに西村はため息をついた。

「契約しちまうのが一番手っ取り早くて安全だが、それをあいつは
渋ってるんだよ。本当に、あいつは僕と契約したいのか、したくな

いのかはつきりしてほしいぜ」

「もう少し、男らしい一面を見せてやったらどうだ？」

西村は菓子肴を有島にすすめたが、有島はつまもつとしない。疲れと憂いの混ざった表情で霧矢を見た。霧矢も苦笑いで返して、先ほどの西村の質問に答えた。

「相手が会長じゃなかったら別にいいが、会長相手に肉弾戦を挑むほど、僕はバカじゃない」

大粒の雪が降りしきる外を眺めながら、霧矢は茶菓子を口に運ぶ。西村はゆっくりと立ち上がると、生徒会室にあるパソコンの電源を入れた。

「うちの生徒会あてにメールが来てるぞ。差出人は会長のパソコンのアドレスだ」

「何と…書いてあるんですか？」

「……生徒会のみんなへ、終業式のスピーチを私の代わりによるしく。ごめんなさいダメな会長で。追伸、啓子へ。晴代ちゃんとの契約おめでとぅ……だ、そうです」

西村が暗い声で読み上げると、有島は肩を落とす。

「…私は間違っていたとは思いませんが…光里ちゃんは私のことを恨んでいるでしょうね…」

涙が机に零れ落ちた。見ていられなくなったのか、西村が霧矢を生徒会室の外に連れ出した。

「なあ、精神安定剤とか抗鬱剤とか、何かいいものはお前の薬局にないのか？」

「……あることにはあるが、処方箋がないと無理だ。それに、そういうもので一時的に何とかしたところで根本的な解決にはならん。自分で何とかしようという思いが必要だ」

「じゃあ、薬でダメならどうすんだよ。このままじゃ先輩は潰れちまうぞ」

霧矢はため息をついた。どうしろと言われても、こればかりは霧矢にできることを超えてしまっている。一番の解決策は、雨野を説

得して登校させることだが、もはやそれは無理だと証明されている。火の魔族を探し出して、護の呪いを解いてしまえば問題はすべて解決するが、それもほとんど実行不可能だ。属性が限定される分、確率的には雨野より五倍難しい。

雨野の計画を百パーセント不可能にするために、霜華と有島を契約させ、魔力分類器を破壊するというのが昨日の作戦だった。霧矢は前者には賛成だったが、後者には賛成できなかった。

いつのまにか、別に雨野が誰を殺そうと、霧矢にはどうでもいいことに感じられるようになっていた。その殺される誰かが自分の大切な人でなければ別に気にすることではない。中途半端なエゴイストはそう思うようになった。

しかし、霧矢と雨野の間の心の距離と、有島と雨野の間の心の距離ははるかに違う。二人は親友であり、お互いを必要としている仲だ。それは疑いが無い。

「人の心とはわかりづらい。そうだと、ああ、わかりづらい。だからめんどくさい」

廊下をうるつきながら霧矢はひとり言のようにつぶやいた。西村も同じようにうるつく。

「三条、お前は どうしてそんなに物事を軽く見る。面倒なことばかりと思うわない」

「それが人間ってもんだろ。お前だってそうじゃないのか？」

霧矢は生徒会室の扉を開ける。西村も軽く息を吐くと、霧矢に続いた。

それからはお茶を飲みながら下校時間まで三人で過ごしていた。有島は涙を浮かべ、霧矢と西村は見つめふりを続けていた。雰囲気は非常に気まずかったが、途中で抜け出せるような空気でもなかったからだ。

「結局、俺たちは何もできない。寂しいもんだねえ」

「いつまで、たそがれてるつもりだ。僕たちにできることなんて何

もないんだよ。あつたとしたって、そういうものに限って実行不能だったりするもんだ」

有島が電車で帰ってしまうと、霧矢と西村は駅のベンチに座って話し込んでいた。西村の乗る電車が来るまでまだ数十分の余裕がある。霧矢とは反対側のベンチに腰を下ろし、西村は腕の力を抜いていた。

「少なくとも、お前の中途半端なエゴイストという自己表現は的を射ていると俺は思う」

「そいつはどうも。だが、どうして的を射ていると思う？」

お互いの顔は見えないが、お互いに何を思いどんな表情を浮かべているかは容易に分かった。

「三条、お前、三か月前のことを覚えてるか？」

霧矢と西村は同じクラスで席も近い。入学して初めてできた中学校の違う友人だった。ただ、性格は似ておらず、反対と言ってもいい。どちらかというと熱くなりやすい西村とどちらかというと冷めている霧矢はお互いを補い合う友人だった。

何事にもアグレッシブな西村は、部活よりも先に生徒会に入った。しかし、面倒くさい仕事この上ない生徒会に一年の四月から入る物好きなどいないため、一年生は彼だけだった。そのまま、衣替えと共に新旧の役員は交代となり、旧役員の推薦もあって、一年生でありながら、生徒会会計というポストをゲットしてしまった。

しかし、今年はやる気のない連中の多い年で、体育祭の時は大パニックになった。その時に西村が霧矢に頼み込み、体育祭の期間限定という条件付きで霧矢は生徒会に入ったのだ。そして、雨野から予想以上の高評価を受け、命の危険を覚えた霧矢は正式にメンバーとなった。

そこまで考えて、霧矢は晴代も自分のたどった道を同じようにたどることになるのではないかと考えた。そうだとすればご愁傷様である。せいぜい生徒会執行部として頑張ってくれ。

「お前の熱意に負けたおかげで、雨野会長とゆかいな仲間たちの一

員にされたっけ」

「…お前は、基本的に自分の損得で動く。でもな、お前は決して純粹なエゴイストじゃない。純粹なエゴイストだったら、そう簡単に俺の提案に乗ったりなんかしないはずだ」

「僕はお前の頼みを最初は断ったぞ。それでもあんまりしつこく頼み込むから」

「でも、お前は最終的にはオーケーしてくれた。しつこく頼まれるのが嫌だったら、俺とは絶交しちまえばよかったのさ。お前は俺のことなんてそれほど重視してなかっただろ。生徒会で使う労力と俺の利用価値を比べたら、そんな答えなんて考えるまでもないはずだぜ」

霧矢は西村の言葉に薄ら笑いを浮かべた。軽い声で言葉を返した。「確かにな。それは認めてやるよ。西村、僕にとってお前の価値なんて大したことはない」

「軽くひどいことを言ってくれるな。三条、お前はやっぱり冷酷なやつだ」

何を今更、と霧矢はつぶやいた。苦笑いして西村は続けた。

「でも、お前は俺と絶交はしなかった。こうやってダチとしての付き合いも続いているし、生徒会も渋々だけど引き受けてくれて、仕事もきちんとしてくれたしな」

霧矢はあくびをする。鉛色の空を眺めながら、西村の話を聞き続ける。

「だから、お前は、中途半端なエゴイストだ。あくまで損得で動くが、その行動パターンに例外がいくつも存在する。だが、往々にしてその矛盾は物事を良い方向に導いてきた」

これは西村なりの褒め言葉だろう。

「はいはい。で、何が言いたいんだ？」

「お前は、別にエゴイストでもいいって言ってるんだ。今度もその矛盾で物事を良い方向に運んでくれよ」

「……ははは…まあ、頑張ってみるさ。お前も、その暑苦しさで冷

たい世界を融かして見せる」

二人で大笑いすると、電車の到着を知らせるアナウンスが鳴った。手を振ると、西村は改札口に消えていった。

大切な人への想い 7

「あいたたた…」

「何だ。来てたのか」

家に帰ってみると、薬局のソファ―に腰掛けている晴代がいた。年寄りのように腰をさすっている。霜華はもともケガも重くなかったので、生活に不自由しない程度に回復していた。

「まいどあり。そして、お大事に」

晴代の脇にある湿布薬の入った買物袋を見て、霧矢は憎まれ口を叩いた。

「うるさいわよ。黙らないとあなたの首を焼き切るわよ」

「それが昨日、気を失ったお前を家まで運んでやった人間に言うセリフか？」

晴代は黙ってしまう。

「晴代。これでわかっただろ。会長を説得するなんて無理だし、ましてや、倒しても止めるなんて愚の骨頂だって」

「霧矢、有島先輩はどうだった？」

痛みをこらえながら、晴代は霧矢に尋ねた。霧矢は答えずに腕を交差させる。

「そっか…やっぱり…気にするか」

「まあ、何とかなるだろ。それよりも、お前は どうするんだ」

霧矢は尋ねる。晴代はぼかんとした様子で霧矢を見ていた。

「生徒会の仕事だ。辞めるんだったら、会長のいない今がチャンスだぞ。結構お前は会長のウケも良かった。早めに辞めないと、僕みたいにも無理やり残留させられるぞ」

何を言っているんだ、という嫌悪の眼差しで晴代は霧矢を見る。

霧矢は無視して、コートをハンガーに掛ける。

「ねえ、霧矢。あんたさ、他にもっと大切なことがあるでしょ」

「それがどうした。どうせ、僕たちには何もできないのだ。お前だっ

て、昨日身にしみてそれがわかっただろうに」

晴代はうつむいている。あまりにもきつい言葉だったからだ。霧矢はため息をつくと、ソファーに体を投げ出した。霜華は三人分のお茶を入れた。

「どっちにしる、今日は水曜日だ。後二日で見つけ出せるとでも思つか。無理だね。だから心配するだけ無駄だろうさ。それよりも、護をどうやって治すかの方だろうな」

「で、その答えが、火の魔族を見つけ出す。しかないのが困りものだよう」

霜華が霧矢の隣に腰を下ろした。霧矢のお年玉で買った新品の洋服を着ている。

「なあ、お前、向こうに一度帰って、探して来れないか？」

「……うーん。でも今の状況で帰るのは結構危険だし、それほどの使い手となると、多分純血の魔族だから、契約者なしじゃ下手したら命に関わるし……」

ゲートはくぐるだけでもかなりの魔力を消費する。下手をしたらそこで倒れてしまう可能性もある。誰か契約主候補の人間を連れて行き、向こうで契約させてこちらに来るとというのが安全だが、霜華曰く、内戦状態の向こうは誰かを連れて行けるほど安全ではないらしい。

そもそも、霜華がこっちの世界に来たのは、戦乱から逃れるためだった。わざわざそんな危険なところに戻る必要はどこにもない。

「ごめん。ちよつとそれは……」

「わかつてる。無理言って悪かったな」

三人とも考え込んでいると、店の電話が鳴った。霜華がパタパタと駆け寄って受話器を取り上げ、笑顔で営業文句を言う。

「え…あ、はい。わかりました。少々お待ちください」

霜華は霧矢に電話に出るようにと言った。相手は名乗らなかつたが声は女性らしい。霧矢は不審に思ったが、電話に出た。

「お久しぶり。霧矢君。お姉さんのこと覚えてるかしら？」

(リリアン・ポーン……！)

「何の用ですか。僕はお断りしますよ。僕は嫌ですから」

霧矢の堅い口調に、二人とも霧矢の方を向いた。霧矢はリリアンの言葉を待った。

「あらあら、用件を聞く前に断るなんて、せっかちなのねえ」

相変わらずねちっこく、人をバカにするような声だ。

「そもそも、どうして僕の家電話番号を知っているのかをお聞きしたいですけどね」

「探偵さんに頼んだのよ。私たちの仲間のね。で、霧矢君。あなたは私たちに協力してくれる気になったかしら？」

「絶対に嫌だと、先ほど言ったはずです。あなたたちが何をしようとして勝手ですが、僕は、興味はありませんし、平穏な日常を壊さないでいただきたい」

怒りの形相を浮かべて、霧矢は答える。しかし、顔の見えない受話器の向こうの相手は平気で同じ調子で答える。

「そう言うなら、お姉さんも覚悟があるんだけどなあ」

「勝手にすればいい。そもそも、僕はまだ契約してないですよ。異能ありません」

「知ってるわよ。光里ちゃんから聞いてるわ」

霧矢の受話器への握力が強くなる。手を震わせて霧矢はリリアンの言葉を聞く。

「私たちが欲しいのは、霧矢君じゃなくて、異能の持ち主。聞いた話によれば、北原霜華ちゃんと、上川晴代ちゃんが異能を使えるって話じゃない」

霧矢の脳裏に電流が走った。霧矢は齒噛みする。

「……まさか、二人を巻き込むつもりか？」

「昨日、二人と光里ちゃんが戦ったでしょ。で、光里ちゃんは金曜日まで動けないようにしたと言ってたわ。まあ、賢い君なら、私はどう出るか。それくらいわかるんじゃないのかしら」

「ああ、大方予測はつくとも。よくもそこまで汚いことを思いつくものだ。リリアン・ポーン」

「最後の質問よ。光里ちゃんが明後日までに契約相手を探し出せなかったら、霧矢君、君が霜華ちゃんと契約して、手伝ってくれるかしら？」

「……絶対に断る。この女狐め」

霧矢はそれだけ言い残すと、受話器を叩きつけるように戻した。

「き……霧君……い、今、リリアン・ポーンって言ってなかった……？」

「……面白エ……テムエがそこまでやるっていうんなら、こつちも手加減はしねえぞ……」

悪鬼のごとく顔を歪め、口調が変わった霧矢を見て、霜華は一步引いた。

「霜華、晴代。二人とも明後日は他のところに隠れてる。ここにいと危険だ」

狂気の笑みを浮かべながら、霧矢は携帯電話を取り出した。

(いいだろう、西村。お前の言った通り、今回も中途半端を生かして、その矛盾で物事を良い方向に進めてやる。これで文句はないな) 別に雨野のように、自らそれを望んでいるのならばそれは本人の勝手だ。しかし、霜華や晴代のように望まないものを無理やり巻き込むというのなら、絶対に許すことはできない。

今回に限ってはエゴイストをやめてやる。誰かを守るために戦ってやる。そう決めた。

登録はしたが、かけることはないだろうと思っていたあの番号を選んだ。

大切な人への想い 8

十二月二十日 木曜日 雪時々晴れ

「それで、一応考えてはみたが、本気で貴様はやる気なのか？」

「ああ。ここまでバカにされて黙ってられるか。お前だって、親友が狙われてるんだぞ」

放課後の理科室には、無事な一年生、三人が集合していた。

霧矢は昨日、リリアンからの電話の内容をすべて文香に話した。

文香は霧矢の意図をくみ取り、明日、理科室に来るようにと言い残して、電話を切った。

「それでよう。三条、お前、どうやって立ち向かう気だ。相手は魔族なんだから」

「……できれば、戦いたくはない。向こうが仕掛けてこなきゃ戦う気もない」

西村は霧矢から一応何があったのかは聞いている。しかし、霧矢は有島には自分が話すまでは黙っているようにと釘を刺していた。

「これを貴様に渡しておこう。昨日作ったものだ。ただ、私としては使ってほしくはない」

「何だそれ、スプレー缶か？」

西村が怪訝な表情で空き缶くらいの大きさの筒を見つめる。特に何の変哲もないそれは、何の役に立つのかもはっきりしなかった。

「窮地に陥ったらそれを使い。簡単な催涙ガスと煙幕を組み合わせたものだ。しかし、簡単といっても効き目は十分だ。たとえ相手が魔族だったとしても、数分は動けなくなるだろう。その隙に貴様は逃げるか、奇襲をかけるとよい」

霧矢は礼を言うと、缶をポケットにしまった。文香は優しい表情を浮かべた。

「三条。私は貴様のことは嫌いではない。そういうたまには熱くな

れるところがな」

「よせよ。ミスマッドサイエンティスト。僕だつてこんなのはガラじゃない。でもな、霜華も晴代も僕にとっては大事なんだよ。そう思える存在なんだ。だからな、あいつらの平穩を害するような奴は放つちや置けねえんだ」

二人とも感心した声を上げて、霧矢を見た。霧矢は気恥ずかしくなり、後ろを向いた。

「じゃあ、昨日も連絡した通り、木村。お前ならあいつらからもノーマークのはずだ。明日、霜華と晴代を頼む」

「任せる。そして、三条。貴様も負けるんじゃないぞ」

「ああ。木村、西村。大丈夫だ。何とかしてみせるから」

「おっと。俺も戦うぜ。お前一人だけいい格好なんかさせるわけにはいかねえぞ」

西村が後ろから霧矢に肩を回す。霧矢は振り払った。

「お前な、何寝ぼけたことを言ってるんだ。僕は誰かを巻き込みたくないから戦うんだ。その対象にはお前も含まれてるんだよ」

昨日、西村の価値など大したことはないと言ったことを棚に上げて霧矢は啖呵を切った

「おうおう、嬉しいことを言ってくれるもんだ。だがな、久しく喧嘩もしてねえ。体がなまっちまってしょうがない。こんなに熱くなる展開をみすみす逃すほど馬鹿なことはねえぞ」

挑戦的な笑みを浮かべて、西村は霧矢の肩をつかんだ。

「ふざけんな。だったら、僕が戦う意味がなくなるわ」

「だったら、俺が代わりに戦ってやるうか。腑抜けた teme の代わりに」

際限なく言い争っていたが、いい加減に呆れた文香が近寄った。

「ギヤアアアアア！」

霧矢と西村の頭に濃硫酸を垂らした。焼けるような感覚を覚えた二人は流しにもものすごい勢いで駆け寄り、髪についた劇薬を洗い流した。

「全く、せつかく良い雰囲気であったのを、貴様らのつまらん喧嘩が台無しにしてしまったぞ」

文香がため息をつく。実験器具を片付け、白衣を脱ぐと、椅子に腰かけた。

「少なくとも、西村にとつても、晴代や霜華は大切な存在なのだろう。三条、足手まといにならなければ連れて行ってやればよいと私は思うが」

濡れた髪をタオルで拭きながら霧矢は西村を見た。

「いいだろう。覚悟があるなら、僕は止めない。ただ、死んでから文句は言うなよ。いいな？」

「理科室で『死んでから文句を言うな』というのはナンセンスだな。別にそんなことはない」

西村も髪を拭きながら、霧矢の問いの答えを返してきた。

「ちなみに、ケガしてもうちの薬は有料だからな。金は持ってこい」「ケチな奴だ。お前らしいと言えはお前らしいが」

二人とも苦笑いする。放課後の理科室に笑い声が響いた。

「ところで、あれから会長とは連絡が取れたのか？」

文香が曇った表情で尋ねた。残念ながらその答えはノーだった。何度も電話してみても着信が拒否されている。公衆電話もダメだった。メールを送ってみてもなしのつぶてだ。

だが、雨野とリアンが共謀しているわけではないようだ。それは確信できた。傷ついた二人を交渉の道具に使い、協力する気のない霧矢を無理やり従わせるなど、雨野が了承するはずがない。彼女は己の手だけを血で汚し、他の誰をも巻き込まないと決めているからだ。

もう残りは三十時間を切っている。雨野は何をしているのだろうか。

彼女の願いは叶わない。もはや、霧矢にはそれがわかっていて、理由も根拠もないが、それは運命づけられているような気がした。

だから、必然的にリリアンは魔族の力を求めて、確実に霧矢たちを襲ってくる。

彼女の力は未知数だ。実際に力を使うのを見たわけではないが、あの人を食ったような態度は弱い者にはできない。相当な使い手であることは雰囲気で行く。

それに対して、こちらは何の異能も持たない男子高校生二名だ。多少の武装はするが、ほとんど丸腰に近い。勝てる見込みがあるかといえば、聞かないでくれとなる。

(……何と無様なことか。息巻いていたとはいえ、冷静になればこのざまか)

それでも、戦ってみせると決めたのだ。エゴを一時的に置き去りにすると。少しは熱くなってみせるのだと。そう決めたのだ。

「西村。お前はこの戦いに何を望む。僕と組んで戦うことに何を求める?」

「決まってるんだろ。女の子たちを守ってみせるのが、漢気、いや騎士道でもんだからだ! 他に理由なんていらねえよ!」

「相変わらず、暑苦しい男だ。僕が少し熱くなったんだから、お前は少しクールになれ。そうすればお互いちょうどいいってもんだ」

十二月二十日 木曜日 雪時々晴れ

「それで、一応考えてはみたが、本気で貴様はやる気なのか?」

「ああ。ここまでバカにされて黙ってられるか。お前だって、親友が狙われてるんだぞ」

放課後の理科室には、無事な一年生、三人が集合していた。

霧矢は昨日、リリアンからの電話の内容をすべて文香に話した。

文香は霧矢の意図をくみ取り、明日、理科室に来るようにと言い残して、電話を切った。

「それでよう。三条、お前、どうやって立ち向かう気だ。相手は魔族なんだろ」

「……できれば、戦いたくはない。向こうが仕掛けてこなきゃ戦う

気もない」

西村は霧矢から一応何があったのかは聞いている。しかし、霧矢は有島には自分が話すまでは黙っているようにと釘を刺していた。

「これを貴様に渡しておこう。昨日作ったものだ。ただ、私としては使ってほしくはない」

「何だそれ、スプレー缶か？」

西村が怪訝な表情で空き缶くらいの大きさの筒を見つめる。特に何の変哲もないそれは、何の役に立つのかもはっきりしなかった。

「窮地に陥ったらそれを使い。簡単な催涙ガスと煙幕を組み合わせたものだ。しかし、簡単といっても効き目は十分だ。たとえ相手が魔族だったとしても、数分は動けなくなるだろう。その際に貴様は逃げるか、奇襲をかけるとよい」

霧矢は礼を言いつと、缶をポケットにしまった。文香は優しい表情を浮かべた。

「三条。私は貴様のことは嫌いではない。そういうたまには熱くなれるところがない」

「よせよ。ミス・マッドサイエンティスト。僕だってこんなのはガラじゃない。でもな、霜華も晴代も僕にとっては大事なんだよ。そう思える存在なんだ。だからな、あいつらの平穩を害するような奴は放っちゃ置けねえんだ」

二人とも感心した声を上げて、霧矢を見た。霧矢は気恥ずかしくなり、後ろを向いた。

「じゃあ、昨日も連絡した通り、木村。お前ならあいつらからもノーマークのはずだ。明日、霜華と晴代を頼む」

「任せろ。そして、三条。貴様も負けるんじゃないぞ」

「ああ。木村、西村。大丈夫だ。何とかしてみせるから」

「おっと。俺も戦うぜ。お前一人だけいい格好なんかさせるわけにはいかねえぞ」

西村が後ろから霧矢に肩を回す。霧矢は振り払った。

「お前な、何寝ぼけたことを言ってるんだ。僕は誰かを巻き込みた

くないから戦うんだ。その対象にはお前も含まれてるんだよ」

昨日、西村の価値など大したことはないと言ったことを柵に上げて霧矢は啖呵を切った

「おうおう、嬉しいことを言ってくれるもんだ。だがな、久しく喧嘩もしてねえ。体がなまっちまってしょうがない。こんなに熱くなくなる展開をみすみす逃すほど馬鹿なことにはねえぞ」

挑戦的な笑みを浮かべて、西村は霧矢の肩をつかんだ。

「ふざけんな。だったら、僕が戦う意味がなくなるわ」

「だったら、俺が代わりに戦ってやろうか。腑抜けたテメエの代わりに」

際限なく言い争っていたが、いい加減に呆れた文香が近寄った。

「「ギヤアアアアア！」」

霧矢と西村の頭に濃硫酸を垂らした。焼けるような感覚を覚えた二人は流しにもものすごい勢いで駆け寄り、髪についての劇薬を洗い流した。

「全く、せっかく良い雰囲気であったのを、貴様らのつまらん喧嘩が台無しにしてしまったぞ」

文香がため息をつく。実験器具を片付け、白衣を脱ぐと、椅子に腰かけた。

「少なくとも、西村にとっても、晴代や霜華は大切な存在なのだろう。三条、足手まといにならなければ連れて行ってやればよいと私は思うが」

濡れた髪をタオルで拭きながら霧矢は西村を見た。

「いいだろう。覚悟があるなら、僕は止めない。ただ、死んでから文句は言うなよ。いいな？」

「理科室で『死んでから文句を言うな』というのはナンセンスだな。別にそんなことはない」

西村も髪を拭きながら、霧矢の問いの答えを返してきた。

「ちなみに、ケガしてもうちの薬は有料だからな。金は持ってこい」「ケチな奴だ。お前らしいと言えばお前らしいが」

二人とも苦笑いする。放課後の理科室に笑い声が響いた。

「ところで、あれから会長とは連絡が取れたのか？」

文香が曇った表情で尋ねた。残念ながらその答えはノーだった。何度も電話してみても着信が拒否されている。公衆電話もダメだった。メールを送ってみてもなしのつぶてだ。

だが、雨野とリリアンが共謀しているわけではないようだ。それは確信できた。傷ついた二人を交渉の道具に使い、協力する気のない霧矢を無理やり従わせるなど、雨野が了承するはずがない。彼女は己の手だけを血で汚し、他の誰をも巻き込まないと決めているからだ。

もう残りは三十時間を切っている。雨野は何をしているのだろうか。

彼女の願いは叶わない。もはや、霧矢にはそれがわかっていた。理由も根拠もないが、それは運命づけられているような気がした。だから、必然的にリリアンは魔族の力を求めて、確実に霧矢たちを襲ってくる。

彼女の力は未知数だ。実際に力を使うのを見たわけではないが、あの人を食ったような態度は弱い者にはできない。相当な使い手であることは雰囲気で行く。

それに対して、こちらは何の異能も持たない男子高校生二名だ。多少の武装はするが、ほとんど丸腰に近い。勝てる見込みがあるかといえば、聞かないでくれとなる。

(……何と無様なことか。息巻いていたとはいえ、冷静になればこのぎまか)

それでも、戦ってみせると決めたのだ。エゴを一時的に置き去りにすると。少しは熱くなってみせるのだと。そう決めたのだ。

「西村。お前はこの戦いに何を望む。僕と組んで戦うことに何を求める？」

「決まってるだろ。女の子たちを守ってみせるのが、漢気、いや騎

士道ってもんだからだ！ 他に理由なんていらねえよ！」

「相変わらず、暑苦しい男だ。僕が少し熱くなっただから、お前は少しクールになれ。そうすればお互いちょうどいいってもんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2550z/>

Absolute Zero

2011年12月11日21時04分発行